
Hack Revolution

川瀬時彦

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Hack Revolution

【Nコード】

N3939H

【作者名】

川瀬時彦

【あらすじ】

俺達の生活に欠かせない情報収集機器であるDios。街にはその統括サーバーを狙うハッカーたちがたむろしていた。ある日、俺の前に突然現れた御影沙織。彼女は俺にハッカーにならないかを持ちかけてきた。彼女はいつたい何者なのだろうか？そして彼女の目的とは？

それぞれに問題を抱え抗う若者達は、その矛先をどこにも向けることもできず、知らないうちに手を取り合っていく。巧妙な作戦、緊迫の戦闘、一体彼らがその先に見出すものは何なのだろうか。

それぞれの想いが交錯する近未来SF青春小説。

Part・i (1) (前書き)

読者の皆様はじめまして。作者の川瀬です。

筆が遅く、なかなか話が進展しない当小説でございますが、少しでも気になったことがあればお気軽に感想くださいませ。参考にさせていただけうと思ひます。

それではどうぞよろしく。

Part・i (1)

朝、俺は無機質な電子音によって意識を呼び戻された。

ベッドの横に隣接する学習机の上から、それを手探りで取り上げる。

七時半。

この時刻を今俺が認識しているということはどうやら遅刻はしないで済みそうだ。

俺はそのままそれを左腕へとはめ、掛け布団を足でけり上げ、しっかりとしなない足取りで廊下を伝い、トイレに行った後、洗面所へ向かった。

鏡を覗き込むとうつろな顔。休み明けだったのにどうしたんだよ、俺。こんなんじゃ、今週もたねえぞ。

俺は蛇口から出る水を手で受け、それを豪快に顔へとぶつけ、両手ではほをたたいた。

寝ぐせのついた髪をくしで適当にとかし、整髪料を付けて全体的に適当なはねをつけた。

家着兼寝巻を制服に着替える。

カーテンの閉まったりリビングは薄暗く、キッチンの上には昨日夜に買っておいた食パンが置いてある。

食パンをトースターに放り込み、カーテンを開け、テレビをつけた。

いつも見ている朝の情報番組で天気予報を見ようとしたのだが、すでにそのコーナーは終わってしまったらしい。仕方ないので、俺はウインドウを開き天気予報のページへとび、この地域の降水確率を確認した。

「午前、午後とも0%です」と表示と共に音声が流れる。降らないに越したことはない。

そうしているとトースターがチンツと鳴った。焼きすぎて表面が

パリパリとした食パンを水で流しこみ、玄関になげてあるカバンを拾って、アパートを出た。

家から学校まで川を挟んで徒歩十五分。朝のホームルームのチャームが鳴っている間に俺は自分の席に腰を下ろす。

俺の席は窓際の一番後ろ。日当たり良好、ステルス性抜群、先生の居眠り発見者索敵レーダー網にも引つかかりづらいというベストポジション。一学期最初の席替えでこの席を手に来たのは非常にラッキーだった。といってもうちの学校じゃどうもこういう黒板から遠い席は人気がないようで、競争率は低く、余った席をあてがわれただけなのだ……

今日のホームルームも特に筆記する必要性もない事柄で、先生が事務的に欠席者を確認するぐらいだった。

「おい、一時限は物理で理科室だぜ」

机に突っ伏していた俺に光成みつなりが話しかけてきた。

「わかってるよ」

俺は筆箱をカバンから取り出し、この重たい体をひきづり後ろのロッカーまで行き、教科書を取り出し理科室に向かった。

理科室について席に腰を下ろす。

「この前出した課題集めるぞ、後ろの人集めて」

席の後ろの生徒が前に向かって課題のプリントを集めながら歩いてくる。

「望月くん、課題は？」俺の横にやってきた牧瀬まきせは後ろからかき集めたプリントの束を手に、両手を頭の後ろで組み椅子の背に寝そべり天井を見つめていた俺の顔を覗き込んだ。

クルクルとカールのかかった彼女の髪の毛が俺の視界に横たわる。俺は振りかぶって体勢を元に戻し、彼女から顔をそむけ右手を横に振った。

「もう、ちゃんと出さないと去年の二の舞踏むよ」

やれやれ、といった感じで牧瀬は俺の席から離れていった。

「出してない人は必ず出すように」と先生は念を押して授業へと入

った。どうせ出してない奴（俺を含む）は言われても学期末ギリギリにならないと出さないがな。ただ、まともに出してないのが俺以外に何人いるかは知らないが……光成は出したんだらうか？

俺は光成の座っている方に目を向けた。

光成はプリントを回収しに来た牧瀬が催促すると「えっ、今日だっけ？ マジかよお、もういいどうでもいいわ」と彼女に告げた。

牧瀬は俺のときと同じような顔つきをして、光成のもとを離れていった。

自分と同じような人がいると安心することが普通はできるんだが、それが光成では同族意識が働くだけで、周囲に後れを取ってないという安心感は大して生まれてこないな。

授業はいつも通り先生の独り相撲で進んでいった。この授業では当てられることがないので、うわのそらでいても特に問題はないのである。俺は右手でペンを回しながら隣の校舎の軒下にできているツバメの巣を窓越しに見ていた。時々、親が戻ってきては子供に餌を与えては離れていった。

そうしてその光景を何度か見たところでチャイムが鳴った。すぐさま先生が授業の終わりを言い渡した。

俺はペンを筆箱に入れ、片手で教科書と一緒につかみ席を立ちあげた。

ああ、だるい、そして熱い。梅雨時の晴天は他の季節よりいつそう日差しがきつく感じられる。周りにはもう学ランを着ている生徒がいなくなっていた。夏服に変えると冬服との違和感を感じるのでもギリギリまで冬服を着ていたのだが、俺もそろそろ夏服に移行するか……

教室に帰った俺は学ランを脱いで椅子にかけた。シャツの襟を首元でつまんで上下にはたはたさせて空気を送り込む。

「望月、悪いちよつとお前のDiorsで今日の時間割見せてくれよ」
光成が俺の机に両手をつけてそう言った。

「自分でみるよ」俺は言った。すると光成は、はあ、とため息をひ

とつして、

「いやあな、この前から俺のは調子が悪いんだよ。たぶんこの前河川敷あたりでジャミングを食らったんだが、そんなときにウイルスにでもやられたんじゃないかな」

「それはついてないな。分かった、いま出すから」

俺は左の手首のDiosを起動させ、うちの学校のサイトから今週の時間割を表示し、光成の前にかざしてやった。

「次は古典か……。午後はしよっぱなから数学かよ。もういい、ありがとよ」

俺はDiosのウインドウを閉じ、シャットダウンした。

『Display Information of the space』の略である『Dios^{ディオス}』。空間上に存在する情報を表示するデバイスだ。一世代前に横行していたらしい携帯電話というものにとつて変わったツールだ。腕につけて起動ボタンを押せば、空間上にホログラムが表示される。デスクトップには各ツールへのショートカットと時計が表示されている。カスタムすることもできるので、女子のデスクトップはところ狭しと友達と写ったピクチャなどが貼り付けられていて、大変なことになっているのをよく見る。ちなみに、デスクトップなどの呼び方は、以前まだモニターで据え置きだったころの名残だとか。小学校の社会で年をとった先生が「昔は据え置きだったから、外で気軽に使えるなんて便利になった」なんて言つてたような気がする。

うちのクラスでDiosを持つていない奴は二、三人しかおらず。ほとんどが便利ツールとして愛用している。

「それにしたつて河川敷辺りでジャミングを受けただつて？」

「麻美^{あさみ}に遅くなるからつて連絡をしようと思つただけだな。通信状態が全然悪くてまともに会話できなかったんだよ」

「あそこのサーバーもハックされたのか？」

「最近、夜中にあそこでたむろつてる連中がいるのを見るしな、ちよと前に駅の裏あたりがダメになつたかと思えば今度はこつちかよ」

光成はそう言いながら、自分の D i o s の起動ボタンを何度も押ししていた。

「ダメだ。全然起動しねえ。もう修理に出すしかねえのかなあ」

そう言っつて、D i o s を腕から外して自分のカバンに投げ込んだ。「出したら二週間近く妹が、また、うるさくなるだろうな」俺は微笑しながら彼に言っつた。

「全くだぜ。前に修理出して連絡が取れなくなった時、俺が夜遅くに帰るとよ、すげえわめかれたんだから。連絡とれないんなら早く帰っつてきてよね、だよ。どこまで保護者ぶつてんだか。朝はたつき起こされるしなあ」

「それはお前が自分で起きないからだろ」

「ほつといてくれてもいいいんだぜ。俺は遅刻でもかまわねえし」

「んなこと言うもんじゃねえぜ、ほらセンコウのお出ました」

「おお、やべえやべえ」光成は席についてカバンから古典の教科書をとりだした。

俺も急いで後ろのロッカーに行き、さっきの物理の教科書と引き換えに古典の教科書を取り出し席へと戻つた。

「今日は、このワークノート持つてこいつて言つたぞ。持つてない奴は見せてもらえ」

ああ、持つてきてねえ……。

その一時間、俺は隣の光成にワークを見せてもらいながら授業を受けた。

授業が終わつて、

「お前結構こういう忘れ物はないよな」と光成に聞いた。

光成は得意そうに

「俺は、ワークとかああいう副読本は全部後ろのロッカーに入れてんだよ。だから言われてからとりに言つたろ。どうせ家では勉強しねえし。その代りそれでロッカーがいつぱいになつちまうからお前みたいに教科書までは入れられないけどな」

「おい、最後のは皮肉か？」

光成はニヤリとこちらを振り返って、

「いいや、そんなつもりじゃないけどな」と言い捨てた。

俺は、副読本は全て家において、教科書をここにおいてるからな。光成みたいに逆にするか？ でもカバンが重くなるのは勘弁だな。

その後三、四時限も終わり、昼休憩。教室で机をくつつけて弁当を広げる女子や、食堂へ食べにいく連中がいるなか、俺は売店でパンを買い、自分の席で家で沸かしたお茶と一緒に流し込む。いつもどおりだ。しかし、隣の光成を見てみると男子の弁当とは思えないほどの色鮮やかなお弁当。ミニハンバーグに刺さっている爪楊枝の後ろがパンダの形になっていてとてもかわいらしい。

「最近はお菓子パンよりそちらがお好みで？」俺は問うた。

「分かってるくせに」と光成が顔を伏せて言う。

「また、最近はお菓子パンだしたな」

「味がましになったのはいいが、こんな中身じゃなあ……」

「ああ、去年あたりはひどい味だった」

「他人のお前が言うんじゃないやねえ。ま、事実食べたもんじゃない日もあったがな」

それを聞いて俺は思いだした。光成はその食べたもんじゃない弁当を俺に食わせようとしたことがある。あの時一口食べたが、その嫌な余韻が五時限目の授業になっても残ったのを思い出す。

「お前、あの弁当俺に食わせただろ。昼飯代が浮くと思って初めは喜んでくたよ……あの時は妹さんを呪ったぜ」

すると光成は豪快に笑いだした。

「アハハ、そうそう、そうだったな。あの時のお前の顔ったら……ククツ」と言っただけで、口に手を当てて下を向いてしまった。

「おい、そこまではまることないだろ」

「……悪りい、悪りい、その事を家に帰って文句ついでに麻美に言ったら、ひどくすねてな。それから数日間弁当の代わりにお金を渡されるようになったんだよ。値ははってもうちの学食はおいしいからな。あれはあれで良かったな」

「俺も奮発して学食にしようかな」

俺はそう呟いて味気ないパンを口に押し込んだ。

昼食を終えて俺は屋上へと向かった。

屋上には基本誰もいない。だから俺はここを選ぶ。

壁に腰掛けて青空を見上げる。こうやって冴えない男たちが机に突っ伏して寝、死んでしまっている教室から逃避しているのだ。

今日は雲が少ない。天井にぼっかりと大きな穴があいている。ツバメが一羽通り過ぎて行った。

俺は立ち上がり、フェンスの外のグラウンドを見た。端っこで野球部が素振りをしている。ご苦労なことである。去年は一回戦負けだったが今年はもう少し頑張っしてほしいものだ。といっても新入部員が三人では難しいだろうな。

彼らに幸運が訪れることを願って、また、元の位置に腰をかけた。俺は目を閉じた。寝てしまおうかと思った。寝て知らぬまに放課後になってしまえばいいのに。本当に退屈だ。

風に吹かれながら、そんなことを思っていた。そしていくらかかった。チャイムはとつくのとうに鳴ってしまっていた。

扉のきしむ音が聞こえた。

屋上には俺以外普段こないのに含め、今は授業中である。

俺は目を開け、自分の入ってきた扉の方を見た。

黒く長い髪。それが屋内へと消えていった。

誰かが立ち去っていったようだった。ただ、顔は確認できなかった。印象に残っているのは黒くてきれいに揃い流れるように空を切っていた髪の毛。

学校の女子全員を知ってるわけじゃないけど、あんな髪は見たことない。

俺はその一瞬の光景が頭について離れなかった。

少ししてチャイムが鳴った。

俺はDiosを起動して時刻を確認した。

五時限目の数学が終わったようだ。たぶん光成が望月は保健室行

ってますとつまいこと先生に言ってくれているだろう。しかしさすがに二時限続けてでは怪しまれるだろうな。

俺は腰を上げ、さっきの何者かが開けっ放しにした扉を閉めて、教室へと帰っていった。

教室に帰り、席に着くと当然のように光成が聞いてきた。

「おい、どこ行ってた。また屋上か？」

「悪い、ちよつと寝ちまって」

「あんまり頻度が多くなるとこつちもフォローしきれねえよ」

「わかつてるよ」

午後の授業が終わり放課後になった。

俺はカバンを肩で担ぎ教室を出た。後ろから背中をどんと平手で叩かれた。

「俺も帰るわ。ただ、少し付き合ってくれよ」

光成はそういつて俺の前を歩き始めた。

校門を出てから彼は言った。

「河川敷のサーバーだな」

「え？」

「河川敷のサーバーだよ。あそこがたぶんやられてるんだ。今日はそれを確かめに行く」

「あの橋の下にあるやつか。朝、通ってくる時は特につけてなかったから気づかなかったけど」

「お前、セキュリティは更新したか？」

「昨日定期更新でしたばかりだがどうした？」

「なら今からネットへ繋げ。おそらくそこへ近づけば近づくほど通信状態が悪くなるはずだ。昨日更新したならウイルスはたぶん大丈夫だ」

「俺も通るとこだしな、今から繋ぐ」

俺はDiosでネットへと繋いだ。歩くと今いる場所にある情報がウインドウに表示される。右上の通信状態を示す指数は良好。特に問題はない。

光成の家は俺と同じように学校と川を挟んでいる。ただ、橋を渡ってからは俺とは反対側だ。俺も橋を通っているため、もしあそこに問題があるなら俺の D i o s もいつダメになってもおかしくはない。

住宅街を抜けて、河川敷に差し掛かったところから通信状態が悪くなってきた。さっきから途切れ途切れだ。

「だいぶ悪くなってきたぞ」

「もう橋が見えるとダメか」

俺たちは橋に向かってさらに進んでいった。橋まで百メートルあたりのところまで来たところで『C a n ' t c o m m u n i c a t e』と表示が出た。ウィンドウはそれだけをしか表示されなくなつた。

「完全に途絶えた」

「やはりここか」

光成は橋の下を目指して夕陽を受けて輝く河川敷の土手を下り始めた。

俺も後に続いた。

橋の下に着いた時、ウィンドウさえもが突然に閉じてしまった。

先についた光成が設営されたサーバーのウィンドウを開こうとボタンを押していた。

「とりあえず、通話の機能がつかえるかどうか試してみよう」

そういつて光成は立ち上がったウィンドウから通話のアイコンをタッチした。

「お前のアドレスってどうだったけ？」

俺はアドレスを表示し、光成に見せた。

「いまから認識させるぞ」

光成は俺のアドレスを口頭で読み上げた。

もしサーバーが正常なら俺の D i o s がコールを受け取り、通話がこのサーバーと通話状態になるはずだ。

サーバーは「しばらくお待ちください」と表示していたが、その

後いきなり落ちてしまった。

「くそっ！ ダメか」

光成は右足でサーバーの設置されている支柱を蹴った。

その後、いくらボタンを押そうともサーバーは動かなくなってしまうた。

「またハッカーたちにやられたのか」

「この街の半分程度がすでにこんな感じだ。そのうち、俺たちの家や学校でも使えなくなるかもしれない」光成は頭を手でかきむしりながら橋の支柱を背にして座り込んだ。

頭上を電車が通り、数秒間大きな金属音が鳴り響いた。

鳴り終わると光成は立ち上がったと言った。

「Dios壊れたから連絡できないし、はやく帰らないと麻美がうるさい。憂さ晴らしに遊んでいたいがもう俺は帰るよ」

肩を落として光成は橋の上へと上がっていった。

俺はその後、本当にダメなのかとボタンを何度も押ししたり、自分のDiosでネットに接続するのを何度か試してみた。しかし、なんだやっても変化はひとつも起こらなかった。

さっきまで出ていた日が沈み橋の下ともあつて暗くなっていた。

あきらめて帰ろうと思い、橋の下から出ようと思った。しかし、

その前方から何人かこちらに向かってくるのが分かった。この時刻、そしてこの場所だ。もしか……

俺はすぐに引き返し反対側から橋の下を出た。そして気づかれないうちにうかがった。

そこには五人の若者、学生服を着ている。俺たちとは違う。おそらく南高の奴らだ。

「今日の集会最悪だったぜ。あのクソ校長がずっと話しやがるから足がもう棒になったかと」

「だよな、いつか学校近くもハックしてあいつにもひと泡吹かせたいぜ。どうだ、手始めに今日はどんなのを作る？」

橋の下には崩れ落ちた橋脚のコンクリートや、誰かが捨てていっ

た段ボールなどが散乱しているが、彼らはそれぞれ思い思いにそれらに腰をかけていた。

「じゃあ、今までは壊すだけだったけどよ。今度は壊れるときに爆弾とメッセージを表示しねえか？」

「よし、ならさっそく作業に取り掛かるうぜ」

そういうと、五人は自分たちのDiosから見たことのないアップリケーションソフトを起動させ、なにやら作業を始めた。

こいつらだ。このサーバーをハックしたハッカーはこいつらだ。

光成のDiosはこいつらによって作られたウイルスにあたって壊れたようだ。

本当ならすぐにも抗議をしたいが、こちらは一人。手は出せない。

俺は彼らに気づかれぬように立ち去ろうと体をひるがえした。

突然、俺は両肩を掴まれた。

そしてかなりの力で壁に押し付けられた。

背中に強い圧力がかかる。

くそ、捕まったか。

俺は反射的に相手の腕を右手で掴んだ。

しかし、その腕は細く、男のものとは思えなかった。意識してみれば俺の肩を掴む手もそんなに大きくはない。

暗くて相手の顔はよく見えない。

「静かにして」

透きとおった声。明らかに女だ。そして、おそらく若い。

俺はてつきりハッカー連中に捕まったものだと思っていたものだから、事態の急変に動揺し声を失った。

「明日、話がある。それまで自分ひとりで彼らに手を出すようなマネはしないこと」

俺の顔の前でそう言っている。唇の動きだけが暗い中でわずかに感知できた。

生温かい吐息が俺の首元にかかる。

「わかった？」と言。まるで大人が子供に諭すように俺は右手で掴んでいたその細腕を放した。

それが応答になったのだろうか目の前の女は俺の肩から手を放し橋の上へと歩いて行った。

あつげにとられていた俺だが、すぐに我に返り、後を追った。

土手に生えている草を掴みながら、とにかく急いで上へと出た。

しかし、橋の上に出てみると周りには誰もいなかった。ただ、橋の下のハッカーたちの陽気な笑い声だけが聞こえる。

今のは一体……

空にはもう星がちらつき始めていた。

街頭にポツリポツリと照らされた橋の上を歩きながら俺は考えた。まず、あの女は南高のハッカー連中の仲間ではないようである。もしそうなら、俺はあの集団の中に放り込まれていただろう。

そもそも、明日話がある、と言っていたと思うが、どこでいつとは全然言っていないじゃないか。話を分かりやすくするには5W1Hが基本だが、それを分かっているだけなのバカなのか、それとも、絶対明日俺と会えると確信があったのか。もし後者で考えると、俺が今まで会ったことのある人物か？あの暗闇では相手も俺の顔をはっきり確認できなかったはずだ。もし、俺と初対面なら明日俺を見つけることが難しいはずだ。だから相手は俺の顔を知っていて、俺だと分かっているような行動に出ているはずだ。

しかし、俺はあの声を知らない。ガラスのように澄み、少し官能的な甘いあの声。今でもはっきりと耳に残っている。

考えても検討がつかない。

明日、俺はどうすればいい。しかし、向こうからの要求は連中に手を出すな、ということだけ。もちろん、どんな理由があろうともたった一人で多勢に挑む無鉄砲さは俺にはない。だからそれは守ってあげられそうである。しかし、会って話をするには……

頭の中で思考を巡らせているうち、いつの間にか家に着いていた。俺は考えることを放棄し、冷蔵庫にあるもので適当に自炊し、それを食らった。

洗濯物が溜まっていたので、近くのコインランドリーで洗濯をした。うちに帰って、ベランダにそれを干した。あした一日中放っておけば乾いているだろう。

その後風呂に入った後、寝室のベッドに倒れこんだ。

Diosを充電するため、机の上に放り投げた。そして、電気を消した。

気づいたら、朝になっていた。

しかも、時刻は八時。

のんびりしていると遅刻だ。

俺は急いで身支度し、昨日のまんまの中身のカバンを手にし、左手にDiolsをはめアパートを出た。

学校が見えるところまで走ったところで間に合うと思ったので、俺は走り歩みに変えた。

きのうと同じようにチャイムがなっている時に教室へ入る。『セーフ』と心で野球の審判のマネみたく言ってみた。

授業が始まって、走って火照った体が冷めた頃、どうも今日は学ランを着てもさほど熱くないと思った。

周りを見てみると、昨日俺しか着ていなかった冬服を着ている奴がちらほら確認できた。窓の外を見てみると空が淀んでいた。来るときはそれどころじゃなかったから気づかなかったが、今日は雨かもしれない。高く飛んでいたツバメが地を這うように滑空していた。降ったらコンビニでビニール傘を買うしかないか。

三時限目の教室移動のとき、牧瀬が話しかけてきた。

「望月くん、今日傘忘れたでしょ」

「そうだけど、なんで分かった？」

「登校中に橋を走ってくるのが見えたよ。どうせ遅刻しそうだったんでしょ」

「こうしてきちんと間に合ったけどな。しかし、雨に降られるとな……今月は生活費をこれ以上無駄な事には使いたくないんだが、傘買うしかねえのかな……」

俺がため息をひとつすると、牧瀬は俺より前へと歩み出てこちらを向きながら言った。

「だったら、雨が降ったら橋のところまでは傘貸してあげるよ。私は友達に入るから」

えへへ、と笑いながら牧瀬はまた前を向いた。

「そうか、悪いな。助かるよ」人の好意をむやみにはねのける理由

もないので、俺は感謝の意を表した。

「でも、橋までだからね。私は橋渡らないから」

「ああ、大丈夫だ。土砂降りでもいくらか橋の下で雨宿りして……」

『橋の下』それを言っただけ俺は思ひだした。昨日のあの事を。

「どうしたの？」

俺は廊下の真ん中ともあるうのに、その場で突っ立ってしまった。牧瀬がこちらを不審そうに見上げてくる。

「いや、なんでもない」俺は冷静を装い、また歩き始めた。

「そう？」

牧瀬はやはり不思議そうな顔をしていた。

それから昼休憩になるまで俺は、昨日の事を考えていた。

はたして、今日一体俺はどうすればいいんだ。結局こうやって午前中は普通に過ごしてしまった。しかし、おそろく向うからアプロ―チするなら放課後じゃないのか？ だったら別に今はこれでいいのだろう。しかし結局あれが誰だったんだろうか。そればかり気になる。

「どうした望月。さっきから目が死んでるぞ」

パンを食べながら考えていると、横から光成が弁当片手に言った。

「なんでもないんだ」俺は視線をしっかりと光成の方に向けて言った。

「そうか？ なんか気持ち悪いものでも見たようだぜ」

昼食を終えて、俺は屋上へと足を運んだ。

空は曇っただけはいるがまだ雨は降っていない。教室にいるよりはこっちの方がましだ。

俺はいつものように壁に腰掛け、目を閉じて考えた。

光成は、気持ち悪いものでも見たようだ、と言っていたが、確かに昨日のことは気持ち悪い事とはいえその通りだ。

誰かも分からない奴にいきなり壁に押し付けられ、よくわからん事を言われてそのまま立ち去られた。

酒に酔った女にでも、からかわれたんじゃないだろうか？ そう

考える方が別の結論を導き出すより簡単だ。

どうせ俺自身にできる事もない。あつちから一方的に言ってきているだけなんだから。

だから、もういちいちあれを気にするのはやめにしよう。

変な話だから光成に話す事はしなかったが、あいつが聞けばたぶんそういう風に解釈でもするはずだ。まあ、まずあいつの場合、南高の奴らに対しての文句が先に出て、女の事は問題視しないかもしれないが。

俺は、目を閉じて眠ろうと思った。

昨日と違い今日は風が凧いで、空気もどんよりとしている。

時間の流れが止まったかのような静寂。

そして唐突に、

「起きなさい」

あの声。昨日聞いたあの声。この透きとおった声に間違いがなかった。

俺は目を開いた。

黒く長いストレート。昨日ここで見たあの髪。それが一番に目に飛び込んできた。

腹部あたりまで伸びた髪がかかる体、腕や足、とても細く華奢だ。そして立っている彼女の顔を見上げる。

うちの冬服を着ている。昨日見たあの唇。そして、きりりとした目。小さな鼻。どちらかというと大人びた印象。それが俺を見つめている。

俺はとりあえず立ち上がった。

体の細さの為か、女性にしては高身長に見えたが、自分が立ってみるとそう高くはなかった。おそらく百六十センチぐらい。彼女の口元が俺の首辺りにくる。こいつだ。昨日の女は。

「お前、誰だ？」

俺はまずそれが聞きたかった。

「あなたと同じ二年生。御影沙織よ。A組だからF組のあなたは知

らなくて当然よね」

確かに、A組の人間とほとんど面識はない。

俺は顔に水滴が落ちるのを感じた。空はいよいよ黒くなってきた。「で、話ってなんなんだ」俺はまだ警戒していた。同じ学校の生徒だったとはいえ、いきなり壁に押し付けるようなまねをする奴だからな。

「今日、あの橋の下のサーバーをハックしに行く」

彼女ははっきりとした口調で言った。そしてこう続けた。

「だからあなたも手伝いなさい」

さて、こいつは何を言っているんだろうか？ ほぼ初見の人物に向かつてサーバーハックを手伝えだど？ わけがわからんがとりあえずどういふことか聞き返してみる。

「待て、いろいろあるが、まずハックするってどういうことだ？

すでにあそこは南高の奴らにやられてるだろ」

彼女は顔色一つ変えず言う。

「だからそれを奪うのよ」

見た目に似合わず、過激なことを言う奴だ。

「奪うって、奪ってどうする？」

「あいつらによっておかしくなったサーバーを私たちの管理下で正常に戻すの」

「そんなの、役所に言えば職員が修理しにくるだろ？」

彼女は深く息をして、その後、分かってないわね、といわんばかりの表情でこちらを見た。

「もし職員がちゃんと修理しているならば、この街の半分以上のエリアのサーバーが正常でないのはどう説明がつくの？」

俺は言葉に詰まった。確かにそのとおりだ。駅の裏側のエリアもおかしくなっただけからもう、三か月が経つ。

「ここ数年の情報省の怠惰な様と言ったらあなただってしってるでしょう？ 山間部のサーバーの管理がなってないのは前からだったけど、最近はこの市街地でさえも管理できてないのね。全く、公

「役員は使えないわね」

「だから、自分たちでやる、と」

俺は確認した。雨はぱらつき始めてきた。彼女はそれも気にせず答えた。

「ええ、そういうこと」

まず一つ、サーバーハックの理由は俺も分かった。しかし、もうひとつ俺に関わる重要なことがある。

「理由はわかった。だが何故俺がそれを手伝わねばならん？」

彼女は後ろを振り向いて、こちらに背を向けた。

「あなた、昨日あそこにいたじゃない。あそこがダメになるとあなたも困るんですよ」

「確かにそうだが、別に俺といたもう一人でもいいじゃないか」

そう、別に俺にこだわってくれなくても、むしろ光成の方がこういうことには積極的であると思う。

彼女はまたこちらを向いてさらりと言った。

「だってあなた暇そうなもの」

おい、なんだよそれは。

「暇じゃねえよ。俺だって……」

俺は自分が忙しい理由を探した。しかし、部活もせず、昼はここで居眠りするような俺には、忙しいなんてことを胸をはっていうだけのものがなかった。

「ほらね。暇なんですよ。あなたがいつもここにいること知ってるわ。だからあなたにしたんだもの」

彼女は俺をたしなめた。

「お前、一人じゃ無理なのか？」

「さすがに一人で五人相手にするのは厳しいわ。それぐらわかるでしょう」

「ああ……」同意せざるを得ない。

雨が本格的に降ってきた。しかし、この場で「ちょっと屋内で話そう」などと、水を差す気にはなれない。

正直に言えば俺は、暇を持て余している。光成みたいにくまく発散することもできない。いつも退屈で退屈でしかたなかったんだ。これが俺を退屈でなくしてくれるなら、俺は別に協力してやってもいい。家でゴロゴロするのはもう飽きた。なんでもいいんだ。なんでも。

「わかった協力してやる。ただ、どうやって奪い返す」

俺は彼女のやることに乗る。そう決めた。

「それは放課後に詳しく話すわ。今は物資がないし。連絡するからあなたのアドレスと私のアドレスを交換しましょう。ほら」

彼女は自分のDiosを起動させ手の甲をこちらに向け、俺の前にかざした。

俺も自分のDiosを起動させ同じように彼女のDiosと重ね合わせた。

通信完了の音声 flowed。俺はウィンドウに表示されたアドレスデータを確認した。

『御影 沙織』と名前の下にアドレス。これで彼女と通話ができる。

「ふーん、望月十也……そういうの……」

彼女は俺のアドレスデータを見てそう呟いた。

強く降りだした雨が、彼女の長い髪を伝い、水滴となってぼたぼたと落ちていった。

「あなたも早く教室へもどりなさい。学ランが乾かなくなるわよ」
彼女はそういつて屋内へと消えていった。

俺は顔についた水滴を腕でぬぐい、Diorsをシャツダウンした。

そして、彼女の後に続いて。屋内へと入った。

教室に帰るなり、光成が言う。

「おい、昼寝してて雨降ったの気づかなかつたんだろ。そのまんまな格好だぜ」

俺は濡れた髪に両手でバサバサと空気を入れ一刻も早く乾かす努力をした。

「傘以前の問題かもね」

横を通っていた牧瀬がクスリと笑って過ぎて行った。

俺は、光成について先ほど起こった事を言うべきか否か考えた。

別に言っていけない理由もない。彼女、御影からは口止めをされているわけではない。

しかし、逆に言う理由もこれと違ってない。そもそもまだ御影にもてあそばれているというだけの可能性もなくはない。ここで光成に話して、放課後になってみて向うから連絡がなければ、俺は妄想野郎と決めつけられるだけだ。確かめてからだ。本当かどうか。他人に言うならその後だ。

俺は放課後になって連絡が来るまで学校に居座る事にした。連絡する、とだけ言われたのでどこに居ればいいのかわからないが、俺なりに考えて彼女も生徒なんだから呼ばれるなら学校から離れたところではあるまい。

「望月くん、学校残るの？ 私は部活ないから帰っちゃうけど傘大丈夫？」

机で頬づえをついている俺に向かって牧瀬は心配そうに言う。

「だいじょうぶ、だいじょうぶ」

俺は手を上下に振って大げさに答えた。

「じゃあ、さようなら」牧瀬はそう言って教室を出た。

「明日な」と光成もそれに続いて出て行った。

そして教室には誰もいなくなった。

さっきまで降っていた雨は今は止んでいる。

窓のサッシから雨粒がポタポタと落ちていく。まだ空は薄暗く、

蛍光灯を消した教室はカーテンでも締め切ったかのように暗い。

十分ぐらいだったか、それぐらいだったとき、俺のDiOSの着
うたが流れ始めた。

ホログラムで表示される相手の名を確認する。

『御影 沙織』

来た。御影だ。

俺は受信のアイコンをタッチし、スピーカー越しに声を待った。

『屋上にいる』

そして俺が返答しようとするや否や、向うから切りやがった。

俺は、カバンを取り、普段なら誰もいない屋上に向かった。

「望月、こつち」

扉を開けると彼女が待っていた。

俺は彼女の前まで歩き、向き合った。

「初めて会ったときから思ったんだが、次に会う場所をわかってん
なら指定してくれないか？ どうしたらいいかわかんないだろ？」

「もし場所を指定したら、あなた授業終わると真っ先にここにくる
でしょ？ そうすると、あなたのお友達がどこへいくのか、なんて
聞くかもしれないじゃない。そうすると私と会ってることともバレか
ねないでしょ？」

「バレて問題あるか？ そりゃ、男女が二人きりで会ってるって知
れて、もてはやされるのはご免だがな」

「ありありよ。あなたまだ良く分かってないようだけど、私たちは
これから世間から良い顔をされないことをしようとしているの、そ

んなことをやすやすと知られるわけにはいかないのよ。いい、このことは二人だけの秘密だからね」

『二人だけの秘密』か。俺はもっとロマンチックな二人だけの秘密が良かったなあ。男女の恋愛ごとにまつわるような。だが、こんな後ろめたいようなことを黙ってるって秘密じゃ全然だ。

「はいはい、俺もことを大きくする気はないんでね。で、本題に移ってくれよ」

「そうね。まず、これを見て」

そういうと、彼女はDiosを起動させ、数回操作して何かのアプリケーションを起動させた。

「これを使うとサーバーに侵入できる。南校の連中も同じものをつかっている。ネットで検索すればすぐにでも入手できるソフトよ」

サーバー内に進入できるようになる違法なソフトが出回っていたのは、知っていたがそんな簡単に入手できるとは知らなかった。結構意外だ。

「じゃあ、それをつかってあいつらにやられたサーバーに侵入し、正常に書き換えるってことか？」

「まあ、そういうことね」

「なら、あいつらのいないうちにやってしまえばそう難しくもないな」

彼女は俺の発言を聞いて、しぶい顔をしながら、独り言のように呟いた。

「そうなればいいけど……」

「え？ なんだった？」

「いや、なんでもないわ。あなたは今から橋の下に向かって。先に行つてこのアプリを試してみて、今からそつちに飛ばすわ。受信して」

俺はDiosを受信できる状態にして、彼女からそのアプリケーションを受け取った。

「俺一人でって、お前はどうするんだ。お前が主格なんだから俺に

やらせるようなマネはやめてくれよ。あくまでも俺は手伝い、サポートに過ぎんぞ」

「私は用意しなければならぬものがあるの。大丈夫、すぐに合流するから」

「そうか」

本当はなにを用意するのか気にはなつたのだが、説明を求めるとたぶん俺の知らないことだから長くなつてめんどくさそうだったので、俺は納得したふりをしておいた。

「では、俺はさっそく向かうとするか。お前も早く来てくれよ」「ええ」

俺は最後に彼女の眼をいま一度しっかりと見て、はやく来てくれるようにとの意思を伝え、扉を開けて屋上を出た。

学校を出た俺は、彼女の言った通り橋に向かった。

グラウンドが雨にぬれてぐしょぐしょになっている。こういう日は自分の踵で泥を巻き上げてズボンの後ろにみっともない汚れをつけることがあるので、そうならないようすり足気味にして歩く。

天候は降ってはいないとはいえ、空はまだ雲で覆われている。これではまた降ってきてもおかしくはない。はあ、サーバーハックとやらが長引かんことを祈るばかりだ。

俺は雨が降らないのとはやく御影が追いつくことを願いながら歩き、橋の手前までやってきた。

周りに人は見当たらない。この天気なら当たり前だ。

俺は滑りやすくなつた土手を下り、橋の下に辿り着いた。まだ南高のハツカー連中もいない。俺は雨にぬれたコンクリートの上を歩きサーバーの前に立った。

確認の為サーバーのスイッチを押してみる。しかし、昨日に引き続きなんの変化もない。

確認を終えると、御影からもらつたあのソフトを俺のDiOSで使えるようにインストールをした。そして立ちあげてみる。

新しく開いたウインドウはとても簡素でソフト名である『INV

『A D E R』というロゴの下に、『S T A R T』とアイコンがあるだけだ。

俺は、とりあえず『S T A R T』ボタンをタッチしてみた。するとホログラムはいきなりウィンドウ上にアルファベットと数字をすごい勢いで表示し始めた。

表示されてはスクロールされすぐに上へと消えていく。

なんか俺のD i o sが壊れるのではないかと心配になる。

しばらくしてスクロールが止まり、それ以降何の変化も起こらなくなった。ウィンドウにはアルファベットと数字が表示されつつける。

もはや、イかれたか？

俺はアプリを終了させた。一応、他のところをつついて見たが、異常はなさそうだ。

はて、どうしたのだろうか。御影はこのアプリで書き換えられると知ってたが、書き換える以前の工程でストップしたと思うのだが

……

「やはり、そう簡単にはいかないか」

後ろを振り向くといつのまにか御影が俺の後ろに立っていた。

「おい、なんかとりあえずスタートを選んだけど、途中で止まったぜ」

俺は不満をあらわに彼女にぶつけた。

「キーよ。キーを壊さなければならぬわ」

「キー？ 鍵か」

「おそらくハッカーがここをハックしたとき、自分たち以外がいじることができないようにキーをかけたのよ。このI N V A D E Rでもできることよ」

「だったら俺たちは手を出せないじゃないか」

「だからキーを壊すの。キーといっても暗証番号とかではないわ。

私たちの持っているD i o s自体がキーなの。特定のD i o sだけを常にサーバーと繋ぎ、他のD i o sがサーバーへと入れられないよう

にしているの。つまり、サーバーと繋がっているDiosを壊せばそのキーを解除でき、私たちが侵入することができるようになるわ」「おいおい、壊すって言っても、俺は五人の男を倒しDiosを奪って全部叩き壊すような芸当はできんぞ」

「そんなことするなんていってないじゃない。望月、あなた乱暴な人ね」

いや、壊すとか奪うとかいってるあなたも十分乱暴だとは思いません。

「では、どうすると?」

「ちよつと待って」

そういうと彼女は後ろの方に置いていた自分の学生力バンに向かってしゃがみ、中を探り始めた。

そして、彼女はバッグの中に入れた手で後ろ向きのままこちらに向けて何かを投げてきた。

俺はそれをキャッチし確認した。

銃。ええ、ピストルです。戦争映画で出るやつじゃなくて、スパイ映画とかで出るやつ。ハンドガンです。映画で見ても現実ではまじ見れない代物です。

俺はもちろんビビった。

がしかし、重くない。いや、正確には銃の重さなんて知らないが、金属を使ってたらもっと重くていいと思った。だから重くないと思っただ。

エアガンだ。お祭りのくじ引きとかでよく景品であるやつ。

しゃがんでいた御影は立ち上がり自分も同じものを持ち、俺の顔に銃口を向けた。

「バァーン」と発砲音を彼女自ら言う。もちろん俺は死なないし、瞬き一つもしない。

こいつ、結構茶目っ気があるんだな。今までのギャップでだいぶおもしろい。

俺は銃を壁に構え、引き金を引いた。『パンツ』という乾いた音

と共に小さなプラスチック弾、いわゆるBB弾が発射されるだけだ。ガス式でもなんでもない、お子ちゃまレベルのエアガン。

「どうした、こんなレトロなオモチャを持ってきて。これで相手のDiiosを撃つても壊れやしないだろ？」

「さつきから物理的なことしか考えないのね。Diiosはデジタル機器よ、だからデジタルで攻撃をしないと効かないでしょう？」

彼女は西洋風に両肩をすくめ両手を持ち上げ、わかってないわねとモーションした。

「これはただのエアガン。そうよ、お祭りの景品で手に入れたデザートイーグルよ。これを使って相手のDiiosを壊すのには違いなけれど、説明をしてあげるからまずは聞いて」

「おう、わかるようにいつてくれ」俺は銃を持ったまま両手腕組みした。

「まず、相手のDiiosを直接壊すのはこのウイルスなの」

彼女は自分のDiiosのあるファイルを示した。

「このウイルスが相手のDiiosに侵入すれば一定時間相手のDiiosは使えなくなる。しかし、今このエリアー帯は敵の管理下になっている。だからネットワーク上や、直接私たちのDiiosから発信しても相手のDiiosに入る前に叩かれてしまうの。ウイルスの情報はどうすれば相手のDiiosまで届けることができるか。問題はそこなんだけど、ひとつ方法があるわ」

「どんな方法だ」

「情報は物質に添付、つまり物質にまとわせることで、通常より長い間その情報は敵の管理下の中でもその形を保つことができるわ。」

そしてこのウイルスは物体が別の物質に触れるとその物質にも広がるの。つまり、ウイルスを添付した物質を相手の体に当ててやれば、それが体を介してDiiosまで伝わる」

「だからウイルスの情報をBB弾に添付して相手を撃つ、ということか？」

御影は人差し指で俺の顔を差して「惜しい」と言った。

「いい線ね。ただ、BB弾に直接ではないわ。なぜならBB弾に直接ウイルスを添付しても撃とうとした頃にはもうウイルスは死んでしまっているからよ。ウイルスが自分のDiosと物質を介さなくなった時点でウイルスはとても弱い存在になってしまう。だから打ち出すギリギリまで自分のDiosと触れさせてなくちゃならない。そう、だから私たちの体につねに触れ、Diosと繋がっているこのハンドガン自体にDiosからウイルスを送り込むの。ハンドガン内にリロードされたBB弾にウイルスが広がり添付され、撃ちだされる瞬間までずっとDiosと繋がっている。そうすれば撃ちだされてから相手に届くまでの一瞬しかないのだから相手にヒットすればあとはウイルスが勝手に相手のDiosに侵入してくれるわ」

「ならば、BB弾を手につけばいい持って相手に投げつけてもダメなことだな」

「そういうこと。なに？　今回はわかりがいいじゃない」

彼女は初めて俺を褒めた。

「なあに、それぐらいわかるさ。それならすげえ楽勝だな。逃げ回る五人を撃てばいいんだ」

俺がそう言うと、彼女は肩を落として言った。

「さっきの発言撤回。やっぱりわかってない」

「え、何がだよ？」

彼女はすこし強い口調で、

「私たちがやるうとしてることは別にすごく特別な方法じゃない。なんならネットを検索したら当たり前のように出る方法よ。つまり、相手も同じことをしてくる」

「相手も同じ方法か？　このエリア内では相手の方が有利なんだから、また別の方法で防いでくるんじゃないのか？」

「情報は物質に添付すれば長い間その形を留められる、と言ったでしょう。つまり相手側から見ればそれは、物質に添付された情報にすぐには干渉できないということよ。だから相手もこればかり防ぎようがない。だから相手も私たちのDiosを壊そうとするの」

「じゃあ、撃たれたら……」

「ええ、ウイルスの性質にもよるけど、最悪故障ね」

こんなバカな女に付き合ったのはやはり間違っていた。後にはひけないとこまで来ちまったけど。

「おいおい、そんな危険を冒すマネをするのかよ」

「しかたないでしょ。二人でここを取り返すにはこれしかないのよ」

「はあ、しゃあねえか。別に修理は無料だからいいけど」

「こちらが撃たれたら終わりよ。Diosが停止した時点でウイルスを銃に送れなくなる。そうすると撃つてもただのBB弾でしかない。一撃も許されないわ」

「一撃KOとはシューティングゲーム以上の難易度だな。実戦さながらだな」

「弾はしょせんBB弾だから実戦は言いすぎでしょ。サバイバルゲームが適当でしょ。どうでもいいけどこのBB弾結構高いのよ。なんか最近ほとんど、環境に配慮して土にかえる生分解素材を使ってるらしいからこの一袋で千円もしたのよ。次買うときは二人で割り勘だからね」

「……………」

今月でさえ金の工面には頭を悩ませているというのに、また出費が増えそうだ。環境保護の一環だと思って我慢するか。

俺が改めてこの女に付き合ったことを悔やんでいる時、大きな雨音が響き始めた。

外を見ると大変な雨量だ。しかも、粒が大きいのか天井からも橋に落ちた雨の音が伝わってきた。

「もう少し待つかと思ったけど、この雨ならもっと早くやって来そうね」

外の雨をうかがっていた俺の右肩を手で叩かれた。

「さあ、はやくこのウイルスを」

「お、おう」

俺は彼女からウイルスを受け取り、つねに銃に添付させるように

操作した。

俺がその作業を終えるのを見届けた彼女は「さあこっち」と俺の腕を乱暴につかんで外へと連れ出した。

一瞬でシャワーでも浴びたかのように頭皮から顔に雨が伝い始めた。彼女の髪も雨に濡れ、もともときれいなストレートがさらにもっすぐにになる。

「待てよ。なんでわざわざ濡れるように外へ出るんだ？」

「この雨ならあいつらは外をうろついてられず、雨宿りでここにすぐにでも来るわ。先に姿を見られては圧倒的に不利になるからここで待ちましよう」

彼女は橋の支柱の外側に張り付き、顔だけを出して内部を見張り始めた。その足元には彼女と俺のカバンが。どうやら、俺がインストールをしている間に運んだらしい。しかし、せめて濡れないところに置いてくれなかったものか。

彼女はスカートのポケットをもぞもぞと探り、何かを掴んで俺の前に示した。

俺はその握られた手の下に手のひらを広げた。

拳が開かれ、手のひらに十数発のBB弾が落ちてきた。

「はやく、装填して。使い方はだいたいわかるでしょ」

エアガンに詳しいわけではないが、特別作りが難しいわけではないので、俺はBB弾をマガジンにあたる部分へ入れることができた。右手でグリップを握って左手を添え、こんな感じだろうかと上についているサイトに視線を合わせてみる。

赤外線を使って相手に当たったかどうかを判定してくれるおもちゃがあるので、エアガンみたいに実際にモノを飛ばす遊びを見ることがない。せいぜい、祭りの射的ぐらいか。

見張っている彼女の横で体を壁に預け、効果もないだろうが自分の頭の上に片手をかざした。

対照的に彼女は雨を気にする様子もなく、同じ姿勢で中の様子を見続けている。

彼女の来ている冬服のジャケットは全て濡れ、紺色の生地が黒く染まっている。もう、俺もこいつも明日から夏服に完全移行だな。濡れた前髪が目の前に落ちてくる。それを横へなできるようにはい、手についた水をふるう。

「来た」

御影が声をひそめ言う。

姿勢を低くして、俺も彼女と同じように覗き込んでみる。昨日の五人組が、頭に手を当てながらこちらに向かつて走ってくる。

「急に降られちゃったな。いつもより早く着たし、今日は手の込んだ事でもしてみるか」

その一人、リーダー格と思われる人物が言いながら、サーバ―近くに転がっている岩に腰をかける。その他も思い思いの場所に腰を下ろし、濡れた髪や服を乾かそうとしている。

「私は向うの段ボールの影に隠れる。不意打ちでまずは二人をダウンさせるわよ」

俺も声をひそめて聞く。

「俺は、どうしろと」

「このままここで構え続けて。私が撃つたらあなたも続いて。それからは撃たれないように頑張ることね」

御影はそう言い捨てると、姿勢を低く保ち、彼らに見つからないように向かいにある段ボールの影に滑り込んだ。そして、そこから銃口を彼らの一人に向けて定め始めた。

リーダーと思われる奴は俺たちのいる場所からは遠く、狙うに適さない。御影は二番目に近い奴を狙っている。これは俺に対する配慮だろうか。俺は一番手前の奴に狙いをつけた。

俺の狙った奴はこちらに背を向け、今日もまた良からぬことをしているようだった。ズボンの後ろポケットから銃のグリップが見える。御影が言った通りあいつらも同じ手段で対抗してくるようだ。

俺はいま一度覚悟を決め、もう一度グリップを握り直した。

横を見ると、御影が膝を折り、器用に段ボールの影に隠れながら

タイミングを見計らっている。

彼女はこちらを見た。そして、ひとつ首を縦に振った。しっかりとこちらの目を見て。

そして、もう一度構えた。

指を引き金にかけた。

俺も指を引き金にかけ、片目で狙いをつける。

見えるのはいまから撃つ相手、聞こえるのは土砂降りの雨の響きと彼らの会話。

視界には入っていない彼女の合図を待った。

「……………」

長く、長く感じたその時間が終わりを迎える。

俺の左耳に乾いた音がつんざいた。

右手の人差し指で引き金を引く。

銃の上部が後ろにスライドし、反動を感じた。

弾の軌跡は追うことができなかった。

しかし、奴らの内の二人が言う。

「あれ？ 落ちちまった」

「俺もだ、Diolsが動かねえ」

御影をみると銃を引つ込めて段ボールの影に完全に隠れている。

感づかれるまでは自分から出ない方が良いということだろうか。俺も、見つからぬ様に壁に隠れた。

そして、リーダー格の声。

「敵だ！」

それと同時に御影は飛び出した。

軽い身のこなしで敵を見渡せる場所へ走りこんだ。

そこから片膝をついた姿勢を取り、発砲。

その弾は銃を構えようとしている三人目の腹部にあたり、ぼとりと地面に落ちた。

「女か、覚悟しろ！」

俺も銃を構えながら飛び出し、狙いをつけようとする。

しかし、うまく定めることができない。

その間に相手はこちらに向けて撃ってきた。

相手の撃った弾が御影の顔の横を過ぎていく。

御影は動じずもう一発放った。そして、ヒット。

残ったのはリーダー格のみ。撃たれた奴らは橋の上へと逃げて行った。

「二対一か、歩は悪いが」

俺は引き金を引いた。

弾は相手の胸めがけ飛んで行った。

当たったか。

しかし、相手は回転しながら、横へと逃げた。

「おっと危ねえ。最後まで言わせるよ」

相手は俺と御影を続けざまに二発撃ってきた。

俺は、避けようと右へ足を出した。しかし、ぬかるんだ地面のせいで滑らせて、脇腹から転んでしまった。弾は俺の頭上を越えて行った。

御影は顔へ飛んできた弾を頭をひよいと傾けて、難なく避けた。

俺は、横に倒れた状態から相手に向けてもう一度発砲。

「お前は狙いがあまいんだよ」

そう言い相手はまた避けた。

「終わりだ」

そして相手が俺に銃口を向けた時、彼の手首に弾が当たっていた。

「狙いがあまい？ これでもそう思う？」

御影の撃った弾は相手のDiorsへと直接撃ちこまれていた。

Diorsのホログラムが消えていくのが確認できる。

「くっ、こんな場所くれてやる」

彼はそう捨て台詞を吐き、仲間を追って立ち去って行った。

「派手に転んだわね。制服が泥だらけよ」

銃を片手にぶら下げた御影がこちらに歩み寄り、手を差し出した。俺はその手を掴み、引き上げられ立ちあがった。

「悪いな。だけど、お前もだいたい派手にやったじゃないか」

滑り込んだことによって彼女のスカートの右半分は泥だらけだった。

「あなたみたいにかっこわるくないからいいのよ」

「悪かったな、一人も倒せない上に転んで」

御影は俺を見て小さく笑いながら、

「確かに、でもあなたが撃ったことによって相手の姿勢が崩れたから、私の弾が当たったのよ。そこだけは認めてもいいわ。でも、やっぱり狙いは甘いわね」と言った。

認められたんだかバカにされたんだかよくわからないが、とりあえず二人とも無事だったことが幸いだろう。外を見てみると、さっきまでの雨が降り止んでいた。雲もなくなっている。天井から滴る雨粒が夕陽に照らされ輝いている。

俺は自分の服を見て、泥を払うことさえあきらめた。もう洗うわないことには元に戻らないだろう。

「さあ、安堵するのはいいけど、まだやることがあるわ」

彼女はDiosから例のアプリを起動させ、サーバーの近くへと近寄った。

アイコンをタッチして、ソフトが起動し始める。俺の時とは違い途中で止まったりしない。そして、最後に「Complete」と表示された。

「これである俺たちの思いどおりか？」

「そうね。これを開いて……、ここ、このウィンドウでいろいろ操作ができるのよ」

彼女はその中で「Clear」というアイコンをタッチした。

するといままで動かなかったサーバーが動き、メニューがホログラムで表示された。

「これで元どおり。あとは、キーを設定しなくちゃね」

彼女はまたアプリのウィンドウで何かを操作し、その後Diosをサーバーの前にかざした。数秒してピピッと音が鳴った。

「望月も」彼女は俺においでおいでと手で招いた。

「かざすだけでいいのか？」

「ええ、あとは勝手に読み取ってくれるわ」

俺も同様にかざすと、やはり同じように音がした。

彼女はそれを見て、アイコンをタッチした。

「これで登録できたわ。これからは私たちもハッカーの仲間入りね。これからは襲われる立場でもあるから気をつけなさいよ」

言っている内容の割に彼女はウキウキとしているように見えた。

これで俺たちも“晴れずに”ハッカーというわけなのに何を言っ

いるんだろっか。

俺は大きいため息した。

「ハッカーねえ。まさか俺自身がなるとは夢にも思わなかったよ」「いいじゃない。私たちは他のハッカーたちとは違う。私たちのやってることは正義のハックよ。これでここ一帯のエリアは正常になったわ。誰が文句を言うっていうの？」

「誰も文句は言わないだろうな。だけど、非合法はどこまでいっても非合法だ。別に俺は自分を正当化しようとは思わないから別にいいけどな」

「なら、構わないじゃないの」

彼女は首をかしげて、こちらに同意を求めた。

「スリルがあつて少しは楽しいとも思ってたがな」

「なに、それ？ 遊びでやってるんじゃないのよ」

いや、ほとんど血迷った高校生の遊びだろ。と俺は思つてはいたが黙つておいた。

「帰りましょう」

彼女は俺の制服の袖をひっぱり橋の外へ連れ出した。

俺は、自分の左手に持っている物について聞いてみた。いつまでも持っている人と人からどんな風に見られるかわかったもんじゃないからな。

「おい、このエアガン……」

俺がそこまで言つて、彼女は、

「あげる」と遮った。

「あげるって……」

俺の問いかけに対して、前で土手を登る彼女はこちらを向きしっかりと構えて言う。

「あなた、この街のサーバーの惨状を知らないわけじゃないだろうし、そもそもここまで踏み込んで『はいさいなら』できると思つてるのかしら？」

どうやらこれからも俺はこの女とお付き合いをしなければいけない

いようである。

「……わかったよ」

俺たちは土手を登り、橋の上を縦に並んで歩き始めた。

エアガンをそれぞれのカバンに入れて、泥だらけの格好でポツリポツリと点った電灯の下を歩く。

時たますれ違う通行人が俺たち二人を凝視する。当たり前だ。

橋を渡り終えたところで彼女は俺と逆の方向へ曲がった。

「私はこっち」

遠のく彼女の背に問う。

「おい、次は？」

「まだ調査中、わかり次第連絡するから待ってなさいって」

こちらに背を向けたまま手を高く上げ、その腕についているDiOsをもう片方の手で指さした。

俺が初めてハッカーになった日、俺たちの頭上には天の川見え始めていた。

Part・1 (2)

泥にまみれた学ランを右腕にひっかけ、俺はアパートに帰ってきた。

まっさきに制服を脱ぎ、シャツと半ズボンに着替えた。

脱いだ制服を洗濯かごに突っ込み、すぐにアパートを出た。

人通りの少ない通りを歩き、徒歩五分でコインランドリー。

暗い路地を照らす店内には誰もいなかった。

洗濯機へ学ランを入れようとした時、ポケットからエアガンが落ちてきた。

俺は残りの洗濯物を投げ込み、エアガンを手近く椅子に腰を下ろした。

銃身は銀色でグリップ、引き金などのパーツが黒色のこのエアガン。特に一風変わった風には見えない。名前とか種類とかはわからないがホビー屋とかで飾ってある普通のモデル。

もらうだけもらったが、俺はこれを全く使いこなせなかった。御影の腕には到底かなわない。もちろん御影には俺と違って練習をする時間などがあつたかもしれない。しかしそうだとしても彼女の腕に俺が匹敵できるかどうか、それはかなりの時間を要すると思う。彼女に二丁持ってもらっていた方がより良いのではないのかと思うぐらいだ。

俺は別にだからって悔しいわけでもうらやましいわけでもない。ではなぜこんな事を考えているのかっていうと、一つ疑問が浮かんでくるからだ。ただ、それが引つかかって仕方ないんだ。

どうして彼女は俺を誘った？

あれほどの腕ならば、ひとりであつても倒せたはずだ。事実、俺が不意打ちで倒した一人以外は全員彼女が倒した。

それなのに、彼女は俺をわざわざ誘った。不意打ちでしか倒せなかった俺を。

確かに、俺にはあのサーバーを奴らから取り返したい理由もあったし、それに付き合っただけの時間もあつた。だから選ばれたことは疑問を感じない。

しかし、問題はそもそもなぜ誘う必要性があつたのかということだ。

どうしてだよ……御影。

気づいてみるとすでに洗濯機は止まっていた。

俺はアパートに帰り、降られた雨のせいで依然としてビショビシヨの洗濯物の横に、今洗いたてのものを干していった。

栄養価とかを考えるとあまりよくないのだろうが、どうも疲れていたの食パンを生ではおぼり寝た。

朝、部屋には朝日がキラキラと差し込んできた。

外を見ると、昨日と違って雲ひとつない空。

Diosで確認しなくなつてこれは降水確率0%で間違いない。

俺は昨日寝る前に新しく下ろしておいた夏服を着てアパートを出た。

橋の上を通る時、俺はDiosをつけながら歩いた。

表示を確認しても異常はない。快調だ。

昨日、俺とあいつでハックしたサーバーは正常に動いている。

これで光成のような人が出ることもなくなるだろう。

誰にも言えない満足感を抱えて俺は授業を受けた。

「ねえ、知ってた？ 橋のサーバーが直つたらしいよ」

昼休憩、食事をとっている俺と光成のもとへ牧瀬が近寄ってきた。

「本当か？ せめて俺のがダメになる前に政府も直してくれよ」

光成はうなだれた。

「いや、それが別に市の職員が直したつてみたいじゃないみたい。

サーバーには職員が点検にきたつてという記録が残つてないんだつて。

記録では去年の十二月以降点検をしてないみたい」

牧瀬は不思議そうに光成に話した。

「なんだそりゃ。不思議なこともあるもんだな」

「どうしたの望月君？ さつきから横でニヤニヤして。なんか気持ち悪いよ」

俺は咳払いをして、顔の表情をほぐし。

「いや、なんでもないって」

とあっさりと言っように努めた。

光成はそれを見てか、こちらを覗き見て言った。

「なんだ？ 良いことでもあったか。そういえばいつもはすぐに帰るお前が昨日は帰らなかったな。……もしや、てめえ女と」

「さて相手は誰かしら？」 光成に続いて牧瀬も俺を責め始める。

教室内にいる人々がちらちらと俺の方を見始めた。喋っているのが俺たちだけだからまる聞こえなんだろう。

なにやら小声でこちらに聞こえないように話す女子もいる。

「ち、ちげえよ。昨日は、雨がやむのを待ってたんだよ。あの後止んだろ。それを待ってたんだよ」

俺はワザと大きめな声で弁明した。

「だからそれは私が傘かしてあげるっていったでしょ？ なのに、断ったもんね。怪しいなあ……」

牧瀬が細い眼をしてこちらを凝視する。

「だから、やっぱり悪いと思っつてさ。俺は最悪濡れても構わないと思っつてたんだから」

光成はその言葉を聞くや否や上げ足を取りに来た。

「でも今日は冬服から夏服に変えてきたよな。昨日結局雨に濡れたんじゃないのか？」 明らかに優越そうな笑みで俺を見る。

「たまたまだよ。熱かったからもう移行したんだ」

「ほお、そうですか」

「そうだよ」

依然として牧瀬と光成は俺を疑惑の目で見ていた。俺からもうボロ口がでないと思っつたのか「まあいい」と光成は話を切った。俺としては色恋の疑惑を持たれるより、昨日のあの事件を悟られる方が都合が悪いので、そっち側に持つてかれる方がましなんだっただが。

「そんなことより先生からの伝言なんだけど、望月くん図書委員だから昼休憩に図書室に行ってくれだって。読書アンケートのことに ついての説明らしいよ」牧瀬は俺に一枚の紙を渡した。

『昼休憩 望月、目黒 図書室』と書かれたメモ書き。

「目黒？ あいつも図書委員だっけ？」俺は牧瀬に聞いた。

「そうみたい。目黒さんにも伝えてあげて。早くしないと遅れるよ」
「わかった」

俺は食べかけのパンをおいて、席を立ち上がり目黒を探した。

俺と対角線上の一番端の席に彼女は座っていた。

彼女の前まで歩み、話しかける。

「目黒さん。図書委員の集まりがあるみたい。今から図書室にだつて」

なるべくとげのない言葉で彼女に説明する。

「……わかりました」下を向いたままぼそぼそと彼女は答えた。

俺と同じクラスの目黒。いつも顔を隠すように前髪を下ろしている。いつも下ばかり向いていて、加えて体格も小柄なので、顔をはつきりと見たことはない気がする。正直あまり彼女の事は知らない。とにかく大人しくて人と話しているところを見たことがない。だからこうやって俺が話しかけるにも少し気をつかねばならなくなる。
「じゃあ、いこうか」

今の俺の言葉づかいはすげえ好青年ばいだろう。どうしても男子と関わりあいのない女子と話す時、気をつかってこんな言葉づかいになってしまう。

彼女はうつむいている顔をさらに下に振ってうなづいた。そして、黙って立ちあがり、俺を気にする様子もなく先に教室を出て行った。

俺、別にへんなこと彼女にしてないよな。なんかすごく疎外感を感じるんだが……、俺も行くか。

「このプリントを配布して来週までに集めて提出してくださいね」

図書室での説明は読書アンケートを記入する用紙を俺たち図書委員が配布し、それを後に回収せよという簡単なものだった。

俺はときたま自分の横に座っている目黒を見ていた。

下ろした髪によって顔はうかがえないが、本当にこいつは聴いて
いるんだろうか？ まあ、こっやっていらぬことを考えている俺
よりはこうみえても聞いているのかもしれない。

「それじゃあ、解散」

友野先生がそう言うのと、すぐに目黒は立ち上がり図書室を出て行
った。

配られたアンケート用紙は彼女が持って行った。俺はなにもしな
くていいのか？

教室に帰ってみると、全員の机の上にアンケート用紙が配られて
いた。そして目黒はやはり自分の机にさっきと同じように座ってい
た。

自分の席に腰をおろし、アンケート用紙を机の収納に投げ込んだ。
教室の時計を見るともう休憩があと少しで終わる。さすがに今か
ら屋上にいこうとは思わない。

俺はそのまま午後の授業を受けた。そして放課後。

「光成、一緒に帰ろう」

俺は光成に話しかけた。

「ああ、良いぜ。どうせDiolsが直るまではまっすぐ家に帰るし
かないからな」

「いつ直るんだ？」

「そうだな、一週間はかかるだろうな」

「今週末ぐらいには出来上がってるだろ」

俺たちは昨日俺が戦った戦場を通りすぎ、それぞれの我が家に帰
った。

それから三日後、昼休憩に屋上で寝ていると俺に呼びかけるもの
がいた。

「望月、起きて」

俺は目をこすりながら上体を起こした。

目の前に御影が立っている。

さっぱりとした夏服のシャツ姿。屋上を吹く風にスカートと髪がなびいている。

服をはたきながら立ち上がる。

「どうした？ 昨日もその昨日も現れなかったのに今日になって」

「ここ三日間は調査してたのよ。次にハックするサーバーを現在ハックしている者をね」

「どこのサーバーだ？」

「駅裏よ」

もう一年以上おかしい駅裏のサーバー。光成がよく嘆いていた。

「で、調査の結果は？」

「それが、わからないの」

「は？」

「実際にサーバーにある場所を見張ってみたけど、特に群れてる集団は確認できなかったわ」

「なら、もうそこをハックした奴はほったらかしているのか？」

「いえ、放っておいたなら私でも時間さえ要すれば戦わずしてハックできるわ。ハックしたサーバーはある程度時間が経つと他人に侵入される隙ができるの。だからハッカーは定期的にそこに足を運ばないといけない」

「でもそれらしい集団は現れてないんだらう？」

「そうなの、たまたまチエックした次の日から私が見張っているのか、もしくは私が気付かなかったのか……」

「どちらにしるなぜ駅裏なんて激戦区らしいところを選んだんだよ」

「他のサーバーは大勢でキーを持っているから二人では無理なのよ。駅裏のサーバーはキーを持つ人数が少なそうだと思う。あそこは狭くてとても大勢でいられる場所じゃないし」

「で、どうするんだ。今日行くのか？ 俺は俺のダチの為にあそこを取り返してやりたいが」

「調査の時はDiosを外していったけど、今日はDiosをつけて銃で武装もしていくわ。もし、敵が現れて倒せそうなら今日倒す。

いなければまた延期ね」

「わかった。また放課後に屋上に集合か？」

彼女はあごに右手をつけてうつむきすこしの間考えていた。そして、考え終わったのか右手を下ろして言った。

「いえ、現地近くで集合しましょう。この前みたいに屋上であつていると、誰かにバレるかも知れないわ」

確かに光成と牧瀬には結論は違えど、それを疑われたからな。

「でも俺は駅の裏のサーバーの場所を知らない」

「駅の裏あたりに着いたら連絡をちょうだい。目印になるものを言ってくればそこへ私がいくから。なるべく人気ひとけのないところ呼んでよ」

「人気のないとこだな。大丈夫誰にも見られないようなところにするさ」

「じゃあ、なるべくいそいでね」

御影はそう言い残して屋内へ去って行った。

俺はあくびを一つして、彼女に続いて下へ降りた。

俺は教室に帰って誰にも見られてないことを確認してから、自らのカバンにあのエアガンが入っているのを確認した。アパートには寄らず、直接駅の裏にいこう。アパートは橋を渡って駅と反対にあるからな。

放課後になって光成が話しかけてきた。

「帰るか」

「今日は橋を越えてもお前と一緒にだ」

「なんだ、駅周辺に用事か？」

「ああ、ちよつと買い物な。食料の買い出しだ」もちろん嘘である。

橋を渡り、いつもとは逆に光成と同じ方向へ進む。光成の家はここから駅の向う側だ。必然的に彼は駅の周辺を通らなければならぬ。光成が駅裏のサーバーについて嘆くのはそういうことだ。

「橋の下のサーバーみたいに駅裏も直ればいいのにな」

光成は何げなくいったのだろうが、俺は自分のしでかしたことに触れられ動揺した。

「あ、ああ。そうだな」

幸い光成はつつこんではこなかった。

踏切をわたり駅の裏に出た。

「俺は買い物しに行くから。じゃあな」

「ああ、また明日」

俺は光成にさよならを告げ、近くの路地に入った。

路地を少し歩くとつぶれたパチンコ屋があった。ここら一帯は昔この街の商業の中心地であつたらしいが、今では駅の表にできたスパーなどに押され、今ではシャッター通りと化している。

周りに誰もいないことを確認し、御影にコールした。

「今、つぶれたパチンコ屋の前にいる」

『わかった。すぐに向かうわ』

一分くらいで御影は現れた。周囲を気にしながら彼女はやってきた。

「誰にも見られてない？」

「ああ、今だつて俺たちだけだろ」

彼女は警戒を解いて話を始めた。

「サーバーはこの通りの二つどなりの通りにあるの。通りの一番奥にひっそりと設置されている。敵がいることも想定して慎重に行きましょう。ほら、カバンはそこらへんに置いておいて」

俺は言われるがままパチンコ屋の看板の裏にカバンを置き、中から銃を取り出し、御影について路地を進んだ。

通りを横切る細い路地を進み、そのサーバーのある通りが目の前に見えた。

通りといつてもシャッターの閉まった店ばかりで、幅も2メートルぐらいしかなく、すぐ隣に並び立つ建物の為に日も当たらず薄暗い。おまけにここから見ただけでもビールケースや段ボールなどが道に積み上げられていて、見通しは悪そうだ。隠れるのにはもってこいだろう。

御影は慎重に通りまで近づき俺に説明した。

「私たちがいるのは通りの入り口のあたり。ここからサーバーまでは三十メートルほど距離がある」

彼女は話をやめ、顔だけ通りに出して、サーバーの方を確認した。

「誰もいない。行きますよ」

「ああ」

俺は安心しきり銃を片手に彼女のあとをぶらぶらついて通りをサーバーに向かって歩いた。

彼女は先頭で姿勢を低くして銃を構えて、数メートル間隔にある横に這う路地を確認しながら慎重に歩いている。

ここから見ればわかるがひとつこひとりいない。何もそんな慎重にならなくてもいいだろう。どうせ今日は来てないんだ。

サーバーまで残り十メートルあたりまで来た時。突然、御影が大
きな声で叫んだ。

「伏せて！」

俺の横を弾がかすめていった。俺は近くに積み立てられてあつた
ビールケースの裏に隠れた。御影も段ボールの後ろ転がり込んだ。

「やっぱり待ち伏せしてた」

「あぶねえ。間一髪だ」

俺たちはそれぞれ障害物に背をあて、銃を胸の前にかまえた。
俺は敵を確認しようとビールケースから顔を少しだけ出した。

連続的に発砲音が鳴り響く。

顔をすぐにひっこめる。

俺の横に何発もの弾が転がってくる。

「あいては電動式のを使ってるようね」

御影がそういう間にも、絶え間なく弾がこちらに向かって飛んで
くる。これでは敵を確認することもできない。

狭い通りに発砲音が鳴り響く。

「どうする？ これじゃ顔もだせない」

「完全に火力で劣るし、私たちには相手の位置がわからない。ここ
は退却しましょう」

御影は銃を下ろして俺に指示した。

「あなたの後ろにある路地から逃げるわ。早く」

俺はビールケースを利用し弾が当たらない場所を選んで後ろにある
路地に逃げ込んだ。

「お前は？」

彼女のいる場所は反対側。こっちに来るには敵の射程範囲に入っ
てしまう。

「大丈夫」

彼女はそういつとすぐに走りだせるように片膝をついた。

敵の連射がいったん鳴り止む。

その瞬間について御影はこちらに走りこんだ。

「さあ、逃げるわよ」

俺は背中を押されるままに路地を進み、元パチンコ屋の前まで帰ってきた。

「あんなに連射されちゃあ、近づけねえよ」

「でも、敵はおそらく一人。気づかれないように近寄れば」

「どうして一人とわかる？」

「私が通りを横切った時、あれだけ続いていた発砲が途絶えたでしょう。おそらく弾切れで弾を装填していたんでしょうね。もし、二人に以上いるなら発砲を途絶えさせないように、二人同時にリロードなんてしないはず」

「ならば、その瞬間に近づくか？」

「もし、銃を二丁持っていたら近づこうとした瞬間にもう片方で撃たれるわ」

「やっぱり、バレないように近づくべきか」

「今日は失敗。もう一回やり直しよ」

御影は銃をスカートの側面につけられたホルダーに戻した。俺も、カバンに投げ込む。

「また、明日か」

「いや、不意をつくなら明日はやめるべき。少し目を開けるわ」

彼女は通りの出口に向かって歩き始めた。

「屋上で」

そう言い残した。

翌日の屋上。

「さてどうしたものかしら」

彼女は両手を後ろで合わせ足元を見ながら、俺の前をぐるぐる回っている。

俺は壁に体を預け、手をポケットに突っ込んだ。

「さてどうしたものかねえ」

「考えてないでしょ」

「考えてるぞ。考えてる。でもわからねえんだな」

御影は歩くのをやめ、俺の見つめる方向を見た。

トンビが空高く舞っている。

「三日後にもう一度近寄ってみましょ」

「了解」

地に腰をおろして日陰に入る。

俺の横に御影も腰を下ろした。

今日は日差しが強い。真夏になるとこの屋上は地獄と化す。もうそろそろここでゆっくりできなくなる。

「教室、帰らないのか？」

空を見上げたまま御影に聞く。

「帰らなきゃだめ？」

「いいや。別に」

「教室は蒸してるし……」

「俺んところはさらに死体が転がっているぜ」

「それは涼しそうね」

「……」

「……」

雲が流れていく。ひとつ、ふたつ、みっつ。あのトンビの姿が見えない。どこ行ったのだろうか。

横を向くと髪を耳の後ろにかきあげている御影が写る。

涼しい目をして空を見ている。

学生生活は本人次第でいそがしくも退屈にもなる。

俺たちはどちらかというと退屈な部類に分類されるだろう。

休憩中、呆け続けた。

チャイムが鳴り響く。

俺は起き上がる気になれなかった。

彼女も立ち上がるうとはしない。

「鳴ったぞ」

俺は呟く。

「知ってる」

御影は答えた。

それきり、俺が口を開くまでいくらか静寂が訪れた。

「本当に退屈だ」

「……そうね」

目の前がぼおつとし始める。

心地よい風が頬をなで、俺はそつと目を閉じた。

次に目を開けた時、御影はいなくなっていた。

真上にあつた太陽は傾き、海の上方に移動している。

俺は屋内へ戻った。

教室から聞こえる人の声。

察するにもう下校時間になってしまったようだ。

教室に入ると何人か俺をいぶかしげに見つめる。

「もう下校だぜ」

自分の席に行くとき横の光成が言う。

「どうせ場所がわかつてんなら、起こしに来てくれたらどうだ？」

「俺はためえほど暇じゃないんだよ。ほら帰るぞ」

俺は光成と共に教室を出た。

廊下を歩いていると一人の女子がこちらに向かって手を振りながら近づいてきた。

「勇斗ゆうと。あんたこんどの試合見に来る？」

「それ、いつ？」光成が返す。

「今週の土曜。来るよね？ 来るよね？」

その女子は両手を胸の前で折るようにして構え、光成に言い寄った。

「うーん。パスだな」光成はしらつと言り返す。

「えー。全くもう。また戻ってくるのまってるからね」

「ああ、それとなく考えとくよ」

「ちゃんと考えてよね！ じゃあまた」

「おっ」

彼女は手を振りながら離れて行った。

すると後方からもう一人。

「光成くん。ちょうど良かった。今から練習だけど寄ってく？」
さきほどの活発そうな子と比べ、こちらは大人しめである。

「いや、今日はまっすぐ帰るから。悪いな」

その子は残念がりながら言う。

「仕方ないか。また、気が向いたら来て見てよ」

「わかったよ」

「さよなら」その子は手を振り、元の方へ戻っていく。

「またな」

光成も手を小さく降った。

「たまには参加してやったらどうだ？」

俺は彼に言ってみた。

「でも、あんまりおもしろくねえんだよな」

光成はそう言って歩きだした。

光成は今でこそ帰宅部の鏡のような男になってしまっているが、実は多才で、以前は部活動をしている時期もあった。どの部活でも主力として活躍を期待されるほどの実力は持っているのだが……、どうしてか全て長続きしない。先ほど本人が言った通りおもしろくないのだそうだ。よって、今では以前入っていた部からオフアールがやってくるのだ。ちなみに寄ってくるのが全員女ばかりなのは本人の性格がそうさせているのだろう。先ほど、俺が光成に頼みごとをした時に返された『俺はお前ほどいそがしくない』という言葉も、実際昼には廊下でさまざまな女子と喋っているのだから確かに暇ではなさそうだ。彼なら彼女の一つできても良さそうだが、全て友達になつてしまい、それ以上の発展がない。本人にはその気がないみたいである。

俺はその才能を他の男子にも分けてやってほしいと思いつながら、彼のスタイリッシュなミドルヘアを前に見据え歩いた。

三日後、屋上で御影は言った。

「今日、またあの場所へ行くわよ。今度は敵に見つからないように」

近づくわよ」

「あれで先手をとられると不利だからな」

「じゃあ、あのパチンコ屋で待ち合わせね」

「わかった」

放課後、光成と下校する。

「じゃあ、また明日な」

橋を渡り切ったところで光成が言う。

「いや、まだおわかれじゃないな」

俺は光成と同じ方へ足を出す。

「どうした。また、こっちへ用か？」

「買い物だよ」

「そうか」

俺と光成は学校であつたたわいないことを話しながら歩いた。

駅の裏まで来た時、俺は彼にさよならという。

「じゃあな、明日」

「おう」

光成が向うへ歩いて行くのを確認して、俺は通りに入って行った。

薄暗い道の向うに誰かが立っている。

例のパチンコ屋の前で御影がこちらを向いて待っていた。

「来たわね。作戦開始」

「へいへい、ラジャー」

俺はカバンを看板の裏に置き、彼女と共に路地へ入っていく。

サーバーのある通りに近くなつた時、彼女が立ち止まる。

「ちょっと待って」

彼女は自分のDiosを見た。

ホログラムには『いますぐ立ち去れ』との文字が出ていた。

その時、俺のDiosが鳴りはじめた。

「バカっ！ 早く音を消して」

御影は小さな声で俺を叱責した。

俺がDiosを触ると音が止まり、彼女と同じようにメッセージ

が表示された。

『いますぐ立ち去れ』と同じものだ。

「これは？」

俺は彼女に顔を向けて質問を投げかけた。

「敵がサーバーに近づくものへ向けたメッセージでしょうね」

「なら、気づかれてるんじゃない」

「いえ、これは近づいた者へ自動で送られるものだと思う。仮に敵にバレてるとしても居場所を把握されないように近づけばいいわ」

「あれだけの障害物があればそう難しくもないだろうな」

「それより、なんで消音かバイブレーションにしてないのよ！ 少しは考えてよ」

彼女が口を尖らせ言う。

「悪い悪い。ほら、早く行くぞ」

「もう」

ふてくされたように言っつて、彼女は進み始めた。

路地を進み、サーバーのある通りの直前までやってきた。

彼女が小声で伝える。

「いい。向うから見えないように進むのよ」

「わかってる」

俺と彼女が今から通りに侵入しようとする時、乾いた発砲音が鳴り響いた。

俺たちのいる路地に弾が一つ飛んでくる。反対側の壁にあたって進行方向を変えた弾がこちらに向かって飛んでくる。

ダメだ！ あたる。

跳ね返ったBB弾は俺に向けて距離を詰めてくる。

その時、俺の体に大きな衝撃が走った。

俺は後方へ飛ばされ、仰向けに倒れた。そして後頭部を打った。
「ぐはっ」

つづいて腹部に痛みを感じた。

重い。何かが俺の腹部に乗っている。

下を向くと俺の上に御影がうつ伏せに倒れこんでいる。

上から見ると十字のような形をして倒れこんだ俺たちは、どうにかして攻撃から身を守ることができた。

「痛てて」

俺は後頭部をさすり、起き上がろうと思った。しかし、乗った御影のせいで起き上がれない。

「御影！ 御影」

俺が呼びかけると御影は地に手をついて上体を持ち上げ。

「ごめん」と言う。

彼女は立ち上がり、俺に手を差し出す。

「はやく。逃げなきゃ」

俺は手にひかれて起き上がり、走りだした。

パチンコ屋の前まで逃げおおせると、彼女は言った。

「ああするしかなくて……。怪我はない？」

「すこしうったが、特に問題はない」

「なら良かった」

俺に弾が向かって飛んで来た時、御影は俺に向かって体当たりし、俺を弾から守ってくれたようだ。

おかげで、弾は避けれたが、その後自分も倒れこんでくるという手荒い方法である。

「にしても、どうして弾が？」

「わからない。私たちの居た位置から敵が見えないように、敵からもこちらは見えなかったはず」

「でも、あの弾は俺に向かつて飛んできた。それも一発。適当に撃ってるんじゃない。あきらかにこちらの位置を把握した上で狙ってきている」

俺の的確な分析を聞いてか、彼女は言葉に詰まった。

「……わかつてるわ。でも、こちらに落ち度はなかったと思う」

「存在に気づかれてたとしても、場所まで特定されるとは……」

「今回も失敗ね」

彼女は通りの出口に向けて歩き始めた。

俺はカバンに銃をしまい、その後を追った。

通りの出口まで来たところで彼女は振り向き言った。

「明日屋上で」

彼女は走りだす。

「おいっ！」

俺は彼女追って通りを出た。しかし、彼女の向かった方向には誰もいない。どこにいったのだろうか？

「なんだよ……」

道には電柱の影が横たわっていた。

俺は進路を反対にとって家路についた。

「なあ、明日ついに俺のDiosが戻ってくるぜ」

翌日の昼。弁当を食いながら光成は声ははずませて言った。

「それは喜ばしいことだ。予定より早かったな」

俺もパンにかじりつきながら適当に返事をする。

「これで悠々自適に遊べるぜ。にしてもまた壊れたりしねえかな？

セキュリティのレベル上げとくか」

「しといて越したことはないが、たぶんしないだろうな」

「どうしてわかる？」

光成が問う。

「橋の下のサーバーだって直ったしな」

「何言ってるんだよ。今日にでもまたハックされるかもしれないだろ」

(指をふるつもりで) チツチツチ、光成、そんなことはある訳な

いんだよなあ。なぜならあのサーバーは俺と御影がすでにハックしているからだ。心配することはないんだよ。

「そうかもねえ」

俺は普段と変わらぬ口調で言う。

「なんだよそれは」

光成が俺を怪しげに見る中、牧瀬が俺の下へやってきた。

「望月君、これ」

彼女は一枚のプリントを差し出した。

それは俺がいつか説明を受けた読書アンケート用紙だった。

「これがなんだ？」

「今日が提出日だけど……」

しまった忘れていた。

「そうか、今から集めるよ」

俺は用紙を回収するため席を立った。

「あの……」

か細い声が出た。それは牧瀬から。しかし、牧瀬の声ではない。

牧瀬はその場を横に動いて、後ろを見た。

「目黒さん？」

牧瀬がその場を退くとそこには目黒が立っていた。

地面を見るようにうつむき、前髪が顔にかかっているどこに視線が向けられているのかよくわからない。

彼女は両腕で多くのプリントを抱えている。

「あの……これ……」

もじもじとそう言う。おそらく俺に向かって。

そして、そのプリントの束をこちらに突き出す。

「集めてくれたの？　ありがとう」

俺は軽く笑顔を作って礼を述べる。

「……いや……べつに……」

彼女は長い時間をかけてその聞こえるか聞こえないかもつかない声でそれだけ言うと、自分の席へと帰って行った。

「なんだよ、あいつ。もうちょっとはつきり喋ったらどうだ」

光成は明らかに不快感を感じているようだった。

「悪気はないんだって」

牧瀬が彼をなだめる。

光成はやはり不満そうにしながらまた弁当を食べ始めた。

俺のDiogsが鳴り始めた。

ホログラムには『御影 沙織』との表示。御影からの呼び出しだ。俺はすぐに保留にした。光成と牧瀬にホログラムの御影の名前を見られるとやっかいな事になると思ったからだ。

教室から出て、トイレに行く。誰もいないことを確認して電話に出る。

「なんだよ。突然」

『はやく上に来て』

「すぐ行くよ」

俺は屋上へ向かった。

「昨日屋上に来てって言ったでしょ。なんで、早く来ないのよ。そもそも電話にもすぐでないなんて」

御影はとげとげしく俺に当る。

「お前こそ考えてくれよ。こっちもバレないように必死だったんだよ」

「もういいわ。それより、あのサーバーの件を話しましょう」

「結局どうするんだ。今まで二回ともしてやられた感じだが」

「そうね。明らかに相手は私たちより状況を把握している。だから裏をかくとかそういう類の作戦ではこっちに歩があるわ」

「そうだろうな」

確かにあれだけこちらの行動が見透かされていては、裏などかけもしないだろう。

「相手はおそらくひとり。ならば……」

彼女はこちらをニヤリと不敵な笑みを浮かべ、こちらを見る。

「ならば？」

何やら嫌な予感がする。

「力で押すしかないでしょ」

予感的中。

「一対二なら真っ向から向かえば、相撃ちになってこちらは一人生き残るわ」

「俺がお前がやられるの前提の話かよ」

「しょうがないでしょ。うまくオトリになってちょうだい」

やはり俺にとってはロクでもない作戦だった。

「俺に決まりかよ!」

「いや、この前の戦いぶりを見てだけど、オトリでなくてもあなたの方が先に狙われると思うわ」

確かに彼女の身のこなしを考えると、明らかに俺の方が的としては狙われやすいだろう。

「……悪いが自分から撃たれるつもりはないよ」

「ならせいぜいがんばってね」

あんまり励みにならない声援である。

「で、日取りは?」

「来週の月曜日。三日後よ。もうこれ以上逃げてもしょうがないし、勝つか負けるかどちらかよ」

「はいはい」

予鈴のチャイムが鳴る。

「忘れないように」

御影は俺を残してさっさと下に降りて行った。

俺も教室へと帰る。

「望月。お前急に教室を飛び出してどこ行ってたんだ?」
光成が聞く。

「急に腹が痛くなつてな」

「それは気の毒に。それよりお前、アンケート用紙を出しにいかなくていいのか?」

「ああ、五時限が終わってからでいいよ」

俺はその後授業を受けた後、アンケートを先生へと提出しに行った。

「期限は今日までって言ったけど、なるべく昼休憩に来てほしかったな」

友野先生は俺がプリントを渡すと、不満をもらす。「ほしかったな」の辺りの言い方がなにかと可愛げである。

「一応、期限は守ってるでしょ」

「でも私は昼までのつもりだったの。今度からは頼むよ」

「なるべく気をつけます」

「なら帰ってよし。残りの授業寝ないように」

先生は胸の前で右手で小さくガッツポーズをした。

俺は、では、と頭を下げ退室した。

先生は笑っていた。

帰り道の途中、光成が言う。

「俺のDiосも直るし、明日その回収がてら遊ばねえか？」

「別に暇だしいいぜ」

「なら明日の一時に駅前だ。いいな」

翌日、一時。

五分前からここにいるが光成は現れない。

電話をしようにもあいつはそのDiосを持っていない。

時計が一時五分を指す。

光成は遅刻者とは思えぬほどゆっくりと歩いてやってきた。

「待ったか？」

本当に待ってる人には言うことのできない問いかけ。

「待ったよ。五分でよかったけど」

光成は片手を顔の前で立てて。

「すまんすまん。家の時計を見て出たんだけど、こんなにかかるとは思わなくてよ。やっぱりDiосがないと不便だぜ」

「お前がちんたら歩くのがいかんのだろうが」

「まあ、言っなって。じゃ、行くぞ」

半ば強引に押し切られ、俺は彼とDiosショップへと向かった。ショップは駅の横に立つデパートにテナントとして入っている。ショップに着くと光成は受付カウンターに行き、店員と話始めた。俺は彼の用事が終わるまでショップ内を見て回ることにした。

最新型のDiosがずらりと並べられている。

デザインが斬新なものから、年寄り向けにホログラムの表示が大きいもの、音楽プレーヤーとしての機能を重視したものなどいろいろなおニーズに合わせたDiosが置いてある。

やはり最新型のもものは魅力的ではあるが、月の生活費を気にしている俺には機種変更なんて贅沢は言ってられない。俺は視界からそれらを遠ざけるように壁際の旧機種の展示されているコーナーへと歩いた。

店のカウンターの場所から反対のこの位置は外から目につきづらく、時代遅れの商品はここへ追いやられている。

俺のDiosよりも古いものや、今更だれが買っていくのかわからない携帯電話なんてものも置いてある。

レトロな商品に俺は興味をそそられ、しばらくサンプルを吟味していた。

そろそろかと思いカウンターの方を見ると、光成は直ったDiosを腕につけながら、店員の説明を受けているようだった。

俺はサンプルを元の位置に戻し、カウンターへと向かった。

「では修理の内容は当社のサイトで確認できますので」

「ええ、わかりました。それじゃ」

「またのご利用をお待ちしております」

光成はDiosを立ち上げて、直ったかどうか確認しているようだった。

「よし、大丈夫だ。それじゃブラブラと遊ぶぜ」

光成は何か重しが取れたかのように軽々とした口調と足取りで俺に近づく。

「どこに行くよ？」

俺は光成に任せることにした。

「そおだな。とりあえずゲーセンでも行くか」

俺たちはデパートの最上階にあるゲームセンターに向かった。ワンフロア全てが娯楽施設となっている最上階では、半日潰すことなど難しいことではない。カラオケボックス、ダーツ、卓球、アーケードゲームとなんでも揃っている。

「望月。久々に俺とやってみないか？」

彼は店の奥のレトロゲームコーナーへ足を運び、対戦型ゲームによる勝負を申し込んできた。

「手加減してくれよ」

「俺だつてブランクがあるだろうから大丈夫さ」

俺たちは互いに同じゲームの前に座った。

俺の前には映像を映し出す画面と、操作をするためのレバーと四つのボタンがある。最近は体感型ゲームが増えているためにこのようなゲームは少ない。

俺は百円硬貨をゲームへ入れる。

タイトル画面が表示される。その中で店内対戦を選択し、光成を待った。

数秒後に「挑戦者が現れました」と画面に表示された。

俺たちは互いにしようするキャラクターを選択した。

そして、カウントがされゲームが始まる。

昔っからある格闘ゲームのシステム。自分の体力を表すバーがなくなると負けだ。

がんばってみたが、光成にコテンパンにされてしまった。俺は敵の体力を半分も削れなかった。

「おいおい、張り合いがねえな」

席を立った光成が俺のもとへ来て薄笑いしながら言う。

「なら別のでやろうじゃないか」

負けっぱなしも嫌なのでもうひと勝負申し出てみた。

「わかった。何にする？」

光成の対応には余裕が見てとれた。

「なら、これだな」

俺はエアホッケーの台を指さした。

「ほう、てつきり俺の苦手なものを選ぶかと思えば……、良いね。それでこそやりがいがある」

さっきのように光成は古いタイプのゲームにはとても強い。それは彼が中古で買ったレトロゲームを家でやりこんでいる方だろう。しかし、最近のはおもしろくないとしないため、新システムのゲームにはめっぽう弱い。彼の苦手なものを選べば勝てる確率はぐっと上がるだろうが、それでは俺も満足できない。彼と同じ土俵の上で勝つてこそ意味がある。

俺たちは台を挟んで向かいあった。

お金を入れると、台からエアアが噴出し始める。

エアアの吹き出しと同時に埃が舞った。

俺たちはせき込み、光成は言った。

「けほっ、けほっ、だいぶ使われてなかったみたいだな」

「そりゃ、実物のパックをつかってするホッケーなんて、もうこれだけだぜ」

大半のホッケーゲームは対戦者が3D映像の中のパックをモーシヨセンサー付きのマレットで打つものになっている。

「でも、俺はこっちの方が好きだけどな」

俺の側からパックが出てきた。俺が先行だ。

「よし、じゃあ行くぞ」

俺は彼のゴールを直接狙わず、外壁へと一度ぶつけ軌道が変わるようにパックを打ち出した。

しかし、彼はその反射したパックをいとも容易く打ち返す。

そして俺のゴールへ一直線。俺は間に合わなかった。

「まずは一ポイント。しつかり楽しませてくれよ？」

俺は手元から吐き出されたパックを思いきり叩いた。

「いやあ、久々に遊んでスカツとしたぜえ」

ゲームセンターでの遊びを満喫した俺たちはそのままパート内をブラブラしていた。

「お、この服いかしてねえ？ 値段も結構良い具合だしよ」

光成は横のブティックのショーウィンドウに気をとられている。

俺は彼の身の回りを気遣い注意してやる。

「無駄遣いをするんじゃないよ。お前だけの金じゃねえだろが」

「わかってるよ。腹が減ったから何か食いもんを買いに行くか」

彼の対象が服から食物に移ったのは、良いことだろう。

俺は彼と一緒に一階の食品売り場へと降りた。

梅雨もあけたようで外にしていると汗ばむようになってきたが、この食品売り場はデパートの中でもより一層冷房が効いており、半袖の俺には少し寒いくらいだ。

パックされた肉などが並べられた商品棚を過ぎて、スナック菓子の売っている場所へ行く。

光成は商品棚を見まわして、少し思案しているのかポップコーンとポテトチップスを見比べた後、ポップコーンに手を伸ばした。

「映画とか言ったらよく食うよな」

光成は独り言のように呟く。カップ入りのを食べ歩くのはまだ解るが、袋のポップコーンを食べ歩いている奴はあまり見たことはないが……。

光成はそれだけ手に取るとレジの方向に歩きだした。

店内には客が少なく、容易にレジへと並べるかと思われた。

しかし、そうはならなかった。

「お兄ちゃん！」

レジの前の通路にいる俺達に向かって叫ぶ声。驚きと怒りが混ざった声色。

「げっ！」

その声の方には一人の少女が。そしてそれを確認した光成はしまったとばかりに歩みを止め、驚いている。

少女は様々な食材の入ったカートを押しして、こちらまで小走りであつてくる。

光成は「頼んだ」と俺にポップコーンを押しつけ、反対側へ逃げようとした。

すかさず俺は彼の襟の後ろを掴み、逃げようとする彼を片手で引き止める。

「おい、放せよ！」

彼は俺にそう頼んだ。もちろんその頼みは聞いてやれない。

目を離れた隙にいなくなったと思ったら、やっぱり遊んでた」

こちらまで来た少女は、観念してその場に立っている光成に言う。「麻美ちゃん。ごめんね。俺が知ってたらこいつをすぐにでも家に送り返したんだけど……」

「いえいえ、別に望月さんは良いんですよ。悪いのはお兄ちゃんですから」

彼女はそう言って兄へと冷たい視線を投げかける。

「おい、どうということだ？ お前は妹に大量の買い物を任せて、自分は何をしてる」

彼女の押すカートには野菜やら肉、調味料などが入れられている。か細い女の子が持つのには少し酷な重さだろう。

「麻美、いつも付き合ってるんだから今日ぐらい良いだろう？」

光成は彼女に許しを請う。

「ダメ。お兄ちゃんも食べるんでしょ？ これ。一週間ご飯抜きならいいけど」

「いや、それは……」

さっきまでの威勢の良さはどこに行ったのか、光成はしおらしくなった。

「そういうことだ。遊んでないでお前は今から荷物持ちだ」

「せつかく久々に自由になれたのによお……」

光成はがっくりと肩を落とし、仕方なさそうに自主的にカートの持ち手を握った。

俺は麻美ちゃんに言う。

「こいつが逃げでもしないように今からついて行くよ」

「良いんですか？ せっかくの休みなのに」

「いいんだよ。どうせこいつに付き合わされてたんだから。一緒の事さ」

「ありがとうございます。助かります。じゃあ精算するんで」

明るい声で彼女は俺に謝礼を述べ、光成と一緒にレジに並んだ。

精算を済ませ、荷物をしっかりと光成に持たせ、俺は彼らが家に帰る途中同行した。

「それにしても熱いですね」

外は太陽の光が肌へささるように照りつけていて、目の前に続く道はゆらゆらと曲がって見えた。

道の左手にはついこの前御影とろちよろしていたあの通りが並んでいる。うすぐらい通りも日よけになって涼しそうだ。

俺はDiosに表示されている気温を確認してみた。

「三十二度か。まだ、夏も始まったばかりなのにね。梅雨明けしたら急に熱くなっただね」

「雨がやんだかと思うとこれじゃあなあ」

後ろから光成は口をはさむ。

俺は、後ろを振り向きざまに言う。

「俺が妹さんと話に花を咲かせてるんだから、荷物持ちは黙って……」

両手に荷物を下げて、だるそうに歩く光成のその後ろに人影を見た。

それはあの通りへと入って行った。

「どうしたんですか？」

立ち止まる俺に麻美ちゃんが声をかける。

「ごめん、俺用事あったんだ。悪いけどこれで」

「ええ、さようなら……」

俺は彼女の顔さえ見返さず道を反対に通りへと歩き向かった。

通りの入口へ着き、奥を見渡す。

誰もいない。確かにさつき人影を確認したのだが……。

俺は奥へ向かって進み始めた。丸腰であることも忘れて。

涼しげな風が吹く通りの中はこの前と同様に人の気配すらしない。

結局何も起こらないまま奥まで辿り着いた。

そこにはメニュー画面の開かれたサーバーがあった。

ついさつきまで誰かがこのサーバーにアクセスしていたんだ。

俺は後ろを見て、通りに誰もいないことを確認した。

ダメもとで御影からもらったアプリを試してみる。

しかし、やはりハック作業は途中で止まってしまふ。しっかとキ

ーがかけられているようだ。

結局、例の人影については確認ができなかった。

俺の見間違いと言ってしまえばそれまでだが……。

俺はDiosのアドレス帳を開き、ある人物に電話をする。

アイコンをタッチし、コール音になる。そして数回でそれは鳴り

止んだ。

「御影。ちょっと気になることがあったんだが……」

「何？」

「お前、昨日は駅裏のサーバーに立ち寄ってみたか？」

「ええ、でも誰もいなかったし、ハックも試みたけど更新されたばかりで破れなかったわ」

「だよな。俺も今立ち寄ってハックしてみたがダメだった。だが、誰かが路地から出て行くところは見えた」

「じゃあ、それが……」

俺は彼女が後に続けて言うことであろうことに対して訂正をした。「いや、まだそうと決まったわけじゃない。でも、俺がサーバーに訪れた時、すぐ前まで誰かがいたようなんだ」

彼女は数秒後にこう言った。

「……どうやら、そのハッカーは毎日といっていいほどこまめに更新をしているようね」

「そうかもしれない、とりあえずそれだけだ」

「わかったわ、さようなら」

通話終了の効果音になる。

俺は家に帰った。

二日後の月曜。日曜に無駄に寝まくった俺はDiosのアラームを聞くことなく、すんなりと起き余裕ぶちかまして登校してやった。教室に入った時、クラスメイトの視線が変にこちらに注がれているようなのは思いすごしか。

「あれ、なんでこんな時間に来てるの？」

牧瀬が失礼な質問をする。

「なんだよ、その俺が早く来るとダメみたいな言い方」

「はいはい、よく早く来てくれました。偉い偉い」

といって、俺の頭頂部をなでるように手をかざす。

俺はその手を払いのけ、

「俺は褒めて伸びる幼稚園児かよ」

「ではどうしてほしいのかしらね？ まあ、大人しく授業まで座ってしようね」

と、幼稚園の先生ばりの「ね」の伸ばし方。

「いまさら帰るわけないだろ……まったく」

「だよな」

割って入ってきたのは光成、そしてこう続けた。

「せめて出席つくように朝のホームルームまでいて帰る。だろ！」

右手の親指を立て、グーサインを出しながらこちらにウィンクする光成。

朝っぱらからよくもこんなにはきはきと人をおちよくれるものだ。「そんなに俺がここにいるのがおかしいのなら、ええわかりましたとも。チャイムが鳴るまで姿を消しますのでよろしく」

俺は席を立ち、「どこいくんだよ」という言葉に、「散歩してくる」と言って教室を出た。

別に牧瀬や光成の態度に腹を立てたわけではない。

居づらかった。

普段、朝の教室など来ない俺には他の者のように自習したりとかそういう類の時間のつぶし方を知らないし、何よりあの空気がどうも好きになれない。人も少なくいつも以上に生気を失った部屋で俺は居心地の悪さしか感じられなかった。

俺は、階段を上がった。

結局俺にとつて居心地のいい場所とはここになってしまった。

扉を開け、屋上へ出る。

端まで行き、転落防止用のフェンス越しに登校してくる生徒の群れをじっと見ていた。

時間が経つにつれ、人は多くなっていった。しかしもちろん、それも次第に少なくなり、人々の足取りも悠長ではなくなってくる。

チャイムが鳴る。あと、五分でホームルームだ。さてと俺が戻ろう思った時、校門から入ってくる生徒の一人に視線を奪われた。

数人の生徒が走っている中、彼女は時間など気にしていないようにゆったりとした足取りでこちらに向かってくる。

そしてこちらを見上げ、確かめたかのように首を縦に振り、右手を扉の方へ降り、『はやくもどりなさい』と合図をしてきた。

『ああわかりました』と俺も手をふり合図する。

「人の事を言ってる場合じゃねえだろ。御影、お前はよ」

この日、学校において彼女と会ったのはこの時だけだった。

俺は橋を渡り家路とは逆に足を進めた。

空は晴れている。しかし、空気はじつとりと重く、風は生ぬるい。

こんな日はじつとしているのもじれつたい。

そう考えるとこれからすることもそんなに嫌に感じられないかな。そんな無茶苦茶な動機づけをしているうちに到着した。

「遅い」

彼女は廃パチンコ屋のガラス戸に寄りかかり、俺の方をゆっくり見上げた。

「お前が早いんだよ」

彼女のカバンが置かれている横に俺もカバンを置き、例の武器を取り出しズボンのポケットに引っかけた。

「特にこれと言って言うことはないわ、ただ今日きちんとケリはつける。ダメならここはあきらめるわ」

俺と御影はサーバーに一番近い位置に出れる路地を進んだ。

路地の手前まで来て、俺はエアガンに弾が装填されていることを確認し、近くの空き瓶に狙いをつけて一度だけ引き金を引いた。

使えることを確認して、彼女に訊く。

「今日は敵さん来てるのか？」

「いえ、確認はしてないわ。でも居てくれることを願いましょう。

相手はよっぽどマメにウイルスを更新してるから待っていてもダメ。ここでウイルスの元を絶つのが賢明ね。この前みたいに、ならなければいいけど……」

俺は思い出した。あの絶え間ない発砲音、そして腹部への鈍痛を。「で、結局俺はどうすればいいんだ？」

もちろん同じような目には会いたくない。ましてや、みすみすオトリにもなりたくない。

「この前と同じ状況ならば相手の発砲が途絶える時を狙って、遮蔽物から遮蔽物へとサーバーへ近づいていく。そして、十分近づいたら貴方をオトリに私が一気に距離をつめるわ」

「やっぱり、俺がオトリかよ、……にしてもどうやってオトリになれと？」

「簡単よ。道の真ん中に出るだけ。良的になればいいの。でもすぐに撃たれちゃ意味がないわ」

「もちろん必死で避けますとも」

「ならいい。じゃ、行くわよ」

彼女は路地にと入っていく。俺も後をついていく。

路地の出口の手前までやってきた。俺がこの前御影に突き飛ばされたところだ。痛いことを除けばありがたいことであった。

「まず始めは軽くオトリ役の練習をしてもらうわ。『3、2、1』の合図であたしより先に路地へ出て、あの看板まで走って隠れて。しっかり敵の注意を惹きつけてね。その後は、さっきも言ったように発砲の途絶える間に前へ進んで」

「はあ、わかったよ」俺は溜息をつき、エアガンを握りなおした。

辺りは静かदैいつものもように陰気な雰囲気を出すばかりで、俺達以外人の気配などしない。時たま吹く風に転がされた瓶の音がカラカラと反響する。

「いくわよ。3、2、1」

御影が小声でささやく。俺は身を構えた。

しかしささやくは次の瞬間通り中に反響するものへと変わった。

「GO！」

その瞬間御影と俺は走った。

そして路地から通りへと出る。

同時に絶え間ない発砲音が通り中に鳴り響く。

足元をいくつか弾が通り過ぎていく中、俺は来た路地の方向とは向かいにある、壁に置かれていた立て看板の後ろに転がり込んだ。

弾が看板へとあたり安っぽい音が俺の耳を刺す。

やっぱり読まれてたか。おまけにどこから撃っているのか確認もできなかった。

御影は大丈夫だろうか。俺の居る位置が彼女の指示していた位置だが。彼女自身はどこに？　しかし、この弾幕の中では顔を出すことすら……

そう思っていると発砲音が鳴り止み、また通りが静かになった。

俺はすぐに看板に極力隠れながら辺りを見回した。

俺とは反対側、さっき来た路地側の方に積まれている段ボールに彼女は身を隠していた。彼女の位置は俺よりサーバー、おそらく敵が居ると思わしき場所に近い。

彼女の隠れている場所は俺のとは違い路地から確認することはできなかったはず。敵の攻撃の中、瞬時にあそこを見つけ出し、逃げ込むとはなんて判断力と瞬発力を……

その時、俺は彼女の俺への配慮に気づかないわけにはいかなかった。

今俺のいる場所は路地から知りうる情報の中では一番安全な場所であったはずだ。彼女、口では「オトリになれ」などと言っていたが、本当にそうなら、俺にこんな場所など与えないはず。自らを危険に呈してまで俺へこの場を与えてくれたのだ。御影……お前は……

再び発砲音が鳴り響く、俺は顔をひっこめた。

すると御影の声が聞こえてきた。

「とりあえずは無事ね。そこから敵は確認できた？」

「いや、分からない。弾幕が止んだら確認してみる」

いくらかして音が鳴り止む。俺は通りの奥をのぞき見た。

サーバーがある場所の前に、この前来た時にはなかった段ボール

を積み上げた壁がある。ところどころ隙間がある。おそらくあそこから撃ってきてるのだろう。同時にこちらの攻撃を防ぐ防御壁としての役割もしてるようだ。

俺はまた身を隠し、御影に報告した。

「向うは段ボールでお手製トーチカ組んでやがる。近づかないと手が出せない」

「じゃあ、タイミングを見計らって前へ進むわよ」

話している間に再び弾幕が張られていた。

弾幕が止むと御影は走り出し数メートル前方の遮蔽物に身を隠した。もちろん俺も同じように別の場所へ隠れた。

銃弾が俺の背にしている看板へとあたり高い金属音をあげる。

その音が鳴りやむたび、俺たちは前進した。

地面には無数の玉が転がり始めた。これだけ打たれているがまだ鳴りやんでくれそうにない。一体、どれだけ弾のストックがあるんだよ。

段ボールトーチカまであと数メートルの地点まで進んだ。しかし、今隠れている遮蔽物からトーチカまで隠れる場所は一切ない。しかし、弾の途切れる間を狙って乗り込むとしてもたどりつけるかどうかギリギリの距離だ。間に合わなければ八子の巣にされかねない。それに、間に合うとしても向こうはそれにそなえもう一丁で撃ってくる可能性だってある。

「御影。ここまで来たぞ」

俺は、覚悟を決めた。

「そうね、この距離では単独での突入は無理ね。頼むわよ」

俺は頷いた。

そして銃声が止み、俺は飛び出した。

彼女は銃を両手で持ち、腕を下に伸ばして構えトーチカへ壁伝いに走っていく。

俺は通りの真ん中へと移動した。彼女に敵の注意がいかないように。

そして、また発砲が始まった。

俺へ向かって狙いをつけてきた。

左右へ大きく移動し、照準を絞らせないようにする。

なんとかすべて避けきった。攻撃は止んだ。

御影はあと二、三メートルのところまで来ている。これでいい、もう大丈夫。

そう思った時だった。

「っ！」

御影の体が前方に傾く。そして、肩から倒れこんだ。ハンドガンは手を離れ地面を滑ってゆき、彼女の長い髪が地面に広げられてゆく。

「くっ、なにこれ、紐？」

彼女の右足には白い紐のようなものが引っかかっていた。

「御影、早く！」

すぐに起き上がって銃を拾えば敵のリロードが終わる前にあのトチカに乗り込めるはずだ。

「ええ……わかってるわ……」

そう彼女が痛みに耐えながら返事をするとき、敵の銃が俺の目に映った。

リロードしたとしても早すぎる。二丁めの銃だ。はじめからこれを狙ってあえて、今まで使わなかったのか。

そして、その銃口はトチカの前で地面に手をつけて上体を起こそうとしているあまりに無防備な彼女へと向けられようとしていた。

「御影！」

もう、ダメだ。

顔を上げ、自らの窮地を自覚した彼女はどうすることもできず、もう避けるだけの猶予は残されていなかった。

銃口が彼女に差し向けられる。

こうなつては俺もオトリである意味はない。

俺は走り出した。

そこに理論だった考えなどなかった。

どう見積もつても彼女が助かる見込みはない。

だが、それは外的な起因を考えない場合においてであった。

必死に前へと進む俺の目へと写つたもの。

トーチ力のごとく積み上げられた段ボールは崩れていった。

そして、鳴り響くガラスの音。

立ち止まる俺の肩に誰かが手を置いた。

「お前ら、俺も混ぜな」

そして、彼は崩れかかった段ボールに最後の一撃とばかりに自ら飛び込んで行った。

トーチ力は完全に崩れ落ち、彼の姿はその向うへとうずもれてしまった。

俺は、すぐに御影の元へ駆け寄つた。

「立てるか？」

彼女も突然の事態を飲み込めていないようで、座り込んだままだつた。

「ちよつとひざをすりむいたけど、……いけるわ」

彼女の右の膝小僧が赤くなっていた。血がじわりじわりと滲んでいた。

普段ハンカチなど持ち歩かない俺だが、ポケットを探るとここに来る途中もらつたポケットティッシュがあつた。

「とりあえず、これ」

「ありがとう」

彼女は患部をティッシュで軽く当てるようにして拭き、反対の足

から立ち上がった。

彼女は足元に落ちていた紐を拾い上げた。

「最後の最後、こんなものに本当の意味で足を取られるとはね」

それは紙などをまとめて縛る時などに使うビニール紐だった。それが通りの端と端で結ばれていたようだ。

「あんな状況じゃまじまじ地面なんて見てられないしな。とにかく行くぞ」

俺は彼女を引っ張り段ボールの散乱するサーバー前へとやってきた。

彼女は自らの銃を拾い上げ、腰のホルダーへと戻した。

「本当に情けないものね。ていうかアレは何？」

彼女の指さす先には先ほど盛大なダイブを決めていた彼が段ボールの山の中から姿を現していた。

「いや、それは俺がまずアイツに聞きたいんだ」

俺は段ボールをどけながら彼の元に行く。

「最初にありがとうとは言っておくが、光成、どうしてお前が？」

彼は立ち上がり汚れた服をはたきながらこう言った。

「お前最近帰るときにやたらこつちに来たりとおかしいと思ってな。今日も家で用事があるって言って先に帰ったかと思えば、こんなところにいるお前を見つけた。しかも、これほどの女と一緒にだ」

彼は御影の方に目配せした。

「場所が場所だからな、なにをしだすのかと後をつけてみたら、まさかハツカーごっことはな。どうやら危ないようだったからとっさにな」

彼の後ろのサーバーの据え付けられいる壁の下をみると砕けちったビール瓶が散乱していた。これをどうやらあのトーチカにぶつけて崩したらしい。

「望月の友達？」

俺は御影にうなづいた。

「そう、とりあえず助かったわ。いろいろ話もしたいのだけど先に

済ませることがあるわ」

そう御影は光成へのお礼も早々、足を進め段ボールを乱暴にどけた。

「どうやら抵抗する気はないみたいね」

そこには一人の少女がいた。彼女は立って逃げだすでもなくそこにちよんと女の子座りをし、うつむいていた。

御影と同じ制服、顔を覆うように前にかかった髪、小柄な体格。

俺は自分の目に映った彼女が誰なのか分かっていった。しかし、同時に俺の記憶をもとに思考するとここに彼女がいることは不自然で他ならず、見間違えているのかとも思った。

俺の知っている彼女は俺や御影、そして光成とは違う気質の人間なんだ。用意周到で手強く御影を追い詰めたハッカーが彼女だなんて考えられるか？

でも御影の前に座っているのはあの大人しくて口数の少ない目黒だった。

御影はかがんでその手を彼女のあごに添え、顔を上げさせた。

彼女の髪は左右に分かれ、隠れていた顔がはつきりと見てとれた。

小さな顔に小さな鼻と口、その中で大きくて黒目がちな目が御影を見据えていた。

「私たちもこういうのを使えらまだ、楽なんだけどね」御影は、足もとに落ちていた電動式のサブマシンガンを見てぼやいた。

「あいつ、目黒だよな？」

光成は俺の光成は俺の耳元で訊いた。

「……俺にはそう見えるが」

「あなた名前は？」御影が彼女に問う。

「……目黒、目黒葉月……」

「ハックしてるサーバーはここだけね？」

目黒は一つうなづいた。

「さて、キーを解除してくれるかしら？ そうすればあなたのDiOsには手を出さないわ」

「うん」

ぼつりとうなづいた彼女は立ち上がり、サーバーの前でDiolsを操作し始めた。

御影もDiolsを立ち上げてアプリを起動していた。

しばらくして御影は言った。

「ここには近づかないことね。もし、近づくならこちらも容赦なく応戦するわ。わかったら去りなさい」

そして、御影はこちらをこちらに歩みより、俺と光成の背中に手を置いて言った。

「ちよつとこつちに来なさい」

俺たちは彼女に背を押され通りから路地へと歩いて行った。通りを去る最後まで、目黒は立ったままこちらをじっと見ていた。

「お前、なんでこんなことしてる？ てか、この女は何だ？」

途中、光成が俺に訊いた。

「いや、それを話すと長くなるんだが……」

俺は彼女と初めて出会った時の事を思い出しながら、さてどこからどういう風に話そうかと考えていると、御影が口を挟んだ。

「それは今から話すわ。とりあえず、あんな状態になってるサーバーの前にいるところを人に見られてはまずいからこつちへ」

俺たちはあの廃パチンコ屋の前へと連れてこられた。

俺は自分の頭の中を整理するのはいっぱいだった。

光成のことはともかく、目黒もハッカーだったこと。これらの事情をどのように整理すれば俺は理解できるのだろうか？

「私はA組の御影沙織。その望月とハッカーをやってる。あなたの名前は？」

「俺は光成勇斗。望月は俺のダチだが、何故こいつがあなたと一緒にこんなことやってるんだ？」

「それは彼がとても暇そうだったからよ」

「なるほどな」

おい、納得するなよ、光成。

「そしてあなたにお願いがあるの。見てもらった通り私達二人では一人相手でさえさっきのような窮地になりかねない。ましてや、十数人相手だと手の出しようがないわ。良ければ私達の仲間になってもらえない？」

光成は少し考え答えた。

「お前らの目的はなんなんだ？ ハッカーにもいるんなのがいるが、俺はその一部の奴らから多大な迷惑を被ったからな。今回は友達としてのよしみで助けたが答えによっては賛同できかねないな」

光成の言う多大なる迷惑、それはあの橋のサーバーの件であろう。「私達の目的はこの近辺のサーバーを正常化すること。言いかえればあなたのいう多大なる迷惑を撲滅することってことになるかしら」「それならば俺にも大きなメリットがあるってことだ。現にこのサーバーは正常になったみたいだな」

彼はDiosを立ち上げ、それを確認した。

「では、私達の仲間になってくれるわね？」

御影が握手を求めようと右手を差し出した時、彼女の後ろから物音がした。

御影は差し出しかけた右手を戻し、素早く銃を構え振りかえった。その先には路地からこちらに向かってくる目黒がいた。両手にはなにも持っていない。

御影は銃口を彼女に向けたまま問う。

「何？ もう近づくなといったはずよ」

目黒は黙ったままゆっくりと御影に向かって歩いてくる。

御影は、もう一度彼女に銃を構え直した。

ついに目黒は御影の目の前までやってきた。そして立ち止まった。彼女の眼前には構えられた銃。しかし、そんなものを全く怖がっているようには見えなかった。

そして、なにかを呟いた。しかし、俺には聞こえなかった。

「どういうこと？ 詳しく聞かせて」

御影にはそれが聞こえていたようだ。彼女は構えていた銃を下ろ

した。

そして、二人は話し始めた。しかし、目黒の言っていることは俺の距離ではよく聞きとれない。

会話が進む中、光成が俺にだけ聞こえるように話した。

「あいつ、学校じゃあんなのだが、意外にもこんなことしてるとはな。おまけに素顔をはなかなかのものじゃねえか」

光成の言う通り彼女は、美しいとはまた違うがとても愛らしい顔つきをしていた。しかし、学校にいる時の彼女の普段の様子からはその魅力を見出すことは難しかった。もし彼女が明るく人当たりの良い性格であればかなりちやほやされているのではないだろうか。

「二人とも」

御影がいきなり俺達を呼ぶ。よくわからないが俺達は二人の下に近寄る。

「彼女、目黒さんにも仲間になってもらうけど構わない？」

「え？」俺と光成は顔を見合わせた。

光成は言う。

「俺には口をはさむ権利がない、個人的に賛成はしないが明確に反対する理由もない、勝手にしな」

俺は訊いた。

「どうしてそうなったんだ？」

「彼女たつての希望よ。しかも、彼女の持っている技術を私達に提供してくれるらしいわ。確かにリスクもあるけど、これは大きなメリットじゃないかしら」

「……分かった、リーダーはお前だ。お前がそういうならそれでいい」

「そういえば、あなたから答えをまだ聞いてないわ。どうなの？」

御影は光成に向かって訊く。

「いいぜ。どの部活も退屈でつまらなかったんだ、こっちの方がやり甲斐があるしな」

「なら改めて」

御影は先と同じように右手を差し出した。

光成はそれに答え、二人は互いの目を見据えしつかりと握手した。それから新たに仲間になった二人には御影からの簡単な説明受け、Di osのリンク（彼らのDi osをサーバーのキーに設定するこ
となど）を済ませた。

「作戦会議の時は伝達するから屋上にくるように」

「OK、わかったよ。じゃあ、俺は帰るから」光成は通りの出口の方を向く。

日は傾き空は赤く染まり始めていた。

「おっと、帰られては困るわ。まだやることが残ってるでしょ」

光成は体を返して訊く。

「なんだよ？」

「あなたがめっちゃくちやにしたサーバー前を片づけるわよ」

「あ……」

しまったと落ち込む光成に俺は言う。

「まあ、仕方ないだろ。せいぜい頑張ってくれ」

「何言ってるの？ 望月、あなたもよ」

「え……」

俺達二人は御影に監視されながら、サーバー付近の掃除に従事させられた。

「さて、みんな集まったわね」

俺が屋上に向かうと、すでに他のメンバー揃っていた。

「今までは私と望月だけだったから奇襲作戦しかとれなかったけど、人数も増えて小規模程度なら正面からでも戦えるようになったわ。そこで今回は港のサーバーをハックしにいこう」

壁際に腰掛けていた光成が言う。

「港のサーバー？ 俺はあそこにサーバーがあるのを見たことないぜ。一体、どこなんだよ？」

光成の質問に御影は『どう答えたものか』とでもいう顔をした。

そして「ちよつと待って」と言い自らのDiossを操作し始めた。すると、俺のDiossのウインドウが独りでに立ち上がった。そしてそこにはある地図が描かれていた。光成と目黒のDiossにも同様に地図が表示されていた。

「いま、送ったわ。そこがサーバーの場所よ」

俺はマップを縮小拡大し、果して港のどこなのかを考えた。

「おい、沙織。ここ、資材置き場じゃねえか」

光成はある程度飲み込めたようだ。

「そのとおり。数年前、そこはまだ開けた広場でサーバーもきちんとなら管理されていたわ。しかし、近年では管理することを放棄され、必要なくなった広場は資材置き場と化しているわ。おそらくそのサーバーは他のサーバーに比べて利用率が低かったのね。あの場所じゃ無理もないわね。街のサーバーでさえ管理できない政府が早い段階でここを放棄のは不思議な事じゃないわ」

俺は御影に訊いた。

「すまんが、俺はあまりここに訪れたことがない。どんな場所なんだ？」

「そうね……」御影が言葉を選んでいる中、挟むように返答をした

のは光成だった。

「木材、鉄骨、コンテナ、ドラムカン、と様々なものがとこる狭しと置かれてる。地図ではサーバーは資材置き場の奥に位置しているが、とてもそこまで表から見えたもんじゃない。俺が知らなかったのも当然だ」

「まあ、彼の言ってることで大体あってるわ。非常に見通しが悪く身を隠すところはいくらでもある。つまり待ち伏せにはもってこいの場所ね。一人二人で後先考えず突入すると退路を塞がれて囲まれるおそれもあるわ。今回はその対策を十分にしたうえで攻めにかか
るわ」

「対策って、どんな？」

俺の問いに御影はこう答えた。

「それについてはまだ言えないわ。まだ中途半端なの。しっかりと固まってるから話すわ」

「少しぐらい教えてくれよ」光成は言う。

「そうね、彼女、目黒さんの力を借りることになるかもしれないわね」

御影は目黒の方に目を向けた。

目黒は前髪越しに御影の目を見据えていた。

「ふーん」

光成はそう興味なさ気な返事をした。

「じゃあ、また具体的なことが決まったら連絡するわ。各自解散」

御影の言葉を聞くと、光成はさっさと下へ降りてしまった。目黒も続いて音も立てずにすーっといなくなってしまった。

俺は、御影に寄り声を抑えて訊いた。

「いいのか？ ついこないだまで敵だった奴だぞ」

俺はこの前彼女を仲間にしたときといい、御影があまりに目黒に
対して無警戒なのを危ぶんでいた。

「もしかしたら、何か狙っているかもしれない。あいつ自身から歩み寄ってきたのも変だ」

御影は落ち着いた口調で言った。

「安心して。私はまだあの子を信じちゃいないわ。彼女が変な動きをしていないかどうかいつも注意を払ってる。いい、あなたは同じクラスなんだから彼女の行動をよく見ておいて。もし、何かあったら私に連絡して。分かった？」

「ああ、分かった。しかし、お前も分かっただけで何故仲間にした？」「確かに、彼女には怪しいところが多いわ。しかし、あの力を利用することができれば大きな戦力になるはず。まだまだ私達は人が少ない。大きな相手を攪乱するには彼女の力が必要になるはずよ」

彼女の力は彼女一人であっても俺達二人を打ち負かそうかというほどのものであり、もし味方になるとすればとても心強いことである。

「それもそうだな。そういえば、光成には目黒へのマークはさせなくていいのか？」

「彼は見た限りそういうの不得意そうだから、……このことは言わないで」

「いつも教室を飛び出していく奴が、目黒ばかり注視してるのは不自然だな。言わないでおくよ」

「わかったなら、早く下に降りなさい。こうしてる間も彼女を野放しにすることになってしまっわ」

「ああ」

俺はすぐ教室に戻った。

目黒はいつものようにひっそり机に座っていた。

この日、俺はそれとなく彼女を見ていたが特にいつもと変わったところは見つけられなかった。というか、あまり彼女の”いつも”というのが実際よく分かっただけなのだが……

帰り道、俺と光成は橋の下のサーバーへ寄った。

御影より定期的にサーバーをチェックと更新するよう言われたからだ。

「ええと、このアプリを使うんだっただよな？」

光成はサーバーの前で更新の準備をしていた。

「ああ、それだ。あとはそのアイコンをクリックするだけだ」

彼女によればサーバーにかけられたキーの効力は時間と共に弱くなっていくらしい、そこでこのようにキーの更新をする必要がある。それと、このサーバーを狙う他のハッカー達に対する牽制の意味合いもある。

俺は気になっていたことを光成に訊いた。

「どうしてお前、あの時助けてくれたんだ？」

光成は難しい顔をしていた。

「どうして？ って言われるとうまく理由は説明できねえ。とにかくお前達が良くない状況にあることは見ればわかった。するととっさに体が動いたとしか言えねえな」

「まあ、助かったことに変わりはない。しかし、良いのか？ 御影の誘いを飲んでハッカーなんかして」

「俺は各所のサーバーが使えなくて困ってた。管理しない政府も政府だが、それを好き勝手するハッカーにはまして腹が立ったさ。もちろん、お前らも一応その括りに入るわけだから、初めは加担しようなんて思うはずがなかったさ。助けるのもあの場限りのものだと思うっていた。でも、沙織は違う。ここと駅裏、どちらのサーバーもあいつがハックしてから正常に動作している。しかも、現存する政府管理下のサーバー以上に安定している。通信障害なんて今日まで一度もない。俺は思うんだ。体たらくな政府にサーバーを管理されるぐらいなら、沙織に全部ハックされてしまう方が良い。だから、俺はお前らに手を貸すって決めたんだ」

『おかしくなつたサーバーを私たちの管理下で正常に戻すの』俺の頭に御影の言葉が蘇った。

「全部ハックね……、確かにあいつ当初そんなことを言ってたな」

「それにしても驚いたね。うちの学校にあんなのが居たとは。あの容姿なら学内では誰もが知る存在になれるはずだが。そもそも一年といくらかこの学校にいた俺が、一度も見たこと無いってのはおか

しくねえか？ あれだけの女、目に留まらないほうがおかしい」

「そうだな。俺も御影がうちの生徒とは知らなかった。学年行事やなんやらで普通一度は目にしても良いはずだ……。そういえば、俺達の学年は去年より一人増えてるよな？ もしかしてそういうことか？」

「それだと、A組の奴らの中で話題になっていいはずだが、少なくとも俺はA組連中から沙織の話を聞いたことはない」

「いずれ俺が御影に直接聞いてみるよ」

光成のDiorsから効果音がなる。

「さあ、終わったぜ。早いとこ帰ろうぜ。俺はもう腹が減って仕方ねえんだ」

俺はここで彼にある頼みをしなければならなかった。

「ああ、俺も腹が減った。そこで頼みなんだが、今俺の財布は非常に苦しい状態にある。毎度のことなんだが……」

俺は彼に向かって手を合わせた。

「俺はかまわねえが、ちょっと待ってな」

光成はDiorsから誰かにコールし、手首につけたそれを自らの耳へと押しあてた。

「俺だ。悪いが今日の夕食、もう一人前増やせるか？……じゃあ、いまから帰る」

彼は歩きだしながら言う。

「OKだ」

「悪いな、恩に着る」

いつも橋から左に向かうところを右に向かい、彼と一緒に歩いてゆく。

市街地を抜け古びた商店街、この間目黒と一戦交えた場所を少し行ったところに彼の家はある。

彼らはアパートの二階に住んでいる。このアパート外から見てもわかるほど老朽化している。

塗装が剥げてサビだらけのいつ落ちてしまうかわからない鉄階段

を上がる。

踏むたびに錆びて朽ちた鉄片が下にと落ちていく。

ドアまで進み彼がドアノブに手をかけるが開かない。

「鍵閉めたまんまか」

彼はそういつてポケットの中からいまどきめずらしい鍵を取り出す。俺のアパートですら今はD i o sを用いた電子キーが導入されている。

鍵を開け、扉が開く。

「さあ、入れ」

俺は靴を脱ぎ「おじゃまします」と言い中に入る。

玄関の次はすぐ居間になっている。台所は居間と一緒にいる。

「おい、帰るっていつてるんだから鍵ぐらい開けといてくれよ」

光成はその台所に立つ妹へとそう言った。

「今まで、手が話せなかつたんだもん」

「ノブ回すだけじゃねえかよ……」

「あっ、望月さん。私のなんかで良かったら食べてってくださいね」
麻美ちゃんは制服の上に白いエプロンを着て、……いや、この形状をみるに割烹着と言った方が適切かもしれない。とかく彼女は何かをこしらえていた。

「もちろんだよ。むしろたまにこうやってご馳走になってるのが申し訳ないよ」

「いいんですよ。お兄ちゃんはいつもは帰る時間が不規則で一緒に食べれない事が多いけど、望月さんが来たら三人で食べれるから楽しいし。さあ、そこに座ってください」

彼女が手を指す方には丸いローテーブルが置かれていた。ちゃぶ台ってやつか？

「ああ、ありがと」

俺は彼女に勧められ腰を下ろす前に、光成の頭を小突いた。

「痛っ！ 何すんだよ？」

「お前は外でぶらぶらせずにはさつさと家に帰るよう心がけなよ」

「……わ、分かったよ」

あぐらをかいて机の前に座る。

このアパート、床は全て畳、壁も砂壁、部屋の仕切りもふすまだ。窓はさすがにアルミサッシになっているがあとから取り付けたため若干不自然な取り付けである。

光成がテレビをつける。このテレビ、入居当初からついていたらしいがなんとブラウン管である。ただでさえ大きくないテレビなのに、4対3の画面で16対9の映像を映すので上下に黒帯が入って余計に小さく見える。周りにチューナーらしきものは見られない。以前、「何故写るのか？」と訊いたことがあるが光成いわく、このアパートの大家がチューナーで映像を変換した後、そこから各部屋にケーブルで引っ張ってきているそうだ。

「はい、できました」

麻美ちゃんが俺の前へとドンブリ茶碗を置く。

「おお、今日は中華丼か！ 具材はどうした？」

光成はよくやったとばかりに喜んでいようだった。

「今日は魚屋さんで安く魚介類が買えたし、この前大家さんにもらった野菜も余ってたから」

「おし、いただきます」

光成は運ばれてくるなりそうそうドンブリに顔をうずめて食らいついた。

「いただきます」

俺はアツアツのご飯とその上にかけられたあん、具材のイカやエビをレンゲで持ち上げ、一口に頬り込んだ。

うん。この子、腕を上げたな。 うまい。

一年前、まだ料理というものを始めたばかりの頃は恐れんばかりの怪物料理を生み出していた彼女だが、飲み込みが良いのかここ最近めきめきと腕をあげている。今じゃ光成から味についての愚痴を聞くことはなくなった。逆にレパートリーが増えて嫌いな料理まで

作り始めたと嘆くことが多くなった。しかし、彼の健康を考えればそれは喜ばしいことだ。

「うん、おいしいよ。ありがとう」

俺の向かいに座った麻美ちゃんはドンブリでなく普通のお茶碗にそれを盛っていた。

「ありがとうございます。でも、これ味付けはネットからの受け売りなんです」彼女は恥ずかしそうに笑った。

「つい先週までネットに繋がらなかったんだけど、つい先日から繋がるようになったんです。だからこうやってちょっと新しいものにも手を出してみたんです」

「そうか。ここは駅裏のサーバー圏内だったね」

「私は行ったことないからよく分からないけど、調子が悪かったみたいで。お役所の人が直してくれたんですかね」

「いや、あれは役所じゃなく俺達だ」

「おい！ 望月それよりちよつとこつちに」

俺の言葉をかき消すように光成が大きな声でそういった。そして、右手にレンゲを持ったままの俺を無理やり引っ張って隣の部屋にと連れ込み、耳元で小さく囁いた。

「麻美にはあのことは教えるな」

「どうして？」

「そんなことしてるとバレたらなに言われるかわかったもんじゃない。あいつには政府が直したと勘違いしてもらった方が良いんだ」
確かに、兄貴がハツカーだなんて知ったらあの子も心配でおちおちしてられないだろう。

「わかったそこは黙っておくよ」

俺達は素知らぬ顔をして居間に戻り黙々とドンブリに向かった。明らかに不思議そうな顔をして麻美ちゃんが訊く。

「どうしたんですか？ 急に」

光成はとっさに答えた。

「大した事じゃねえ。学校の課題についてわからないところを教えて

もらっただけさ」

こいつもつとうまい言い訳を考えれないのか？

「お、おう、何、気にするなよ」

「いや、助かったぜ」

麻美ちゃんは聞いてはいけないことだと勘ぐってくれたのか、それ以上は訊いてこなかった。

ご飯を食べてしばらく光成と話それから帰った。

次の日、俺一人が御影に呼び出された。

「どうして俺だけなんだよ？」

帰り道の途中突然御影から『橋のサーバーに来て』とメールが届いた。それは俺だけにあてられたものだった。

「今日は偵察。四人でうろろしてると目立つじゃない」

「それはそうだが、別に俺じゃなくとも」

「行くわよ」

彼女は勝手に歩きだした。

俺も後を追う。

「武器は？」

俺は事前に何も聞いていなかった。武器の類は家に置いてきてしまったのだ。

「いらないわ。別に倒しにいくわけではないもの。その代わりこれ」
彼女がそういつて差し出したのは双眼鏡だった。

「あなた持って置いて」

俺はそれを受け取りカバンにしまった。

「なんでまたこんなものを。見つからないように近づけばいいんじゃないか？」

「初めに戦った奴らは南校の中でも下っ端。だから、近づいて盗み聞きなんてことが可能だった。でもこの港いる奴らはそこまでアホじゃないわ。敵の接近を察知するプログラムを組んでいるはずよ。例えば目や耳に捉えられないように行動しても、目黒さんのようにこちらの存在を掴むことが可能だと思われるわ。だからサーバーに近寄っての偵察は不可能なの」

「しかし、入り組んだ場所だと言ってたよな。そんなところ遠くから見えるのか？」

「横からでは厳しいでしょうけど、上からならある程度わかるかもしれない。あてがあるの、今からそこに行くわ」

御影と俺は川沿いに海に向かって歩き続けた。

そして河口付近の端を渡り、港までやってきた。

この一帯は工業製品を輸送するタンカーが寄港することもあり、大きな港になっている。

何棟かの資材格納庫が立ち並ぶ、その横の方に問題のサーバーはあるのだ。

御影はある格納庫の前になると立ち止まった。そして周りを見渡した。

この一帯は人がほとんどいない、あるのはコンテナばかりだ。

「望月、はやく」

彼女は誰もいないことを確認したのか、格納庫の横についている鉄階段をのぼりはじめた。その階段の入口には『立ち入り禁止』と言う札が朽ちて切れたロープと共に落ちていた。

階段をのぼりきると外壁に沿って通路が向うまで伸びている。高さ約十五メートルくらい、柵は簡素なもので足を滑らせると隙間から落ちてしまいそうだ。

彼女はもう一番端まで辿り着いていた。

「何やってるの？ こっちへ」

俺もそこへ向かった。歩きたびにカツカツと音が響く。

「あそこ。双眼鏡で見て」

彼女の指さす五百メートル先には無造作に資材の置かれた場所が。俺はカバンから双眼鏡を取り出し、そのほうを覗いてみた。

様々なものが置かれており、サーバーの場所がなかなか見つからない。おまけにこの角度からでは通路がどのように通っているのかもわからない。確かに御影の言う通り待ち伏せにはぴったりの場所かもしれない。

「どこに目をつけてるの？ もっと右の方よ」

俺はそちらにレンズを向けた。

居た。人らしきものが資材の隙間からみえる。サーバーは近くにないようだ。数は見えてるだけだと三人。しかし、まだ居そうだ。

「どっ?」

「三人確認できる」

「まだ居るはずよ」

「でも良く見えないんだ」

「もう、貸しなさいよ」

彼女は俺から強引に双眼鏡を奪い取った。突然に視野が開け、大量の光が俺の目に飛び込む。

御影はしばらく覗き込みこう言った。

「六から八。それくらいは見積もっておいた方がいいわね」

「どうしてそう断定できる?」

「もう一度見て」

彼女は俺に双眼鏡を差し出した。俺はさっきと同じところを覗き込む。

さっきと同じように三人の姿だけが映った。

御影は俺にこう説明した。

「よく見て。サーバーに通じる大きな通路は見た限り二つあるわ。

そして今見える彼ら三人はその片方の通路にいる。もし私があのサーバーを守るのならもう片方の通路側を手薄にしたりはしないわ」

三人がたむろするその奥にサーバーを見つけた。サーバーの近くには誰もいないように見える。

「そう考えるともう片方の通路にも誰かを配置しているはず。そして配置している人数はおそらく同様に三、四人。もし、一人だけ配置するのなら今見えている通路だって一人にしてあとのメンバーはサーバーの前にいるはずだもの。でも、サーバーには誰もいないように見える。つまり、敵は勢力を左右の通路に二分して配置していると思われるわ」

俺は双眼鏡を下ろし彼女に訊いた。

「なぜ、奴らはそんなことを?」

「おそらく、最近の私達の行動がそろそろ他のハッカー連中にも知れ始めている。私達、新しい勢力の登場に対して奴らは守りを一層

固めているんでしょう。あの配置であればどちらの通路から攻め込まれてもすぐさま戦闘態勢に入れるわ。おまけにもう片方の部隊が救援に向かえば挟み打ちも可能ね。何も考えず入ると痛い目みそうね」

「じゃあ、俺達はどうすれば？」

「大丈夫。彼らが通路に勢力を二分し、サーバーには人を置いていない。ここにつけいる隙があるわ」

「とうとう？」

「さつきも言った通り奴らは通路に敵が入ればそれを取り囲もうと片方の通路の部隊は救援に行くはず。その時サーバーまで通路はがら空きになる。ここが狙い目よ。まず、誰かがオトリとなって片方の通路に飛び込む。そして敵をひきつけている間、もう片方の通路からサーバーに向かう。そしてそのサーバーにウイルスを送ってやる。敵が混乱している間にサーバー側から敵のいる通路に入り、背後から攻撃する。ざっとこんな感じかしら」

「なるほど、しかしまたオトリがいるのか……」

「心配なくて良いわ。あなたにはその面で期待していないから」

「……それは、助かるよ」

どうやらオトリ役ではないようだが、どうも嬉しくない。

その後しばらく俺は奴らの監視をさせられた。

御影は隣で座り込み、Diosで何かをしていた。

「何やってんだ？」

「これ？ 今回の作戦の説明を口するのはややこしいわ。だからブリーフィング用のスライドを作っているの」

よく見れば彼女が操作しているのはプレゼンテーションなどに利用されるソフトであった。マップや各人の動きなどを書き込んでいた。

「それより、ちゃんと見てる？」

「ああ、まかせとけ」

とは言ったが、敵に変わった様子もなく俺は見ているふりばかり

していた。

「日が落ち始め、空が次第に赤みがかつていく。

突然、俺は御影にあの事を訊いた。

「お前、転校生か？」

彼女ははつとこちらを見上げた。

「……………」

彼女は答えなかった。

そして、ゆっくりと目を伏せた。

質問が理解されていないのかと思った俺は、もう一度言い方を変えて訊いた。

「いや、お前が入学当初からいるなら去年までに一度くらいお目にかかってもおかしくないと思ってな。でも、見たことはなかったし、今年A組に転校生が来たと話に聞いてたんだ。だからお前がその転校生なのかな、とね」

彼女は俺から目を伏せて答えた。

「……………」

ばつの悪そうな言い方であった。

「で、どこから来た」

「ねえ、帰りましょう」

俺の質問から逃げるように彼女はすたつと立ち上がって階段の方へ歩き始めた。

「お、おい。待てよ。偵察はもういいのかよ？」

彼女はこちらを振り向きもせずと言った。

「ええ、もう十分よ」

俺は双眼鏡をカバンにしまいながら彼女の後を追った。

階段を降り、倉庫街の道をとぼとぼ歩いている彼女に追いついた。俺が横に並んでも彼女はこちらにかまわず前を向いたまま歩いた。彼女は少し先の地面をじっとみるように少しうつむいていた。

揺れる髪の毛から、焦点のあっていないような目が垣間見えた。

それは、彼女にとって触れられたくないことだったのだろうか。

俺は、このこじれてしまった空気を変えるために言った。

「なあ、もしオトリ使うのなら、光成にしてくれよ。あいつの方が長持ちすると思うぜ」

こんな自虐交じりの言葉に彼女は彼女らしく「あたりまえよ。あなたじゃ役に立たなかつたじゃない」なんて返してくれた。でも、その語気はどうにも弱弱しくて、依然として彼女の眼はどこを見ているのかわからなかった。

その後も俺はあの話題を極力避けて話してみた。帰ってくる言葉は確かに彼女らしいものであった。

しかし、やはり彼女の心はどこかべつのところにあるように感じた。

全て上の空で受け答えされているようだった。

「それじゃあ、また連絡するから」

市街地に戻り、線路にかかる陸橋の上で彼女はそういった。

「ああ」

そして彼女は俺が降りる反対側へと降りて行った。

別れ際、彼女は俺と目を合わせることをしなかった。

考えすぎなのか、それが意図的であったよう感じた。

その日、俺はどんな顔をして彼女に会えばいいのかわからなかった。

それがどうしてかは自分でもよく説明のつかないことだった。

「あら、はいわね？」

彼女は首をかしげた。重力に身をゆだねた黒髪だけがそっと揺らいだ。

俺はどうしてか恐る恐る答えた。

「……光成は後で来るってさ。掃除当番サボったツケを払わされるよ」

「まあ、こっちは準備がすんでないから丁度いいわ」

彼女はそんなことをつぶやきながらまたプレゼン用のソフトをついていた。

俺は近くのコンクリの瓦礫に腰を下ろした。

そして、彼女に背を向け川の流ればかり見た。

「そういえば、望月」彼女は言った。

俺はどうしてか動揺した。その先に何が続くのか、そればかり気にした。

「あなた、ちゃんと準備はしてきたの？ ブリーフィングが終わったらすぐに直行よ」

俺は胸をなでおろしながら、彼女のほうに振り向き答えた。

「ああ、バツチリだ」

彼女はいつもの彼女らしかった。

俺はそのときからどんな顔をしていればいいかなんて考えずにすんだ。

あの時感じた疎外感はなくなっていた。

俺が鞆より銃を取り出し見せようとしたとき、彼女がふらりと現れた。

「アレはもってきたわね」

御影はそう彼女に聴いた。

「……うん」

彼女はこくりとうなづいた。

「アレって何だよ？」

俺は御影に聴く。

「この前、目黒さんの力を借りるっていったでしょ。そのことよ。

光成が来る前に説明すると二度手間だからもう少し待ってなさい」

目黒は何の変哲もない通学鞆を携えている。どうやらその中に『それ』があるらしかった。

「悪い、待たせたな。はじめてくれ」

噂をすればとでもいうのか、そこへ光成がやってきた。

俺の横に腰を下ろした。彼の息は上がっていた。しかし、それは隣にいる俺でないとわからない程度に抑えられていた。おそらく、待たせる原因を作ったあげくに今息を整える時間さえ待たせるのは忍びないと彼は考えたのだろう。

御影はDiossを操作した。

すると、彼女のDiossが眩しく光った。

そしてその光は薄暗い影の中、左右の橋脚と結合する壁に大きな一枚のスクリーンを作り出した。Diossの拡張機能の一つであるプロジェクト機能である。

映し出されたのは港のサーバー付近の地図であった。

「さて、今回の作戦を説明するわ。見てもらえばわかるとおり、サーバー付近にはコンテナや資材が置いてあっても入り組んでるわ。これはこの前も話したわね。敵の数はおそらく十前後。そして重要なのはサーバーまでの通路は二本あるということ。そして敵はこのように配備されているわ」

彼女はDiossのパネルをクリックした。すると地図の上に敵を示すアイコンが表示された。

「二本の通路にそれぞれ半数ずつ配備されている。もし、私たちが

どちらかに突っ込もうものなら、片方の通路いる敵は入り口から応援に駆けつけ、私たちは挟み撃ちにされてしまうでしょうね。だからといって、同時に両通路を攻撃するだけの戦力も私たちにはない。そこで罠を使うことにする。まず、罠が東の通路へと侵入する。すると西の通路にいた敵は挟み撃ちをするために罠の後を追うように東の通路へと向かうはず。その時、残りのメンバーは西の通路より進入する。そしてサーバーにたどり着いたらサーバーに直接、あるウイルスを送ってやる。そのウイルスは相手のDiosのメモリを食いつぶす効果があるわ。これによって相手の攻撃は弱体化する。あとはサーバー側から東の通路に侵入し、弱体化した敵を一掃するだけよ。でも、ウイルスの効力が持続するのは私たちの力ではせいぜい一分程度。この間に敵の戦力を削っておかないと雲行きは怪しくなるわ。それは覚えておいて」

御影の説明が一通り終わると光成が言った。

「まあ、理屈はわかった。だがよお、はじめに飛び込んでいく罠が、本隊がサーバーにつくまで持ちこたえられるのか？　そもそも人数は？　一人か？　二人か？」

「私たちはたったの四人。もちろん罠は多いほうがいい。でも本隊の人数は不測の事態に備えたり、サーバーにウイルスを送り込むまでの護衛が必要として三人はほしい。そうすると罠には一人しか回せないわ」

「十人相手に一人で持ちこたえるなんて無理なんじゃねえのか？」

第一この作戦だと罠がやられると――

光成が語気を強め話そうとするところを、御影は言われなくともというばかりに話し出した。

「わかっているわ。この作戦の成功はこの罠の働きにかかっている。もし罠がやられてしまえば敵は本隊の進入に気づいてしまうでしょうね。そうなると袋のねずみ。全滅の恐れありね。でも、私だって初めから無謀とわかっている作戦を立てるつもりはないわ。地図の東の通路をよく見て。東の通路にはコンテナに両脇を挟まれた狭いな

がらも見通しの良い場所があるわ。さらにこの中央あたりには一人が身を隠せそうな奥まった場所もある。囿はここに身を置けば左右から攻めてくる敵に対処することができるかもしれないわ。途中に障害物がないからこちらが牽制すれば敵も迂闊には近づくことができないはずよ。でも、左右どちらにも気を配っていないと隙をつかれてしまう。そして、敵が数で押し寄せてはあまり意味のないこと。本隊の存在が掴まれば敵もこの作戦に気づき大きくでるでしょうね」

彼女は包み隠さず全てを話したのだろう。この作戦の狙い、そしてその危険性。これだけ正面切つて話されては光成ももうどうとは言えないようであった。

彼女は重そうに口を開いた。

「光成。入ってもらつてばかりで悪いけど、お願いがあるの」

御影は腰掛けた光成のほうへ歩みより、真剣な目で彼に訴えた。

「なんだよ」

口とは裏腹に光成はそれがどんなことか理解していただろう。

「あなたには囿をやってもらいたい。この重要な役割をあなたに担ってもらいたい」

光成はやつぱりなといわんばかりに頭を垂れ、右手で襟足の辺りを乱暴に掻きむしつた。

そしてゆっくりと顔を持ち上げると彼女を見上げ言った。

「いいぜ。やりがいがあるじゃねえか」

そんな強がりを見た。

「ありがとう。頼んだわ」

彼女はそう言った。決して感謝を表すジェスチャーはないし、大した抑揚もついてない、でも不思議と彼女のこの言葉は光成を納得させるだけの力があるようだった。

「目黒さん、彼に一番良い武器を」

目黒は鞆の中から大きな銃を取り出した。

そして御影はそれを目黒から受け取った。

それはおそらくサブマシンガンといわれる類の銃を模したエアガンであった。

彼女は弾が装填されていることを確認して、壁に向け引き金を引いた。

非常に細かく断続的な発砲音と共に十数発の弾が一瞬にして壁にたたきつけられた。

彼女はそれを確認するとグリップの側を光成に向け差し出した。

「十分とは言えないかもしれないけど、今私たちの持てる最高の武器よ。一人で弾幕を張ることも可能だわ」

光成はそれを手にして、さまざまな方向から見て、各部のパーツなどをチェックしているようだった。

「俺も撃つてみていいか？」

「ええ、当然いいわ。ここで少しでも手になじませておきなさい」

光成は向かいに置かれていた空き缶に狙いを定め、引き金を引いた。

ほんの一瞬引いただけなのに、空き缶の鳴る音が三、四回連続で響いた。

彼がそうする中、御影は今度は自分の鞆から何かを取り出ししていた。

「これらは、あらかじめ弾を込めたマガジンよ」

彼女は多くのマガジンが携えられたベルトを手にしていた。

おそらく、これを腰に巻いて使用するのだろう。

「敵の攻撃に一人で応戦する際に、いちいち弾を込めている時間なんてない。空になったマガジンはその場で捨ててちょうだい」

「フーことはこれがなくなると……」

「……そうならないよう、私たちも迅速に行動するわ。もちろんあなたも無駄な弾は撃たないようにする必要があるわ」

「わかったよ」

俺はまだ頭の片隅に引っかけかかっていたことを訊いた。

「アレってのはこれのことか？」

御影は違つわよというように口角を上げた。

「いいえ。実は今回のこの厳しい作戦を遂行するにあたってあるアイテムを調達したの」

「ブリーフィングじゃそれらしいことをいってなかったじゃないか」「説明が煩雑になると思ったから、後で言うことにしたのよ。訊くけど望月、この作戦において本隊はサーバーにたどり着くまで、迅速にかつ敵が残した戦力がいた場合に備えて慎重に進む必要があるわ。この場合、囷と本体の連絡なしに作戦が成功すると思うかしら？」

「囷の状況によっては本隊もリスクをおかさなければならぬ。そう考えると、囷の状況を知っておくことは重要だ。そうだな？」

「そのとおり。かといって囷が作戦中ずっと手を耳にかざして電話してるわけにもいかない。そうなるとハンズフリーの通信手段が必要になってくるわ。目黒さん鞆を」

彼女は目黒の鞆から取り出した。

「かけてみなさい」

彼女が俺に手渡したのはゴーグルだった。色はついておらず、どの部分も透明だった。形状はグラスの部分は安全ゴーグルのように広く取られているが決して目と外部を遮断するようなものではなく、サングラスのように顔の表面に沿うように湾曲していた。左目の上の辺りにはいくつか小さなボタンがついている。

俺はそれをかけた。彼女もまた鞆より取り出してかけていた。

かといって透明な板を通しただけで目の前の光景はなにも変わることはない。面が大きくとられているので決して（俺はかけたことはないが）淵が視界に入ると思われる眼鏡のようでもない。

「何も変わらないんだが」

俺は御影に言った。

御影の手が俺目の前へ伸びる。

そして俺にかけられたままのゴーグルの左上のボタンをタッチした。

しかし、俺には何が変わったのかわからなかった。

「何ともならないぞ。壊れてるんじゃないのか？」

『そんなはずないでしょ。ほら？』

なんと言ったらいいのだろう。それは、確かに彼女の声だった。

しかし、今日の前にいる彼女から発せられたものとは思えなかった。前から後ろから右から左から上から下から、どこから聞こえているのかもわからなかった。もっと言えば俺自身が俺自身の声を聞くよ
うな、そんな感じがした。

俺がこのことに驚く中、彼女は光成にも俺と同様のことをしていた。

『聞こえるかしら？』

また彼女の声から俺の中から湧いて出た。

『バツチリだ。しかしこんなものにも応用されてるんだな』

『何を言ってるの。こつちが本来は先だったのよ』

光成の声も同様に俺の横から聞こえるではなかった。やはり御影の声と同様に聞こえた。

光成はこのことを理解して納得しているようだった。

「おい、なんなんだよこれは？」

この事態を俺は具体的に言葉にできないため代名詞に頼った。

『あなた、音楽を外で聴くかしら？』

御影はそう言った。俺の質問にまったく関連性を見出せない質問で返すので何を導きだしたいのか検討がつかない。よって俺は質問に素直に答えるしかなかった。

「いや、もともとあまり聴かないし聴いても家でぐらいか」

『ということは、これが初めてでも無理もないわね』

『俺は使ったことあるからな。お前には縁がなかったのさ』

二人が俺をのけて理解し話すことに、俺はほんの少し悔しさを感じた。

「そんなことはいいから。一体何なんだよ？」

彼女は説明し始めた。

『これは骨伝導を利用した無線よ。人間はどんなに騒がしい場所でも自分の声はわかるもの。それは骨を通して自分の声を聞くためなの。話している自分の声と録音された自分の声が違うように聞こえるのもこの為よ。このゴーグルの柄には骨伝導スピーカーが埋め込まれていて、真ん中についているマイクで拾われた仲間の音声を骨伝導で聞くことを可能にしているの。骨伝導は一部のヘッドホンなどにも利用されていて利点として耳を塞がずに音を聞けるため、野外で外部の音を聞きながら安全に音楽を楽しむことを可能にしているわ。でも、もともとこれは軍事用に使われていたの。戦闘中に無線の音しか聞こえなかつたら危険でしょ？ でもこれなら外部の音を聞きながら無線の音声も安全に聞けるわ。この感覚に慣れるには少し時間があるかもしれないわね』

彼女のいうとおり彼女の声が聞こえながらも橋の上を通過する車の音もしっかりと聞こえていた。

「これなら戦闘中でも安全に仲間と連絡がとれるな」
『確かに、これがあることによって作戦は円滑に進みやすくなる。

でもこれはあくまで補助ツールであって最後はやはり各々の動きにかかってくる。そして、近くにいる者同士は聴覚だけでなく視覚によるコミュニケーションも大事になってくるわ。そこは注意しておくなさい』

「了解だ」

俺の応答を聞き入れると彼女はゴーグルをはずした。

「さあ、もうブリーフィングはこんなもんで十分ね。はやく、ゴーグルしまいなさい。そんなものつけて歩くつもり？」

俺はゴーグルを鞆にしまい立ち上がった。

下校途中の生徒が消え人通りの少なくなった土手道を俺たちは歩いた

港の格納庫が並ぶ一体までやってきたが相変わらず人影は少ない。その為、俺たち四人が歩く姿は非常に不釣合いなものだろう。

「お喋りはそろそろよしなさい。さ、行くわよ」

御影はここまでの道中馬鹿話していた俺と光成をたしなめ、以前彼女と偵察しにいった際に利用したあの階段を登っていった。

その後を一瞬そのボロさに怖気づき足を止めた目黒が恐る恐るついて行った。

「いいのか？」

登っていく御影に足元に落ちた『立ち入り禁止』の看板を示しながら光成が聞く。

「私たちハツカーでしょ？」

彼女のこの一言は非法なことをする理由として十分な説得力があった。

「まあ、な」

光成は階段を登り始めた。

御影は敵陣が見える場所へ集まらせ、装備を準備するように指示した。

俺たちはおのおのの武器や先ほど支給されたゴーグルを装備した。

一足はやく準備し終えた御影はしばらく双眼鏡で敵陣を覗き込んだあと、こちらを向き言った。

「見る限り敵はブリーフィングで説明したのと同じ配置をとっているとされる。だから作戦に変更はないわ。いまからあそこに突入するわけだけど、無線について注意してほしいことを言っておくわ。目黒さん、説明を」

御影に促された目黒はきれぎれに説明し始めた。

「ええと、このデバイスは電源と……その通信手段を各人のDiosに依存しているから……、Diosの状態に大きく左右され」

目黒の要領を得ない説明に御影がフオローを入れた。

「ありがたい、もういいわ。つまり、この無線はDiosなしには成立しないものなの。だからDiosがやられてしまつとその瞬間無線も機能しなくなる。受信も送信もね」

「俺がやられてもその状況をお前たちに伝えて手助けすることはできないってことだな」光成は付け足した。

御影は黙ってうなづいた。

「……まあ、やられなければいいはなし。じゃ、荷物はここにおいて」

彼女は自らの銃へ弾を込めなおし言った。

「行きましょう」

俺たちはサーバーへと通じる二つの通路の手前に置かれたコンテナまで移動した。

手には銃を構え、移動は物陰から物陰へとすばやく。

このような姿をしている以上、敵はもちろん一般人に目撃されることも望ましいことではない。

コンテナの陰から御影が通路入り口の様子を覗き見る。

太陽はいくらか傾いているが空はまだ青い。格納庫の上で吹いていた心地よい風もここでは一つも俺のシャツを揺らしはしない。

御影がそれをやめ言う。

「光成、右の通路に入つたらすばやく奥へと進みそこに配備された敵に奇襲をかけ、攻撃を加えたらすぐに引き返して私が指示したあの場所にとどまりなさい。奇襲といっても、あの通路に入った瞬間敵は何者かが侵入したとわかり、警戒を強めるでしょうから大した損害は与えられないでしょうね。でも、敵が侵入したのがあなただけと勘違いすればそれで十分だわ。後方から訪れる応援に関しては私たちがいくらか伝えてあげられると思うわ。最後に、どんな些細なことも報告してね」

「ああ」

光成は立ち上った。

「それじゃあ、よろしく」

御影が彼の肩に手を置く。

彼はその肩を小さく持ち上げて言う。

「まかせとけ」

何ともないような涼しい顔をしていた。

彼は行ってしまった。

覗くと、彼の後姿が通路へと消えていった。

「無線はオンにしてる？」

御影に言われ、確認した。

「大丈夫だ」

「彼から連絡がそろそろくるはず」

二、三十秒ほどしてそれは突然聞こえた。

『沙織、敵を発見した。突然の進入に驚いているようだ。俺はまだ』

目視されていない』

『いいわ。攻撃して』

『了解』

乾いた発砲音が小さく聞こえた。

『おし、一人やったぜ。こっちの敵は四人だ』

『すぐに引き返して』

『言われなくとも』

無線からはその声とともに彼の荒い息使いももれてきていた。

御影は残された俺と目黒に言う。

「すぐに左側の通路から敵が出てくるはず。彼らが通り過ぎたらす

ぐに侵入するわ。私が先頭に行く。目黒さんは後衛を。望月、あな

たは私のすぐ後ろをついてきなさい」

彼女がそう言った直後、光成の声がした。

『沙織、お前の言ってた場所に陣取った。まだ敵は追いついてこな

い』

『弾の無駄撃ちは厳禁よ』

「わかつて くそ、もう来たか」

無線から弾がコンテナにぶつかる金属音が聞こえてくる。

御影が通路の方を確認する。

「来た」

俺も同じように覗くと、左の通路から敵が四人走ってきていた。

彼らは右の通路へと入った瞬間、御影は飛び出した。

「行くわよ」

俺は彼女について走った。

敵はもう右の通路の奥に消えてしまった。

「光成、今そつちに応援が向かったわ。数は四。後方にも注意して」

「そうか。しかし、三人相手でもしんどいぜ。ここに後ろから四人か……おっとあぶねえ、……やれるだけやってやる」

「もしもの時は作戦を変更してあなたが脱出できるよう直接援護に向かうから」

「そうはさせてたまるか」

俺たちは通路に侵入した。

コンテナに挟まれた通路を駆け抜ける。

規則正しく並べられたコンテナの間をいくらか進むと、今度は無造作に並べられた資材が現れる。その為、まっすぐ進むことはできず俺たちは何度も左へ右へと進路を変えなければならぬ。

そして、大小さまざまな資材はコンテナのように駆け抜ける俺たちの身を隠してはくれない。

「背を低くして」

先陣をきる御影が、資材の影から頭を出さないように腰を落とす。

俺もそれに習い資材を背に彼女の後を進む。

が、常時足を折るこの体勢は意外と足にくる。

目の前に行く彼女はさっさと駆けていくのに対し、俺はのろのろ地にへばりついてばかりいる。資材が置かれた一体を通り抜けるまでに彼女との距離が離れてしまう。そして、俺が追いつく頃には彼女はすでに次の通路に敵がいまいかどうかを確認し終えている。

「ちょっと、しっかりしなさいよ」

「いや、お前がはやいんだよ」

「彼がどうなってもいいの？ ほら、行くわよ」

彼女の合図でまた走り出す。

『沙織、応援がやってきやがった。……まだなんとか応戦できてる』
無線から聞こえる発砲音は先ほどより増し、絶え間なかった。

『がんばって』

御影は一人、念じるように小さくつぶやいた。

曲がり角で確認のために立ち止まり、御影の合図でまた走り出す。
これを何度か繰り返す。

光成側の戦況が激化するにつれそのスピードも上がっていった。

そしてサーバーまでおそらくあと二つほど角を曲がれば良い二手に分かれた通路まで来た時だった。

『沙織、まだか！？ もう、弾が少ない……くそっ！』

『あと、少しだから。お願い、耐えて』

光成の声が落ち着きをなくしていた。

御影が二手に分かれた通路の片方をもうほぼ形式的に確認をする。

このままでは光成が危ない。俺は彼女の答えを待たず、走り出そうとした。

「ダメだわ」

彼女が俺を制止する。

俺の眼前には広げられた彼女の手が行く手を阻む。

「なんだよ。はやくしないとアイツが」

「見て」

彼女が通路の奥を示す。

そこには一人の男が銃を手に立っていた。

彼はしきりに周囲を見渡し、時々何かをつぶやいていた。

「やはり、見張りを残していたわね」

「でも、相手は一人だ。俺たち三人でいけば勝てる」

「それはダメよ。おそらく彼は仲間と無線で連絡をとっている。彼

に見つかれば今囿にひきつけられている敵に私たちの存在が知れてしまう。そうなると作戦は台無しだわ」

御影のいうとおり、彼に気づかれぬよう近づき攻撃するにはこの通路はあまりに長く、身を隠せる場所も少なかった。

しかし、俺はひらめいた。日ごろ御影にたしなめられてばかりいる俺は、ここぞとばかりに提案した。

「御影、こっちの通路もサーバーに通じているんだろ？」

俺は反対に見える通路を指差した。

「ええ、そうよ」

「なら、こっちを進めばいいだけだろ」

俺の予想も空しく、彼女はノーリアクションだった。

「目黒さん、マップを出して」

「……はい」

俺の後ろの目黒がDiOSからこのサーバーのマップを表示した。御影はそのホログラム上を指差し説明した。

「私たちがいる場所がここ。たしかにどちらの通路もまた一つに合流してサーバーへと通じている。そして、敵がいるのはここ」

地図には俺たちが先ほど覗き込んだ直線の通路と、もう一方の曲がりくねった通路が。

そして彼女の指は二つの通路の合流地点を示した。

「この直線の通路の先に彼はいる。そしてそこはもう一方の通路の出口でもあるわ。どちらを進んでもダメ。敵だって考えないわけじゃないもの」

「じゃあ、どうする。いつまでもここで身を隠してるわけにいかないだろ」

「わかってるわ。ちょっと待ちなさい」

彼女はまた通路の奥を覗いた。覗き終わると彼女は顔を歪めた。

「動きそうにないわね。……一か八か、かけてみましょう」

彼女はそう言うつと銃を構えはじめた。

「おい、この距離じゃ無理だ。バレちまうぞ」

俺の忠告も聞かず彼女は銃を構え、その引き金に手をかけた。しかし、その銃口の敵にはなくすぐ近くのコンテナに向けられた。

彼女は引き金を引いた。

二度金属音が響く。

「行くわよ」

彼女は反対の通路に向け走り出した。

俺もすぐ後を追う。

左右に折れ曲がった通路を彼女は走り抜けていく。

先ほどまでのように先を確認したりなどしない。

それにしてもなんとという速さだ。全力で走っているのに、御影の背中が少しずつつ離れていく。

「もつと走って」

十分走ってるよ。お前が軽快に角を曲がりすぎだ。

ある角で御影は立ち止まり、俺と目黒が追いつくのを待った。

「この先が合流地点。一、二、三で駆け抜けるわよ」

彼女は銃のグリップを握りなおす。

「一、二、三」

彼女が走り出す。先ほどまで胸元に携えていた銃を今度は前方に向かって構えながら走る。

二つの通路がつながる少し広い場所に出た。

しかし、先ほどまでいた敵の姿はなかった。

「クリア」

彼女はまた銃を胸元に携え、走る速度を上げる。

合流地点からサーバーに通じる通路へ走る。

二つほど曲がったところで一帯が急に開けた。

そしてそこにサーバーがあった。

「着いたわ。目黒さん、頼むわ」

目黒はサーバー前でしゃがみこむと忙しくDiosを操作し始めた。

『もう弾が尽きた！……後は拳銃しかねえ。無理だ！』
光成が声を荒げる。

『いま、サーバーにウイルスを送っているわ。あと少しよ！』

「目黒、早くしてくれ！」

目黒の手先ははこれ以上ないくらい素早く動いていた。

これ以上はどうにもならない。

わかつちやいるけど、言わずにいられない。

「望月、彼女の護衛を頼むわ」

俺は目黒の後ろに立つ。

銃を肩ほどの高さを持ち、とっさの対応ができるように備えた。

御影は反対側の壁に背をつけ、通ってきた通路を警戒する。

『敵が前進してきやがった。……くそっ！』

「目黒さん、まだなの！？」

御影の声にもいつももの平静さがなくなっていた。

「あと、これだけ……」

目黒がつぶやく。

彼女がクリックしようとしたその時だった。

「させるかぁ！」

通路から男が現れる。

俺がそれに気づき銃口を向けようとした時、敵の銃口はすでに「

ちらを向いていた。

「くっ」

乾いた音が染まり始めた空に響いた。

立て続けに響いた銃声。

ひとつは俺のゴーグルにあたりはじけ飛んだ。

その時、俺はまだ引き金さえ引けていなかった。

くそつ、やられた。

「動かないで」

御影は男の後ろに立ち、彼の後頭部に銃を突きつけた。

何故か、男は攻撃をやめ固まった。

「銃を捨てなさい。今ならまだ間に合うわ。それとも、もう一発くらいたい？」

御影の言葉を聞いた男は、苦い顔をしながら手に構えた銃を離し、両手を天に向けた。

御影は地面に落ちた銃を俺の足元へ蹴飛ばした。

「おとなしく座ってなさい」

御影は銃を突きつけたまま、男に促す。男は手を上げたままその場へ座り込む。

『ハッキング成功……』

その時目黒がそうつぶやいた。そしてすぐさま御影は告げた。

『光成、表に出て存分にいたぶってちょうだい』

先ほどまで、無線から響いていた銃声がひとつも聞こえなかった。

『よっしゃ！ さあて、鬱憤ばらしといくか』

「目黒さん、彼を見張っておいて。望月、時間がない、着いてきて」
彼女はそういって光成がいる通路へと向かい走り始めた。

俺は後を追いなから訊く。

「御影、俺はもう……」

「大丈夫よ」

彼女はしっかりとそういった。

俺はちらとDiosを確認する。きちんと動作しているようだし、

よく考えれば無線だつて聞こえている。しかし、俺はさきほど確かに撃たれたのだが……

そんなことを思案している間に、俺たちはたどりついた。通路の真ん中に光成がいる。

そして手前には先ほどとは逆に敵が物陰に身を隠そうと右往左往している。しかし、この通路には身を隠す場所はない。

「撃つて」

俺と御影は通路の端に立ち、その銃口を彼らに向け引いた。

もはや攻撃の手段を持たない彼らをしとめるのに、俺たちの非力なハンドガンは十分過ぎた。

ひとり、ふたり、その逃げ惑う背中に弾が直撃していく。

彼らはもはや統制を失い、各々が弾から逃れることばかりに苦心していた。

「やめてくれ！」

一人男がそう叫んだ。

御影は発砲をやめた。しかし、銃口は彼らを捉えたままだ。

そして、俺の前に手をかざし攻撃をやめるよう指示した。

『二人とも、撃つのをやめて』

『なんだよ、今仕留めないでどうする？』

光成がつまらなそうに言う。

『いいから』

御影はゆっくりと彼らに向かって歩き始めた。

「全員手をあげて」

銃で一人一人を威嚇しながら彼らを取り仕切る男の目の前で立ち止まる。

男は御影に言う。

「俺たちの負けだ。ここはくれてやる。だからこれ以上の攻撃はやめてくれ」

御影はすぐには答えを返さなかった。

そのため、男はいつまでも向けられた銃口におののいてばかりい

た。

「そうね……」

彼女はもったいぶったように言う。

「私はサーバーさえ手に入れば、あなた達のことなんてどうだっていいの。……今後のことを考えてここで芽を摘んでおくのもいいかもしれないわね」

彼女はかちやりと銃を構えなおす。

男はびくりと身をこわばらせ、腕で顔を覆う。

「でも、それよりも私は情報が欲しいの。これ以上損害を大きくしたくないなら私の言うことを聞いて」

彼は腕の置くから顔を覗かせ聞く。

「どうすればいい？」

「サーバーに全員集めて。あつちでこそこそしてる彼らもね」

通路の置くの方でこちらを覗く数人がいた。おそらく外から通路に侵入した奴らだ。攻撃はできなくなるし、逃げようにも仲間は取り残されるでにっちもさっちもいかなくなってあそこで様子を伺っているのだろう。

「少しでも変なマネしたら、どうなってもしらないわよ」

彼女は彼らを順々に銃口でなめ警告した。

男が仲間に立つように促す。

彼らはサーバーの前に座らされた。

先ほど目黒に見張られていたのを含め九人。

「あなた達、見たところ南校のグループね？」

彼らは橋のサーバーをハックしていた奴らと同じく南校の制服を着ていた。

「……ああ」

男が仕方なさそうに答えた。

「リーダーと他のメンバーはどこにいるの？ 私の知る限りここに
いるメンバーはほんの一部に過ぎないはずよ」

「それは知らない」

「……光成」

彼女は光成にアイコンタクトをとる。

光成は装てんしなおしたサブマシンガンを彼らに向ける。

男は急に早口になって話し始めた。

「待ってくれ！ 本当に知らないんだ。俺達は指示されてここに来てただけで他のやつらがどこにいるかは知らない」

御影が光成に銃を下ろすよう合図する。

「それはどうということ？ 詳しく聞かせて」

「各サーバー担当のハッカーと上層部との連絡は伝令を通して行われる。Diosによる通信だつてそうだ。だから、俺達は直接リーダーと行動をとることもないし、他のメンバーがどこにいるかも知らない。一度他のメンバーの居場所を伝令に聞いたこともあるが、それは教えてもらえなかった」

「あなたはリーダーと会ったことがあるの？」

「一度だけ、ハッカーになった時、その時会ったことがある。それきり会ったことはない」

「その場所はどこ？」

「街はずれにある廃ビルのサーバーだ」

御影はうろつろつと彼の前を歩く。そして立ち止まって言う。

「そう、あなたの話でいくとこれ以上聞けそうなことはいわね。

いいわ。全員このまま返してあげるわ。わかったら早く行って頂戴」

彼らは手を後頭部につけたまま、立ち上がる。

「光成、彼らを表まで送って」

光成が彼らに銃を向け、「早く行け」と指示する。

「あ、そうそうこれ」

歩き出そうとする彼らに彼女はあるものを投げ渡した。

「忘れ物よ」

それは彼らが先ほどまで使っていた銃だった。俺がそれを全て回収し御影に渡したのだ。

反射的にそれをキャッチしたハッカー達はまさかというような顔

でこちらをみる。

「ロツクをかけておいたから一週間は使えないわよ。それまではみんな大人しく家でゲームでもしてることね」

「そういえば先ほど御影が目黒に銃をわたし、目黒が何かをほどこしているようだったが、このことだったのだろう。」

去っていく後姿に彼女は言い放った。

「伝令には、こう伝えときなさい。もうこの場所に手は出さないこと、とね」

彼らは通路は消えていった。

彼女はひょいと近くに積まれた鉄骨に座る。そしてゴーグルをはずす。

「さて、目黒さん。残りのハッキング頼んだわよ」

目黒がサーバーの前で操作し始める。

「御影、どうして俺は無事だったんだ？」

「え？ なんのこと？」

質問が唐突だった為か、彼女は変な顔をしてこちらを見る。

「ほら、敵がさ、急に一人やってきた時さ。俺、あの時確かに撃たれたんだ。ここをさ」

俺はゴーグルを指差している。

「ああ、あれね。その弾にはもうウイルスが添付されてなかったのよ」

「つまり、どういうことだ？」

「敵があなたを打つ前に私が彼を撃つたのよ。だから彼のDiosにはもう攻撃する余力は残ってなかったのよ」

「そういえば、銃声は二回聞こえたんだ。その一つ目は俺に当てられたのではなく、敵に当てられたものだったのか。」

「にしても、アイツは通路の途中に居たはずなのに、どうして俺達を通った時は居なかったんだ？」

「あれは、正直言って賭けだったわ。彼はあそこを離れないように仲間から指示されていたはず。だから彼を動かすには何か外的な要

因が必要だった。だから彼の気を引くため発砲したの。思惑どおり彼が動いてくれたから良かったものの、もしあれに気づかずあの場に留まっていたらどうなっていたかわからないわ」

「とっさによく考えたな。だから通路の方を警戒してたのか」

「だから、あなたがやられずにすんだんじゃない」

「それは感謝しないといけないな。どーもありがとござーやした」

男というものはあんまりこういうとき真剣さというものを相手に汲み取られるのが苦手である。おそらく俺の心のこもらない棒読み言葉はそんなものから発せられたのだと思う。

彼女はそれを聞いて、一つため息した。

「そんなのいらぬ。てか、あなたに期待してない」

「言っと思った」

互いがわかりきったような返事にほくそ笑む。

「今日の立役者のお帰りだぜ」

そこへ光成がぶらぶらと銃をぶら下げて帰ってきた。

「彼らは？」

「全員しょぼーんと帰ってっただぜ」

「これで私達の存在が彼ら全体に知れ渡るのは必至ね」

彼女はすと立ち上がった。

「みんなお疲れさま。特に光成、初めての作戦でこの状況の中よくやってくれたわ」

「沙織、気にするな。これはツケにしといてやるから、今度返してくればオーケーだ」

光成が意地悪そうに言う。

「はいはい、考えとくわ」

彼女は少し笑いながらも涼しさを装った。

「あの……終わりました」

目黒が御影に話しかける。

「早かったわね。それじゃあ、今日はこのまま解散していいわ。おつかれ」

空は赤みを増し、金色に輝く海にカモメが円を描いて飛んでいた。俺は思い出した。

「おい、前やったDiosの登録はいいのか？」

今までサーバーをハックした際は、サーバーに俺達のDiosを認証させていたはずだ。

「それなら不要よ。目黒さんに頼んでそれももう済ませてあるから目黒はこくりと首をつった。

「わたし、帰ります……」

そう呟くととぼとぼ歩き帰り出した。

「また連絡を入れるわ」

御影が彼女の背中に声をかける。

未だに目黒のことはよくわからない。一体何がしたくて御影に使われているのだろうか。しかし、御影の言うとおり彼女の技術は確かに目を見張るものがあるのは事実だ。今回だつて一番活躍は光成だろうが、彼女の技術なしに成功し得るものでもなかっただろう。

「じゃ、俺は家帰って寝るぜ。なんか疲れたわ」

「結構よ。これからのことは望月を通してでも伝えるから」

「んじゃ」

去る光成に彼女は手を振る。

「さて、俺も帰るかな」

俺が光成の後を追おうとした時だった。

「ちよつと待って」

御影が止める。

「なんだよ？」

「今回の作戦で弾を使い果たしたの。今からそれを買いにいくからあなた着いてきてよ」

「何で俺なんだよ」

こんなことを言っているが、内心そこまで嫌でもない自分がいた。ただ、それが何故かはよくわからなかった。

「今回あなたが一番働けてないからよ」

「相変わらず手厳しいな」

「ほら、行くわよ」

俺達は置いてきた荷物を取りにあの場所へ戻った。

「彼、手ぶらで帰ったのかしら」

そこには俺と御影の鞆の他に光成の鞆も置かれたままであった。

「あいつのことだ。明日登校するまで気づかないだろうな」

「あなた、届けてあげたら？」

「言われなくても」

俺は鞆を二つ抱え、彼女について歩いた。

彼女は街の少しはずれの建物がまばらになり始めたあたりにあるホビー屋の前で足を止めた。

「ここよ」

店の中に入るがレジスターのあるところに店員らしき人がいない。

「いいのか？ 誰もいないが」

「いいの、いいの。いつもこうだから」

彼女は店の奥へと足を進める。

奥といっても店は小さく、十歩もあれば一番奥までいけてしまいうそである。ホビー屋といっても子供がくるような明るさはなく、照明が十分にいきわたらないので薄暗く、壁際につまれたプラモデルの箱などには薄く埃が積もっていた。目新しい玩具が表に少し置かれていてだけで、大半は一昔前のものばかりである。

彼女は店の隅にあるエアガン等が置かれた場所で立ち止まり、商品を見渡していた。

「あ、これ。俺達が使ってるゴーグルじゃん」

それはその中に並べられていた。

「そうね。型はこれと一緒よ。ここには置いてないけどこれに無線機能を付加したものを使用してるわ」

「思ったんだけどな、ゴーグルである必要があるか？ 無線機だけで売ってるだろ」

「なに言ってるの、あなた今日世話になったばかりじゃない。それにこれを見なさいよ」

彼女は近くにあったエアガンの箱をとると、その裏面の表示を指さして言う。

「『エアソフトガンで遊ぶ際は安全のためゴーグルを使用してください』ってここに書いてあるでしょ。私達はいいい年なんだから小さな子供達の模範にならなくちゃいけないわよね」

彼女はわざとらしくそう真面目ぶった。

いやいや、ハッカーやってるって時点で模範とかそんなこというレベルじゃないし。

「それはごもつともで」

だから俺も真面目ぶってそう返した。

「うふふ」

そんな風に彼女は笑った。

ほんとうに時たま茶目っ気溢れる冗談言うのを彼女。

その時、彼女は確かに女の子だった。

昼休憩まであと一分。

俺は視力の良さをいかし、教室の最後列から黒板の上にかけられた時計を睨んでいた。

ちらと視線を下へ送る。

「というわけで、この答えがこうなるわけです。えーと、次の問題は……」

まずい。

この教師、時計をまったく気にする様子がない。おまけに、次の問題の解説を始めようとしている。

俺の経験上、この教師は解説の途中で授業を終えることはない。

これは非常にまずい。

俺は左手に幾枚かの硬貨を握り締めたまま念じる。

さあ、ちらっと時計を見るんだ。そして、「ああ、もうこんな時間か」とか言ってお開きにするんだ。

「この公式を使ってですね」

俺の念も通じず、彼は次の問題の解説を始めてしまう。

時計の秒針が五十、五十一、五十二　と時間を刻む。

そして、チャイムが鳴り響いた。

隣の教室からがたがたと椅子の音が聞こえる。

廊下を数名の男が駆けていった。

絶体絶命。

一方、教師は動じることなく解説を続ける。

昼休憩前の授業時間の延長は、弁当を持たない生徒にとって死活問題である。

くそつ。もう焼きそばパンは無理か。しかし、今すぐ終わればホットドッグには手が届くかもしれない。

俺はシャーペン以外の筆記用具を筆箱にしまい、臨戦態勢をとっ

た。

問題の答案から類推するに教師の解説内容はまだ半分といったところか。

次第に廊下を流れる人の数が多くなる。

それでも教師は「えーと」などの感嘆詞を交えながらたらたらと話し続ける。

この野郎！ 見てみる、廊下を威勢よく男子がかけていく。闘いはもう始まっているんだよ。それなのに俺は縛り付けられ未だこの席を立つことすらままならんじゃないか。くそう、このままでは俺の昼食が売れ残りのアンパンか玉子サンドになっちまう。それでもいいって言うのか。いや、そりゃ教師は学校が一括で宅配弁当頼んでるからこっちの事情なんて知ったことじゃないだろうが……。しかしだな、本来であれば五十分で授業を完結させるのが教師の務めであつてだな、こんなことは決してあつては

結局、俺が購買に到達した時、そこにはすでに長蛇の列ができあがっていた。

万事休す。

俺はため息一つして最後尾に並ぶ。もはや急ぐことはない。新たに列に加わる生徒など俺以外に見当たらないからだ。

前の方から思い思いのものを買った生徒が教室に帰ろうと俺の横を通り過ぎる。

「最後の焼きそばパンゲットー！」

調子の良さそうな男が友人に向かってそんなことを言っていた。

俺はそれに苛立ちを覚えながらも、アンパンか玉子サンドのどちらにするかという至極消極的な選択をしなければならぬと覚悟を決めた。

甘ったるく昼時に不向きなアンパンか、カツサンド、ミックスサンドとある中で最下級の、言うなればお寿司の河童巻きのような立場である玉子サンドか……。

Uターンラッシュ時に見られる高速の渋滞のように、一歩進んでは立ち止まり、また一歩進んでは立ち止まる。

「あら、あなたも？」

まさかと振り向くとそこには御影がいた。

「よお」

なんだか意外な感じがした。

「お前弁当じゃないんだな」

「アレをするようになってからあまり時間がなくてね。前は自分で作ってたわ」

「アレ？」

「ほら、アレよ。アレ」

「何だよアレって？」

俺が聞き返すと、彼女は手で小さくおいでおいでする。

おそらく、他の誰にも聞かれたくないことであるため、俺に耳をかせといってるのだろう。

俺は少しかがんで彼女に耳を傾ける。

彼女は手を口に添えてこそりといった。

「ハッカー」

「ああ、アレってそういうことね」

行いが行いだけにあまりこういうところで話せることじゃないのは確かだ。

彼女は列の前の方を覗き込み言う。

「だいぶ待ちそうね」

「早く来れば良かったじゃねえか」

「さっき体育だったのよ。着替えとかで時間とるのよ、男子と違って……あ、そうだ」

彼女は何かを思いついた。

そして俺の顔を見上げる。

嫌な予感がする。微笑を浮かべたこの顔は人が悪巧みする時の顔だ。

「あなた、ついでに買っておいで頂戴」
予感的中。

彼女が俺の手をとり、小銭を掴ませる。

「おい」

そして列を抜けながら言う。

「屋上で待つてるわ」

もう彼女は笑顔で手を振りながらこの場を立ち去ろうとしている。
俺はとっさに聞いてしまった。

「何にするんだ？」

彼女は振り向く。

「そうね。それを忘れてたわ。玉子サンド。 あ、それとアイス

コーヒーもね。じゃ、よろしく」

「いや、てかそうじゃなくて待って……」

俺がそれを言った時彼女はもう階段に消えていた。

断るつもりがつい何をかうのか聞いてしまった……、一生の不覚。
つか、最後にアイスコーヒーって言ってたなかったか？ 自販

機だから全然関係ないじゃん。全くそれぐらい自分で……。

しかし、ふと左手をみるとそこには玉子サンドとコーヒーの代金を握ってしまっている。

……仕方ねえな。

「玉子サンド二つ」

二人分の代金を俺はおばさんに手渡す。

「はい、どうぞ。あ、袋いる？」

売り切れのカツサンドの奥に置かれている玉子サンドを二つ手にしたおばさんがそう聞く。

「じゃあ、お願いします」

俺はこの先のことを考えてありがたく頂戴した。

購買をあとにし中庭にある自販機へ向かう。

俺は残ったお金を入れる。

そして後はボタンを押すだけだが、ここで俺の指は止まった。アイスコーヒーって、どのアイスコーヒーだよ？

自販機には数種類のコーヒーが並び、それぞれに『HOT』と『COLD』のボタンが付いている。

彼女の『アイスコーヒー』という指示では絞り込むことができない。

えい、まあ一番スタンダードなのでいいだろ。

俺はボタンを押す。

カタツという音を立て扉の中に大きな紙コップが落ちる。

そしてその中へ二つの液体が注がれはじめる。

扉の横のランプが光り出来上がったことを伝える。

俺は扉を開き、それを取り出した。

せっかくだし俺も何か……。

俺はポケットから硬貨を拾い上げ適当に自販機に入れ、サイダーの下のボタンを押す。

手首に玉子サンドの袋をぶら下げ、その手で彼女のコーヒーを、しゅわしゅわと気泡がはじけるサイダーを右手に持つ。

屋上へ上がるとひさしの陰に座る彼女を見つけた。

「ありがとう。お金足りたかしら？」

「それは問題なかったんだが、そもそもなコーヒーぐらいは自分で買えって」

俺は彼女の座る横にドリンクとサンドのパックを置き、それを挟んで座る。

「でも、あなたも買ってるじゃない」

「これはついでだ。第一、ここまで運ぶのはいろいろ骨が折れるんだよ」

「まあ、そういわないで。どのみち今日は呼ぶつもりだったのよ」

「なんだ、もう次の場所決めたのか？」

「港のサーバーで捕らえたハッカーが言ってたでしょ。以前彼らのリーダーと廃ビルで会ったことがあるって」

「行くのか？ でも、所詮敵の言うことだ。信用できるのか？」

「もちろん私だって鵜呑みにしてないわ。でも、彼らの全容を掴むにはそこを当たる以外、今は方法が見つからないの」

「奴らの規模はどれくらいなんだ？ お前、いくらかは知ってるんだろ？」

「個人的に色々調査したけど、おそらく彼らがこの街で一番の勢力よ。私達が初めにハックした橋のサーバー、そして今回ハックした港のサーバーの以外にいくつも彼らにハックされている。そして、あそこに居たハッカー達はまだ下っ端。一部に過ぎない。リーダーは相当の数を束ねているわ。それも組織的にね」

「確か言ってたな、連絡は伝令を通してどうだこうだとか」

「だから各サーバーをハックしても本隊、リーダーがどこにいるかは掴めない。彼らのリーダーはよほど頭の切れるやつみたい。次に乗り込む廢ビルには、おそらくもういないでしょうね。でも、そこで何か痕跡を見つけれられるかもしれない」

「今まで漠然とハッカーがいるとしか考えたことしかなかったが、どうやらその情勢は奥が深そうだ。」

しかし、南校の奴らばかりがハッカーをしてるわけじゃないよな。俺は彼女に訊いた。

「でも、奴らだけじゃないだろ？ 俺たちや以前の目黒のように小さい規模でやってるハッカーもいるんじゃないのか？」

「ええ。もちろん南校の勢力が一番大きいといってもそれは割合から見ての話。私達のように少人数で活動するハッカーもたくさんいるわ。そして、その活動理由もさまざまね」

「ふーん、思ったよりたくさん居るんだな」

「そのうちそこらへんも相手にすることになるでしょうね……。まあ、とりあえず食べましようよ」

彼女はパックの輪ゴムをはずし、中からサンドを一切れつまみあげた。

口へ運び、上品にその角をはむっと小さく切り取るように食べる。

彼女と対照的に俺はサンドの半分までちぎるように食べた。
サイダーを口へ流し込む、抜けきれていない炭酸がのどをちくちくと刺す。

彼女も空を眺めながら、何気なくコーヒを手に取りそれを口へ運ぶ。

「んっ」

突如、彼女が顔を歪める。

そして口の中ものを即座に飲み込むと、コップの中身へ視線を落とす。

「どうした？」

彼女は苦虫を噛み潰したような顔をしながら俺の顔をにらむ。

「甘い」

「へ？」

「どうしてブラックじゃないのよ!？」

俺に浴びせられた謂れなき非難。

「俺はアイスコーヒーとしか聞いてないぞ」

俺の弁明に彼女はせまった。

「そのとおり。でも私、なにも砂糖やミルクを入れるなんて言っていないわよ」

「は？ 普通コーヒーつったらこれだろ？」

「砂糖入りのコーヒー豆なんてどこにも売ってないわよ」

「そりゃ、売ってねえよ。でも、一般にはこれが標準だ」

俺の反論を断ち切り彼女はこう言い放つ。

「と・に・か・く。あなたは指示と違うものを買ってきた。そして私はこれ飲めない。だからあなたが飲んで」

彼女は俺の横へコーヒを置くと、その代わりといわんばかりに俺のサイダーを掴んだ。

「おい、それ俺のだって」

彼女は無視してそれを飲む。

ごくりと彼女の小さなのど仏がなる。

「こつちの方がいくらかサツパリするわね」

彼女はそう呟くとまたサンドを食べ始めた。

ああ、俺のサイダー……。

てか俺、間違ってるか？ コーヒーっていったらコーヒーじゃん。

ブラックはブラックコーヒーじゃん。

納得はいかないながらも俺は彼女に折れていた。

彼女にあてがわれたコーヒーを手に取る。

そしてそれを口へ運んだ。

苦味を殺すようにいれられた砂糖とミルクの味ばかりが舌の上を
転がった。

確かにそれはコーヒーというには甘すぎた。

日に日に高くなる太陽によって照らされる屋上の地面。

それは次第に夏のあの灼熱地獄の片鱗を見せ始めていた。

しかし、このひさしの中に座っている限り、まだそれに煩わされることはない。

日のあたる所へぺたりと手のひらをついてみた。

じわじわと俺の手を焼こうとする地面。だがそれはまだまだ俺の

手を跳ね返すにはぬるすぎた。

次に日陰へ手をついてみた。

無機質なコンクリートがひんやりと俺の手から熱を奪う。

「炭酸が抜けると、意外と甘いわね」

彼女は不機嫌そうにサイダーを置く。

「最後には砂糖水みたいになるよな。実はこっちの方が糖分控えめだった」

俺はついた方と逆の手でサンドを食べながら、コーヒーを飲む。

「そうかしら？ とにかくそれは甘すぎよ」

「缶コーヒーとかこんなもんだぜ」

「じゃあ、あなたそれがコーヒーだって言うの？」

「……うまく説明できねえが、豆から入れるコーヒーの普通と市販のコーヒーの普通は違うんだよ。自販機から出てくるコーヒーはこれが普通なんだ」

「嘘。それがコーヒーだなんて、私は認めないわ。もはや新しい商標をつけるべきよ」

んー、それは何か違うねえか？

加えて俺はこのくだらん論争を新たな切り口で攻めてみた。

「そもそも普通な、女子高生は玉子サンドとブラックコーヒーなんて取り合わせしないんだよ」

壁を背にしていた彼女が身を乗り出す。

「そんなの誰が決めたのよ？ 第一、そこまで特殊な取り合わせじゃないでしょ」

「ただのコーヒーならまだしも、ブラックじゃなあ。女子高生は果汁十パーセント以下のフルーツジュースを飲むと相場が決まってるだよ」

「あんなもの飲めるわけじゃないじゃない。ていうか私、果汁十パーセント以下でフルーツジュースとかオレンジジュースとか謳ってる商品が許せないわ。昔自販機で買ったことがあるけど、全然味が違うじゃない。私は柑橘系の酸味を味わいたかったのよ。なのに、全然甘い。あんなのオレンジじゃないわ」

「まあ、それもさっきの『豆コーヒー』と市販コーヒーの普通は違う理論』みたいなものであつてだな。あれはあれで普通なんだよ」

「いえ、私は認めないわ」

心なしが論点がずれているような気がするが、矛先が俺からそれたので気にしないことにしよう。

「まあまあ、わかったなら買わなきゃいいだけだ」

「それはそうでしょうけど……」

彼女はちよつとずつちよつとずつ切り取るようにして食べていたサンドへ少し乱暴に噛み付いた。

俺たちはどこをみるでもなく視線を小さな入道雲の浮かぶ空へ投げ出し、だからだと食べ続けた。

俺は最後のサンドを食べ終わると、残りのコーヒーをぐいと飲み干した。

「なあ、御影」

「何？」

「こないだの南校のハッカー達、あいつらもうDios修理に出したのかな？」

Diosが使えないということは相当不便なことだ。俺の知る限り、彼らは港のサーバーをそこまで悪用していなかった。もともと使われてないくらいの場所だったし。そう考えると敵とはいえいく

らか同情せずにはいられなかった。

「いえ、たぶん出してないでしょうね」

「え、修理できないぐらいのダメージなのか？」

「おそらく逆ね。セキュリティの自浄作用で次の日には直る程度のダメージしか与えられてないと思うわ」

「でも最悪故障もあり得るって言ってなかったか？」

「それは敵の管理下で撃たれた場合。自分達の統治するエリア内ではいくらかは敵の弾の威力を小さくすることができるわ。もちろん完全に無効化はできないけどね」

「それって攻めるほうは不利だよな」

「不利っていつても、その場で使えなくなった時点でサーバーを守ることができなくなるわけだから、一日使えなくするだけでも十分なのよ」

その話を聞いて俺は肩の荷が下りたのと同時に、自分達は相当の危険を冒していたのだと再確認した。あの時もあの時も、御影が助けてくれていなければ家の鍵を開けることにすら苦労する日々をすごさなければならなかっただろう。

彼女は最後までサンドを少しずつ食べた。数回にわけてサイダーを飲み、空になったそれを置く。

ぱっぱと手を擦るように合わせパン屑を払うと彼女は言った。

「さて、今回の作戦なんだけど」

「おい待て、光成や目黒を呼ばなくていいのか？」

「それを今説明しようと思ってたの。二人は呼ばなくてもいいのよ。今回はあなたと私だけでいくから」

「え？」

「今回、廃ビルには調査目的で潜入するの。だから二人の方が都合が良いのよ。もちろん、できることならハックもするつもりよ。後、残った二人にはこれまでハックしたサーバーの更新を頼むことにしてるの」

「それはわかったが、こういうことは光成の方がだな……」

「彼には前回かなり負担をかけてしまったわ。そういう意味でも休ませてあげたいの。あなたはそんなことないでしょ？ 加えて、彼は確かに戦闘のセンスはあるみたいだけど、じつと身を潜める事が得意なようには見えないわ。今回は隠密行動だから彼には不向きだと思っわ」

確かに、光成が息を殺している様子など想像ができない。

「それはそうだな」

「第一、私とあなたは結成時のメンバー。こういうことは率先的にやるべきでしょ？」

どうやら俺がどのように申し立てようとも全て彼女に言い負かされてしまいそうである。

そこで俺は、ここ最近彼女と対話するにおいて重要だと学習した「あきらめ」を活用することとなる。

「わかった。で、いつ行くんだ？」

「今日よ」

「え、ずいぶん気が早いな。今まで事前の下調べとかでいくらか時間かけてただろ？」

「ほんとはそうしたいところだけど……。時間が経つにつれて残されたデータは劣化していく。なるべく多くの情報を手に入れる為にはそんなことしている時間はないわ。放課後直行よ。あなた、装備は持つてるでしょうね？」

「ああ、全部あるよ」決して心がけて持っていたわけではなかった。鞆に入れっぱなしにしているだけだったのだ。

「管理するサーバーも増えてきたからこれからは突発的な戦闘もあるかもしれない。いつだってその用意はしておいてね」

予鈴のチャイムが鳴る。

彼女は立ち上がった。

「それ、貸しなさい。捨てておくから」

彼女は俺の横に置かれた空になったサンドのパックと紙コップを指差した。

「ほれ」

彼女はそれを受け取り、自分のと一緒に袋へ入れた。俺も立ち上がり、彼女と一緒に下へ降りる。

彼女はA組だから俺より一つ上の階に教室がある。

別れ際彼女は言う。

「校門で待つてるわ」

「了解」

生徒があわただしく移動し始めた廊下を彼女は歩いていった。

俺が教室に入ると光成が言う。

「次、講義室だぜ」

「やべ、急がないとな」

「俺、先言ってるぜ」

俺はロッカーから必要な教科書を取り出し、駆け出そうとする。

「あ、筆箱」

机のほうへ目をやると、さっきまであったそれがない。

あれ？俺、置いてたよな。

「はい、筆箱」

俺にそれを渡してくれたのは牧瀬だった。

「お、悪い」

「さ、行く。もたもたしてると先生に怒られちゃうよ」

「いや、もう慣れっこだ」

彼女と俺は講義室まで歩く。

「何かいいことあったの？」

牧瀬はそう俺に訊いた。

俺は至極平然と「いや、何にも」と答えた。本当に何にもない。

しいて言うなら面倒なことが増えただけだ。

「うそだ」

「ほんとだ。なんでそう思う？」

「だって昔は教室に帰ってくる時いつもつまらなそうな顔ばかりしてたけど、今はそんなことないよ」

「そうかお？ 何も笑ったりしてるわけじゃないだろ」
「そうだけど、何ていうのかな……、いい顔、そう、いい顔してるのよ」

全くこの娘は何を言ってるんだらうか。

「なんだそりゃ？ ほら、早く席とらないと埋まるぜ」

講義室での授業は席が決まっていない。講義室へ入ると俺は彼女にそう促した。

牧瀬は教壇に近い一番前に席をとった。

「空いてるよ。座れば？」

彼女は隣の空席を示し勧める。

「俺は遠慮しておくよ」

俺は彼女に詫び最後列に向かう。

「どうした。アイツに呼び出されてたのか？」

俺の隣にすでに座っていた光成が言う。

「まあ、そんなところだ。そっぴや、お前と目黒は今日サーバーの更新を頼まれるみたいだぞ」

「なんか生ぬるい仕事だな」

「そっぴやなよ。俺は御影とビルの潜入調査なんだからよ」

「おお、そっぴは楽しいそっぴだな」

「楽しいもくそもあるかよ。いつもアイツに使われてばっかだ」

「ふーん……沙織は信用してるんだな。おっと、先生来たか。」

喋ってたらまた当てられちまうぜ」

「え？」

俺がそう漏らした時、教師は教壇に立ち授業の開始を告げていた。俺と光成には、これ以上目をつけられないよう、この最後列で授業を平穩にやり過ごすため、これ以上の会話は許されなかった。

御影は俺を信用している？

そっぴか？

俺、結構邪険に扱われてるように思えるが……。

待て。今回の潜入調査をするにあたって彼女は隠密行動だと言

っていた。隠密行動なら一人が一番だろう。それにつけても足手まといになりそうな俺を連れて行くということは、やはり俺は何かしら信用されてるのか？

俺はホワイトボードをぼうつと見ながら、教師の言葉を聞き流しながら、そんなことを考えた。

そして、もし光成の言うことがそうなら、一体俺の何が信用されているのかを考えた。

しかし、思い返してもあまり彼女に対して貢献できたことなどなかった。

むしろ、足を引つ張ったことばかりが思い出される。

結局、彼女が信用すべき俺の何かは検討がつかなかった。

「おい、教室帰るぜ」

いつまでもホワイトボードを見続けていた俺を光成が呼ぶ。

「……あ、終わりか」

前方の席の生徒がぞろぞろ帰り始めていた。

残りの授業中、いつものように俺は他のことばかり考えていた。

ただいつもと違ったのは俺の考える内容の大半を御影が占めていたことだろうか。

「望月くん、掃除だよー」

頬杖する俺の前にぴょんと調子よく現れた牧瀬。

彼女が俺の顔を「んー」と覗きこむ。

「せつかくいい顔だったのに、元に戻ってるよ」

俺はがばと立ち上がる。

「心配するな！ ちょっと眠いだけだ。ほれ、こうすればもう大丈夫」

そう言いながら己の両手で頬をびしゃびしゃと叩く。

「ははは、掃除は図書室だよ」

「よし行くぞ。って、今日掃除だったのか？」

「そうだよ。どうかしたの？ 何か急ぎの用があるとか」

「いや、そーいうわけではないんだが……。と、とりあえず行こう」
俺は牧瀬と図書室まで歩く。

俺は彼女の後ろを歩きながらDiosのメールボックス立ち上げる。

『悪い、掃除だった。なるべく早くすませる』

上記の文章とごめんなさいと手を合わせた絵文字を御影に送信した。

図書室に入ったがそこに掃除の監督をする先生が見当たらない。

「あれ？ 先生いないね。奥のほうに居るのかな？ 私掃除始めるから、望月くん先生探してくれない？」

「ああ、任された」

この図書室結構広い上に天井まである本棚がいくつも並んで居るので、入り口から一見するだけでは人がいるのかいないのかさえ判断がつかないのだ。

俺は図書室の奥へと歩く。

本棚に挟まれた通路を左右と確認していく。

そして長机がならべられてある一番奥の通路。そのもつとも端に先生は座っていた。

先生は本を読んでいた。それもかなり真剣だった。俺たちが開けたドアの音にする気が付かなかったのだろう。

「あの、友野先生。掃除しに来たんですけど……」

先生ははっとこちらに気が付く。

「あ、もうそんな時間か。ほんの少しと思ってたけど、つい入れ込んでしまった」

先生は本についている糸を開いているページに挟むとぱたりと閉じた。

「先生、それ、何読んでるんですか？」

「ん、これはね今年の茶川賞受賞作品なんだよ。絶対呼んだ方が良いわよ」

先生はそう俺に人差し指をびしっと突きつける。

「茶川賞……、詳しくないんですけどよく聞きますよね、あと値木賞とか」

「値木賞は大衆文学ね。私はどちらかとも読むようにしてるわ。望月くんも受賞作呼んでみたら？ そうね、茶川賞のは純文学でとっつきにくいかもしれないから、初めは値木賞から攻めてみるといいかもね」

「は、はあ……、また機会があれば。で、今日はどこを掃除したらいいんですか？」

先生はまたはっとした。

「そうそう。今日はあの本棚をはたきでばたばたーっとしちゃってね」

「わかりました」

俺ははたきを手に取り、脚立に上がる。

そして本棚を上段からはたきがけしていく。

しばらく掃除されていなかったのか多くの埃が俺に降り注ぐ。

「ごほごほと咳き込む俺。」

しかし、こんなことに遅れをとってられない。

彼女を待たせているのだ。

俺はノルマをこなし本の貸し出しを行う受付に座る先生の下へ向かう。

「私も終わったよ」

「よし、じゃ帰ろうぜ」

「先生、終わりました」

「よし、じゃあ帰ってよし。明日もちゃんと来るんだよ」

「はは、もちろんですとも……」

俺たちは図書室を後にした。

「牧瀬、またな。俺もう帰るわ」

俺は急いで鞆を肩に担ぐ。

「うん、またね」

俺は校門へ急いだ。

掃除がないものはほとんど帰り、一方で掃除のあるものはまだほとんが残っており、よって校門をくぐる生徒は俺以外いなかった。「すまん。遅れた」

俺は手を合わせ頭を下げる。

「もう、時間がないって言ってるのに……」

彼女は少しすねた。

「掃除だって知らなかったんだ」

俺は頭を下げたまま言う。

「仕方ないわね……はあ、もう顔をあげて。行きましょ」

つりあがった眉と結んでいた口をふつと開放させ彼女は歩き出した。

「これでよし、と」

そう呟きながら御影はメールボックスを閉じた。

「二人にはもうサーバーの方を見回るように伝えたわ」

彼女の斜め後ろ二、三步を付いて歩く俺は、言われなくとも彼女の肩越しにそれを見ていた。

「つーかお前、手ぶらでいいのか？」

「今日は潜入作戦だから荷物はないほうがいいの」

「でも武器は？」

彼女の衣服を見る限り銃を入れられるようなポケットはない。そしてあつたとしてもそれはぺたんとしていて、何かが隠されているようには思えなかった。

「それならここ」

彼女は歩くのをやめ、くるりとこちらを向く。

そして突然、スカートの裾を右手でたくし上げた。

「お、おい」

俺は反射的に顔を背ける。

「なんだよ急に」

顔を背けたまま苦情を言う。

「ほら」

彼女は見ないさいと促す。

視線を徐々にそして慎重に彼女へ戻す。途中移りこんだ顔には意地汚い含み笑いがあつた。

たくし上げられたスカートからは、ふとももを覆う黒のスパッツが覗いていた。そして、その細いシルエットの脇に銃はぶら下がっていた。

彼女は右脚につけられたホルダーから銃を引き抜き、俺につきつけた。

「これなら効果的な不意打ちが可能だと思わない？」

そりゃ、誰もそんなところから銃が出てくるなんて思わねえし、男の悲しい性を的確についたナイスなアイデアだ。

「ああ、そ、そうだな」

彼女は銃をホルダーに戻し、俺を置いて歩き出す。

「それにしても、あなたの顔……ふふ、えらい慌てぶりだったわね」
どうせ彼女はさっきのような笑顔を顔に携えているに違いなかった。全く、俺をおもちゃにしゃがって、こいつめ。

「人通りが少ないといえどもこんなところでそんなことをするもんじゃねえよ」

無論それは俺が本当に慌てた理由とは違っていた。

「あなたも荷物はどこかに置いておきなさい」

「着いたらどうにでもするさ」

「なに、言ってるの？ もう着いたわよ」

「え？」

俺はあたりを見回す。たしかに、俺たちの歩く右側に立てられたコンクリート塀の上には小さなビルが一本だけ突き出していた。

これまでビルらしきビルの建たない地区を歩いていたので、まさかこんなところにといった感じだろうか。

御影が塀からビルの入り口を覗き込む。俺も彼女の上から覗き込む。

正面玄関は一面ガラス張りだったのだろうが今はシャッターが下ろされている。管理する者がいないのだから落書きされ放題である。上を見るとビルをしきるように幾枚もの窓ガラスが二階、三階とついている。そこから推察するにこのビルは五階建てだろう。この地域は中心部から外れていてなおかつ交通量も少ない。俺たち以外に入っ子一人いない。もちろんこのビルも同様にみえた。

「誰もいなそうだが」

「ハツカーの拠点が誰かいそうに見えるわけないでしょ」

「まあ、そうなんだが。どっから入るんだ？」

「そうね、まずは裏から行って見ましよう」

俺達はビルの裏に周った。

非常階段の扉を彼女は押ししたり引いたりした。しかし、鍵がかかっている為ビクともしなかった。

「電子キーだったらまだハッキングでどうにかできるかもしれないけど、普通の鍵ね。しかたない、表に行ってみましよう」

そして表に周る。

前面シャッターが下ろされている、こんなのだうしようもないに決まってる。

俺が彼女にどうするつもりなのかと訊こうとしたとき、彼女は膝を着きシャッターに手をかけていた。

「ほら、全部調べるわよ」

彼女はそう言ってシャッターを上を引つ張り上げた。

「くっ……はあ」

力いっぱい引つ張ったのだろがシャッターはガタガタとゆれるだけで少しも開かなかった。

「やめるよ。そんなの無駄だって」

俺はそう彼女に言った。でも彼女はやめなかった。

「いいから、ほらあなたも手伝って」

シャッターは幾枚かに分かれていて彼女はそれを一つずつ調べ始めた。

俺も仕方なく形だけ手伝う。

手をかけて引いてみる。

大して力を入れていないがこれは絶対動かないと思った。

俺はその後も御影に怒られないようにシャッターと格闘するフリをした。

そして最後、一番左端のシャッターに手をかけた時だった。

俺は彼女に俺の働きを証明するためシャッターを引き上げて音を立てようとした。

しかし、シャッターは思うような音を上げることなく、ガラッ

と数センチ上昇した。

「……み、御影、開いたぞ」

向こう半分のシャッターを調べ終わった御影がこちらに来る。

「やったわ。開けましょう」

俺と彼女でシャッターを上げていく。

だいぶ使われていなかったためかシャッターの収まる場所が汚れているみたいで、それを開けるには相当の力が必要だった。

ある程度手で開けたところで、御影はシャッターの下にもぐりこみ肩を当てて下から押し上げた。

つつかえがとれたのかシャッターが一気に上へ上がる。

俺たちは中へ入る。

窓の多くがシャッターやカーテンで塞がれている為、中は部屋の反対が見えないほど暗かった。

「ふう、これで退路は確保できたわね」

彼女は肩や手についた汚れを払う。

「にしても、どうして開いたんだろうか？」

「そうね、このシャッターの管理はネットワーク上でされてるみたいな。壁のところにもそういうマークがあったわ。だいぶ管理されていないし、おまけにハツカーの拠点とされていたと考えるとそれらにバグが発生していたのかもしれないわね」

「とにかく入れたわけだが調査ってどうするんだ？」

「その前にもしものための備えをしないと」

彼女は胸の内ポケットからゴーグルを取り出しかけた、そしてスカートの下に隠された銃を抜くといつでも射撃できるようにした。

俺も鞆からそれらを出し装備する。鞆は近くの机に置いておいた。「まずは一階の調査をするわ。まあ今こうやっていられるぐらいだから敵はいないでしょうけど」

彼女はDiosを立ち上げるとあるアプリを起動した。

「なんだそれ？」

「これは空間上にあるデータを収集するアプリよ。これを起動した

まま歩いて、もしその場にデータが残っているならホログラム上にそれらが表示されるの。そうね、大昔の人が鉄の棒やら振り子やらもって地下の物を探すダウジングとかいうのがあるじゃない。あれのデータ版みたいな感じかしら」

「その例え、伝わってこねえな」

「とにかく、あなたもこれを起動して歩き回るの。ほら、送ったからインストールしなさい」

俺は彼女から受け取ったそのアプリをインストールし起動した。

「じゃあ、私は左半分を探すわ。あなたは右半分ね」

俺はDiosの表示に注意を払いながら部屋の右半分を探す。部屋の中には以前使われていたであろう事務机らしきものがたくさん並べられていた。その机の間をくまなく歩く。しかし、これといった反応はなかった。探査し終えた俺たちはまた入り口で合流した。

「ダメだ。何もでない」

「ええ、わたしも。おそらくサーバーは最上階。ここはそこから一番遠いからでしょうね。上ってみましょう」

俺たちは入り口からまっすぐ突き進んだところにある階段に向かう。

窓も近くにないため階段はそれは暗く、足元もおぼつかないし、下から上の階さえよく見えなかった。そして悔しいがちよつと怖い。階段の手前で御影が俺に小声で話す。

「ここからは敵が潜んでいてもおかしくないわ。常に銃を構えて音を立てないように行動しなさい。あと、机の上には体を出さないほうがいいわね」

「かがめってことだな。了解」

御影は暗闇の中に向かって階段を音を立てぬようゆっくりと一歩一歩上がり始めた。

俺もその後について上っていく。

踏み外さないように足で段を確認しながら上っていく。

それにしても御影は躊躇なく上っていく。

この雰囲気は絶対に女の子が「きゃー私怖いー」とか言って彼氏に抱きつく類の雰囲気である。

こいつ、並みの男以上に肝が据わってやがるな。

俺が彼女の背中を見ながらそう思っていたときだった。

突然、後方からガタツという音が聞こえた。

俺は声を上げないまでも驚きに体を震わせた。

その音があった後、ウィーンという音が持続して聞こえる。

「まさか……」

御影はいきなり向きをかえ階段をかけ下りた。

すぐ後ろにいた俺は彼女を避けようとしたのか、それとも彼女にぶつけられたのか、はたまた音に驚いていたのか、理由はともかく体制を崩しなす術なく階段を転がり落ちた。

全身、特に背中の方にひどい痛みを感じながら俺は目を開けた。

御影は俺たちの入ってきた入り口に向かって走っていた。

そしてその入り口のシャッターを見たとき、俺はその理由を知った。

開いたシャッターから注ぎ込む光の面積が次第に狭くなる。

彼女がたどり着く前にその光は完全に消えてしまった。

「やられた……」

彼女は立ち止まりそう呟いた。

「……ちよつと、大丈夫？」

俺の醜態を発見した彼女が引き返してくる。

「痛くて……、まあなんとか。しかし、これは……」

彼女に手を引かれどうにか立ち上がった俺は閉じられてしまったシャッターを見ていた。

「閉じ込められたわね」

俺はシャッターに近づきそれを引き上げた。しかし、びくともしなかった。

「だめだ、開かねえ」

「もはや敵が上にいることは疑いようがないわ」

彼女はそう言いながら、銃の弾を再度確認していた。

「お前やけに落ち着いてるな。もっとあせるべきだろ？」

「別に想定外の出来事じゃないわ。それに敵がいるということは何か知られたくないデータが残っているともとれるわ」

「俺は別にデータは……いや、なんでもない。で、これからどうする？」

「もちろん上がるわよ」

「敵がいると分かっててか……」

「どうせ出るにしたらってここからじゃ無理じゃない」

俺たちはまた階段を上り二階に出た。

階段から部屋につながる場所で御影が先行し、銃を構えて安全を確認する。

「望月、ここからは常に無線で連絡を取り合うわよ。探査中も潜んでいるかもしれない敵に注意すること」

「了解。じゃあ、俺はこつちを探す」

俺は右手で銃を構えながら、部屋の中を歩いた。

一階と同じように二階も窓の全てにカーテンがかけられていて暗い。

机の下に敵が潜んでいてもそれに気づくのは難しいかもしれない。しかし、敵が出ることもデータが見つかることもなかった。

『御影、何もなかった』

『ええ、こつちも見つからなかったわ。三階へつながる階段で落ち合いますよ』

御影と落ち合い階段を上ろうとした時、階段の横に一つの扉があることに気づいた。

「御影、こつちから出られるんじゃないのか？」

よく見るとその扉の上には人が扉に向かって走るピクトグラムが表示されていた。つまり、これは非常口なのだ。

「たぶん無理よ」

彼女はそう言った。

「試してみないとわからないだろ」

俺は扉のノブを回して引いてみる。

しかし、全く空く気配がない。

「敵は私たちを閉じ込めようとしているのよ。そこが空いちゃ意味がないじゃない」

俺はがっくりと肩を落とし、彼女の後をついて三階に上がった。

先ほどと同じように探してみるがやはり何も無い。

「御影、データどころか敵さえいるのかどうか」

四階へ上がる階段の途中で俺はそうもらした。

「しっ……、もし敵がいるなら私たちを奥まで導いてる可能性もあるわ。もう、逃げ場がない以上進むしかないけどね」

「どうしていつもこうリスキーなことを……」

「ほら、黙って。もし私が敵ならサーバーから一つ手前のこの階で奇襲をかけるわ。用心しなさい」

俺は正直、適当に歩いていった。

ただ、半分あたりまで来たところでDiiosに何か表示されたよ
うな気がした。

その表示されたであろう場所までもどる。

「御影、なんかあったぞ」

「なんて出てるの？」

「ちよっと、待て今解析してるようだ」

解析し終えて画面に表示されたのは『担当地区』と名前のついた
ファイルだった。

『担当地区……って書いてあるが』

『よくやったわ。これで彼らの管理する地域が』

その時だった。俺の目の前が真っ白になる。眩しさに目がくらむ。
『伏せて！』

それは無線のみならず俺の耳に直に届くものだった。

俺はわけもわからず机の間に身を沈めた。

一斉につけられた蛍光灯の光。その光は俺の視力を著しく奪った。俺は御影に言われた通り、机の間に身を沈める。

パチパチと周りから音がする。

俺は今敵から撃たれている。

しかし、敵が見えない異常どちらに這って逃げればいいものかもわからない。

俺には四方八方に向け発砲することぐらいしかできなかった。

そんな時、ガシャンとおおきな音がたち、敵の発砲が止まった。

「こつちよ」

しだいに周りのものが見えるようになった時、御影の腕を取り、机の影に引きずり寄せた。

「敵は……どこだ？」

「見えるなら応戦して」

彼女はこの机の上へ顔を出し発砲した。

俺も彼女と同じ方向へ銃を打ち込んだ。

この部屋から伸びる通路の向こうに敵が三人居た。彼らは絶え間なくこちらに弾を撃ち続けてきている。

もしこちらに接近されでもすれば少数のこちらに圧倒的に不利だ。しかし幸いなことに、通路の入り口におおきなロッカーが倒れており、バリケードの役目をはたしていた。

俺と御影は机に身を隠しながら発砲し続けた。

互いに撃ち合えども当たらない。戦闘が膠着しつつあるそんな時、御影は言った。

「私が合図するまで撃つのをやめて」

「牽制しないと敵がこちらに近づいてくるぞ」

「いいから」

これまで彼女の策略の成果を考え、俺はどんな案かはわからない

が彼女に従ってみることにした。

といつても、それはたった五秒ほどの時間だったかもしれない。がたりという物音がするやいなや、彼女は「今、撃つて」と囁いた。

俺と彼女は机から身を乗り出し、ロッカーを乗り越えようとしていた敵に発砲した。

乱暴に叩き込んだ弾は二人に被弾したようだった。

「引き上げだ」

最後尾にいた奴がそう言い。彼らは通路の奥にある階段へと逃げていった。

御影は彼らを追おうとはしなかった。

「追わないのか？」

彼女は銃を持った手をくたりとぶら下げる。

「あの状況で被害無しで退却させたのよ。十分よ」

そう言いながら彼女は少し顔をしかめ、左肩を右手で包むようにさすった。

「どうした？ ぶつけたのか」

「そりゃあれだけのものに体当たりしたのよ。痛いに決まってるじゃない」

あれとはどうやら通路を塞ぐ倒れたロッカーのようだった。

つまり俺の聞いたガシャンという音は御影によってロッカーが倒される音だったらしい。

「敵の侵入を防ぐにはこれくらいしか思いつかなかったわ。二手に分かれていたのが幸いね」

「すまない、助かった。肩大丈夫か？」

「ええ、たぶん」

「一応俺が銃は持つとくよ」

「そういえば、見つけたファイルは？」

俺は発見したファイルを彼女に送信した。

彼女はそのファイルを調べる。

「サイズがゼロ……やはりダメーね。とにかく上も見ましよう」
彼女からぶら下がる左手の銃を俺は受けとり、床に倒れたロツカ
ーを起こし、警戒しながら階段へ向かった。

ビル内の蛍光灯はすべてつけられているようで階段も明るかった。
俺が先導でその先に敵がいなかったことを確認し、五階へと上がる。

五階へと上がると横手にある非常階段の扉が開いていた。

どうやら敵はここから逃げていったようだ。

部屋には誰もいなくポツンとサーバーだけが設置されている。

御影はサーバーへDiolsでハックを試みる。

「……何にも残ってないわ。もはや完全に私たちにここにくるだ
ろうと踏んで畏にはめられたわけね」

俺は盛大にため息をつき、その場にへたり込んだ。

全く、俺にしても御影にしても今日は大変な骨折り損だ。畏には
められるだけになってしまったことになってしまふ。すげえ、間抜け
じゃないか。今頃の総司令官様はご満悦だろう。

「まあとりあえず、このサーバーは私たちのものに……」

珍しくしよげた顔をした御影がホログラムに釘付けになっていた。

「このサーバーどこからコンタクトをかけられているわ」

「は？ なんだそりゃ」

彼女の口調が少しばかり興奮しているのが早くなった。

「敵はこのサーバーのデータは全て消したけど、それ以外を見落と
していたのよ」

「それ以外って何さ？」

彼女は俺の質問に逐一答える気はないようだった。

「とにかく、サーバーをハックして帰るわよ。目黒さんに分析を頼
むわ」

俺は彼女の荷物一式を抱え、急いたように歩く彼女を追って町へ
と戻っていった。

俺にとっては散々な内容だったこないだの作戦、しかし彼女は俺と違いある程度の成果を残せたと思っただけだ。それは今俺の目の前で力説する彼女を見ればよくわかる。

「先日の私と望月での潜入作戦によりビル内のサーバーをハックしたわ。それ自体も喜ばしいことだけどそれ以上に重要なのは、彼らの弱点を割り出すことが可能かもしれないということ」

彼女は腕組みをした状態から右手の人差し指をたてる。

「多くのサーバーをハックしてるなら当然どこか手薄になってるか、そこを狙おうってことか？」

光成がその意味を解釈した。

「いいえ、おそらく手薄、もしくは無人になっただけだ。そこはそもそも私たちではどうやってもハックできないわ」

彼女は否定する。

「どーしてだよ？ 楽に勝てればそれだけで結構だ。無人のところだなんてハックしにいかないでどーする」

彼女は人差し指を違うわねと言う様にふらつかせた。

そして視線を横に落とし何かを思案した後、俺たちに説明しはじめた。

「そーね、まずはサーバーのネットワークについて説明するわ。ハックした各所のサーバー同士はそれぞれを結びつけネットワークを構成することができるの。もちろんそれぞれのサーバー間のやりとりも円滑になり、情報伝達もしやすい。でも私たちが彼らハッカーにとっての利点はそれだけじゃない。ネットワークを形成することによってサーバーのセキュリティは相互に増強しあいとても強固なものになるの。もちろん私たちのハックする二三のサーバーではその効果も薄い。しかしそれがいくつもの数になれば、どんな攻撃にも耐えうるようになるわ。つまりそこを守る必要性はなくなるの。」

彼らの勢力化のサーバーには確かに手薄な場所がある。でも、そこはそもそも守る必要性がいくらいにセキュリティが高い場所なのよって私たちがそこへ出向いていくらハッキングしても無意味なのよ」

「逆に言えばセキュリティが低い場所もあるってことか？」

「そうね。ネットワークの中枢にあるサーバーほどセキュリティが高くなり、末端のサーバーほどセキュリティは低い。私たちのハッキングでも破る事が可能かもしれない」

「つまり、敵が重点的に守る場所はセキュリティが弱いから、そこを目安に攻めればいいのか」

俺は半ば勝手に話をまとめてみたつもりだった。

「いえ、そうとは限らないの」

「限らない？」

「ええ、確かに敵はセキュリティの低いサーバーも重点的に守ってるわ」

「低いサーバーも？」

「考えてみないさい。重点的に守るって事はそこがセキュリティが低いと公言するようなもの。それは敵だってわかってる。だから彼らはそれをカモフラージュする為にあえてセキュリティの高いサーバーにも多くの戦力を配置しているの。もし間違えてそんなところに攻め入ったとして、仮に敵を押ししてサーバーにたどり着いてもハッキングには長時間を要する。その最中到着するであろう敵の増援からの攻撃を耐え続けるのはどうしたって無理な話ね」

「セキュリティが低いサーバーと見せかけているとも考えられるわけだな」

「じゃあ、どーすれば本当にセキュリティの低い、つまりはお前の言う弱点を見つけられるってんだよ？」

光成は種明かしが待ちきれないようだった。

「今回手に入れたサーバーは複数のサーバーとの通信の痕跡が見られたの。そもそもあのビルサーバーは敵が私たちをはめるために

用意した囷のサーバー。もちろんそんな役に重要なサーバーを持ってきたりしない、当然あれは末端のサーバーよ。でも、末端のサーバーがなくなるといことはその次につながっていたサーバーが末端になるということ。そしてあのサーバーには他のサーバーとの通信の痕跡がある。つまりどうということだか思うかしら？」

「現時点ではその通信されていたサーバーが末端になっている、と」「そう、そこを狙えばいいの。敵はデータを消すことはしたけど、ネットワークから完全に切り離すことを忘れていたのよ。だから私たちがサーバーをハックしたにもかかわらず他のサーバーはビルのサーバーとコンタクトをとろうとしていた。もちろん今はそのミスに気づいたようでその反応もなくなった。でもそのときのデータは保存してある。目黒さん、これどれくらいで解読できそうかしら？」

御影は目黒へとファイルを転送する。

「……一週間くらい」

その覇気のない喋り方は普段と変わらない。

「休みに入るし、丁度いい頃ね」

そう、彼女の言うとおり来週より待ちに待った夏の長期休暇なのだ。といっても俺は例年は何もなくていいこと（宿題をのぞく）を楽しむにしていたのに、この発言によりどうやら面倒なことになることは必至なのでその待ち遠しさは半減した。

「はー、わかるまでまだそんなにかかるのかよ。何にもねえと体になまるぜ」

光成はそう言うっては話が終わったものだと思い、立ち上がった。

「だから今日は別の作戦を実行することにしたの」

御影の言葉に光成は興味を取り戻したようだった。

「弱点がわかんねえのに何を？」

「それは南高の勢力の話。今回はおそらく彼らのサーバーじゃないわ」

「奴らでなければ誰なんだよ？」

「それは私にもわからないの。だから今回はそれを調査する意味合

いもあるわ。場所はここ」

彼女はそういって地図で場所を示す。

「……ここにか？」

その場所はハッカーが暗躍するにはどうにも似つかわしくない場所だった。

御影の示す地点を確認した光成は、納得いかないような顔で言う。「ちよつと待て。俺が買ひ物でここを通つたときサーバーに不具合があるようには思えなかつたぜ。電話もメールもできたはずだ」

「そう。なんら問題はないわ、私たちが通常使用する分にはね。だけど、この地区でハッキング用のツールでサーバーにアクセスを試みるとシャットアウトされ、それからしばらくサーバーから拒否されてしまう。これは正常なサーバーでは起こりえない。誰かが作為的にこのサーバーを操作している証拠よ」

「それは南高の奴らの仕業ではないと？」

「目で見たわけじゃないから絶対とは言ひ切れないけど、彼らであるはずがないわ。彼らの行う悪質なサーバー操作が見られない。光成が言つたように通常の使用に関しては何の不具合もないわ」

「じゃあ、奴らでないとしたら誰だ？ 第一その操作は何の為に？」
「無数にいるハッカーの誰がやっているか私にはわからないわ。確かに不可解な操作だけど、ハッキングした人物が望めば明日にでも通信不能などの事態に陥るわ。そういう危険分子は早いうちに確かめておいたほうがいいんじゃないかしら？ 当面はやることもないわけだし」

「ま、俺は退屈しのぎだつたらなんでもいいさ。しかし、こんな場所にもハッカーが出るようになったのか」

光成の言う「こんな場所」。それは気品溢れる私立女子高と閑静な住宅街のあるサーバーの管理地区を指している。

今までハッキングしてきたサーバーは、陰気な雰囲気か漂ういかにもハッカー達に好まれそうな場所にあつた。しかし、今回サーバーのある場所はおよそそんな雰囲気か漂うことなど想像するにできない場所だ。

南高の奴らでないとしてもそのような場所にハッカーがいるなど

俺にもあまり納得のいかないことであった。

放課後、屋上に集められた俺たちはこのようなやりとりのあと、すぐさまそのサーバーに向けて歩き出した。

「歩きだと結構遠いよなあ。……待てよ、確かあそこに」

橋の近くに差し掛かった頃、最後尾を退屈そうに歩いていた光成が突然俺たちを離れ橋の下へと向かいだした。

「どこへ行くの？」

それに気づいた御影が呼び止める。

「ちよつと待ってな」

彼はそういうと橋の下へと入っていった。

そして、すぐに彼が橋の下から出てきた。

しかし、両手はボディのところどころがさび付いた自転車を引いていた。

「遠いんだし。チャリ乗ってこうぜ」

俺たちの元に戻ってきた彼は言う。

彼が持ってきたのは橋の下に長らく放置されていた自転車であった。

「却下ね」

しかし御影は以外にもあっさり切り捨ててしまった。

「そんなもの持ってたら足がつくわ。止めてあったらハッキングしにきました、もしくは今サーバー防衛中ですって言うようなものじゃない。大半のハッカーが自転車を移動手段として利用しないのはそういう理由なわけ」

「確かにチャリ乗ってるハッカーなんて見たことねえな。ま、これは俺が個人的に使わせてもらうさ」

「おいおい」

そういつて彼は自転車を再度橋の下に持って行きサドルを利用しきちんと駐車していた。

道中俺は彼女の話していたネットワークのことについて詳しく聞いてみた。

「御影、敵がそういうネットワークを構築しているなら俺たちもできるってことだよな？」

彼女は横に並んだ俺に目をくばることもなく、前を向いたまま俺に答える。

「ええ、もう既に手にした四つのサーバーでネットワークを構築しているわ。技術的な面に関しては私も詳しくないから目黒さんに頼んでいるんだけど」

「てことは、敵の攻撃を心配しなくてもいいサーバーもあるのか？」

「今は橋の下にあるサーバーを中枢にしているからそこが一番セキュリティが高いことにはなるけど、四つをつないただけでは正直効果は薄いわ」

「じゃあ、まだそれぞれのサーバーに気をかけていなければならぬいか」

「でももし今日五つ目を手に入れられれば、他のサーバーから駆けつける間、敵のハッキングを防ぐことができるセキュリティに増強できるかもしれないわ。そうすれば今末端にしている港、そして路地裏のサーバーを中心に守ることができるわね」

彼女が今日新たなサーバーを調査しに行くのはそういう理由もあったようだ。

「あと、今思えば橋の下のサーバーといい港のサーバーといい別にハッキングするのに対して苦労しなかったが、あれは敵の末端のサーバーだったってことだよな？」

「ええ、だから攻め入ったに決まってるじゃない」

「お前、よく末端だってわかったな」

「あの二つのサーバーは比較的新しく彼らにハッキングされたものだからネットワークの中枢には持つてこないと思ったのよ。あと、配置された敵の様子ね。あきらかに下っ端だったもの」

「しかしそれって憶測だよな……、もし違ってたらどうなったことか」

「結果成功してるんだからいいでしょ？ さて、ここから管理区域

内よ
「

町の中心部を抜け俺たちは区画整理された住宅街に足を踏み入れた。

「装備はいいのか？」

これから区域内に入るにあたって彼女は特に何かを装備しようとはしなかった。

「こんな場所であんな格好したら浮いて浮いてしようがないじゃない」

放課後集まった後ここまで歩いてきたゆえに、もう下校中の学生は少ない。といっても、一般人も通るかもしれないこの道をそんな格好で通ることはできない。俺たちは何の武装もせず（御影だけは例によってスカートの下に銃を潜ませているようだった）ごく自然なよう振る舞い進んだ。

いくつか角を曲がった時、御影はぼそりと口元だけを動かした。

「みんな、適当に私の話に合わせて」

「は？」

そういったかどろかはずきり確認する間もなく、今度は対照的にこちらに振り向き、手を後ろで組んで、そのままこちらを見上げるように後ろ歩きしだすと同時に言い放った。

「ねえ、私こんなに遠いなんて思わなかった。聞いてないわよ」

それは相手に対する非難というよりはすねたような口ぶりだった。俺は突然投げかけられた意味不明な苦情にわけがわからなくなる。

しかし、その口調とは対照的な彼女の表情が意図することで、なんとなくこの状況を整理することができた。

彼女の目は発言とは関係なく、彼女の背面、つまり俺たちの前方に注意を向けるといわんばかりに視線を後方へ流し、小さく首をそちらに振った。

俺も視線だけそちらに向けると、向かいから一人でこちらに向かって歩いてくる人物がいた。

ローファーにシックなブラウンのスカートを召した女学生。例の

女子高の生徒だ。制服もそうだが彼女自身の歩き方やその落ち着いた雰囲気により一層上品さを高めていた。俺や光成はおそらく一生お近づきになれないであろう。そんな俺たちハツカー風情とは違ったオーラを放っていた。

「そもそも店選びはあんたでしょ」

俺が少し女学生に注意を払いすぎている間、御影は光成に言い寄っていた。

「知るかよ。あそこしかねえんだよ」

「そんなわけないでしょ。もっと近くにあったでしょ？」

「知ったことか。そんなにいうならお前が選べば良かったんだ」

御影と光成の名演技はここからさらに加速する。

「道具の買出しならまかせとけっていったのは誰よ?! そーいったから頼んだんでしょ」

俺もここで加わる。

「まあまあ、もとはお前の役割だったわけだし……」

「え、なに私が悪いっていうの?」

「いや、そーとまでは……」

「あんた帰りアイスおごりなさいよ」

御影はびしりと俺を指差す。そしてそんな俺たちの横を女学生はこちらに注意を向けるともなくすれ違っていく。

「なんだよそりゃ」

「だそうだ。買ってやれよ」

光成が横から口をはさむ。

「いや、お前が怒られてた話だろ」

と、ここまで演じきったところで、女学生は後ろの角を曲がって見えなくなった。

「うまくごまかせたんじゃねえか」

光成が先ほどより喋りのトーンを落とした。

「突然何かと思ったが、確かにこんなところを距離の離れた他校の生徒が集団で、しかもみんな無言で歩いてたらなおさら怪しいしな。」

しかし、別にあの子に怪しまれたって問題はないんじゃないか？」

「私たちと敵対しない無関係の人であろうとも、それに怪しまれては敵に存在を悟られやすくなるでしょ。なるべく同化する、それが無理ならこの場に居ることに対する妥当性を高めるべきよ」

「それはそうと……お前かなりの演技派だな」

「そうかしら、誰しもあんなもんじゃないかしら？」

演技の時の表情はどこへやら、彼女は涼しい顔でそう言った。

いや、目黒は一言すら喋ってなかったが、……まあ彼女は彼女で標準とは逆の意味で遠いだろうが。

「また誰かきたらこんな感じでよろしく」

そして俺たちは後にすれ違った買い物帰りのマダムとカートを引いたお婆さんそれぞれを御影主演の寸劇でやり過ごし目的地の見える角についた。

「あの中にサーバーがあるわ」

「なあ、さっきの婆さんに対してする必要なかったんじゃないのか？」

「もう、それは終わったの。今はこっちみなさい」

俺は角から彼女の指すほうを覗く。

「あの建物にか？」

「ええ、あの建物に」

言葉半分に彼女は突然後ろを振り返った。

「どうした？」

俺も後ろ振り返るが誰も居ないT字路だけがそこにあった。

「……いえなんでもないわ。続けるわよ」

サーバーの周辺は不自然なほど静かだった。

「近辺を歩いてみると、あの建物に近づいているほど通信状態が安定する。たぶんサーバーはこの中にあるはずよ」

「しっかし、なんつーレトロさだよ」

光成の言うとおりのその建物は周りにある真新しい住宅と対照的に非常に古そうだった。改修されている為か壁や屋根そのものはきれいだ、その作りと風貌はおそらくはるか以前に建てられた洋館と呼ばれるものだと思われた。俺自身教科書で見たことがある程度なので、厳密にそれに当てはまるかどうかはわからないのだが。

最近開拓されたこの住宅地の中で、その洋館だけ時代の波に取り残される中、何者かに見つかるまいとするかのように息を潜めぼつりと立っていた。

「どうしてこの建物だけ残ってるのかしら？ この一帯はもともと何だったの？」

「俺はつい最近越してきたんだ。知らねえよ」

「俺も同じだ」

つい二年前この街に越してきた俺たち、そして転校生の御影にわかるはずもない。

「目黒さん、あなたこの街で育った？」

目黒に御影は訊いた。

目黒はこくりとうなづいた。

「じゃあ、わかる？」

目黒は思い出しながら話した。

「……工事。何か工事してた。でもその前は知らない」

結局、俺たちにこの疑問をこの場で解消することは不可能だった。「まあ、なんであれサーバーのハッキングには関係ないわ。中を調べれば大体検討もつくはずよ」

俺たちはあたりに人がいないことを再度確認し、洋館の門へと向

かった。

門の横にはこの建物が何であったかを示していたであろうプレートがとりつけられていたのではないかと思われる長方形の跡が残っていた。その部分だけ他の部分より色が白くいくらかきれいであった。

鉄格子の大きな門には鍵はなく、鎖でもつとも端の格子同士が一周巻かれているだけであった。

光成がその鎖を解くとなんの抵抗もなく門は開いてしまった。

「管理されてるわよね？」

手入れされているように思われる洋館の庭と容易く開いてしまう門の不和に彼女はどうにも納得がいかないようだった。

門の中まで入ると塀のおかげで周囲からは見えなくなる。ここで俺たちはそれぞれ装備品を身に着けた。

「準備はできた？ じゃ、入るわよ」

御影は木製の両開きの扉の、鍍金のはげかけたアンティーク調のノブを握る。

ゆっくりと音を立てまいとそれをまわす。

ちいさなカタツという音がなり、すべるように開き始める。

十センチほど空き、彼女はその手を止める。

「合図したら行くわよ」

彼女は「さん、にい、いち」合図を送ると、力いっぱい扉を押し開け中へ入り込んだ。

俺たちもそれに続く。

御影は四方へ銃口を向け、安全を確認する。俺も一応左の方へ同じようなポーズで注意を払ったふりをしていた。

広い空間だった。そう、これはおそらく部屋とは呼べない。俺たちのいるこの空間の奥の左右の端はそれぞれ奥に向かって伸びる廊下がある。そして部屋の左右から曲線を描いて伸びる階段が中央で一つとなり二回の廊下へとつながっている。二階も一階と同様に廊下が奥へと伸びている。床や手すり、あらゆる箇所に使われた木材

のほこりをかぶったような臭いが長い年月を感じさせた。

「誰もいないわね。一部屋ずつ調べるわよ」

「これ映画みたいだぜ」

光成がはしやぎながら一人で階段を上りだす。

「待って。下から見」

「どつちからでも一緒だろ？」

御影が言い終わる前に光成はそう言っ上りの廊下まで上がりこちらをすり上から見下ろしていた。

御影は話を聞こうとしない光成に折れたようで、やれやれと階段を上りだした。

「しかたないわね。私と光成で前に進むから、二人は念の為に後ろを頼むわ」

俺たちは光成を追って二階の左にある廊下に向かった。

廊下は二十メートルほど続いており、右手には窓、左手には四つのドアが並んでいた。先に来ていた光成はその右手の窓から下を除いていた。

「すっげえ中庭だぜ」

その窓からは彼の言うとおり花や草木に彩られ中央に小さな噴水が設置された中庭が確認できた。中央の噴水は枯れ、水は流れておらず、そこに水を留めているに過ぎなかったが、その手入れのされ方から今現在も誰かが管理し仕様しているとしか思えなかった。

「廊下に囲まれるようにできてるのね」

向かいにはこちらと同じように窓が並んでいる、あれがおそらく右側の廊下の窓であろう。

「いつまでも見てないで部屋を調べるわよ」

「今度は俺が先に入るぜ」

光成は興味の対象を窓の外から手前一枚扉に移し、窓辺を離れた。

「ええ、別にかまわないわ」

御影も窓を離れようとしたが、ふともう一度窓の外へ視線を送っ

ていた。

「どうした？」

「……いえ、なんでもないわ。一応後ろお願いね」

そんなことを言っている間に光成は勝手に扉を開け部屋へと入ってしまった。

「あ、もう。少し待ちなさいよ」

御影があきらめ口調に注意を促す。

「こんなにすんなり入れてるんだぜ。こんなに静かなんだし誰もいねえって」

光成は中を確認しながら言う。

「いえ、静か過ぎるのよ。まるで、息を潜めているみたい」

「いないってだけの話だって」

部屋の中央には八人が着座できる長方形のテーブルとイスが置かれていた。

御影はテーブルの表面に指をすべらす。

「今も使われてるわ」

彼女は指先にホコリがまとわり着かないことを確認する。

その後、三つの部屋を全て調べたが同じようなものであった。

ただやはり使用感はどうしても否めなかった。

廊下は突き当たりで右に折れ、反対側の廊下とつながっていた。

そしてそのつながった部分の中央には横に大きく広がった両開きのドアがあった。

「推定位置ではこの奥にあると思われるんだけど」

彼女はドアノブを回す。しかし、鍵がかかっているようで開けることはできなかった。

「どうする、ここが一番可能性高いんだろ？」

「この推定位置は二次元表示なの、幅と奥行き、つまり高さは関係ない。と、すると？」

彼女の誘導尋問に俺は答える。

「下か」

「一応、他の部屋も調べながら下に向かいますよ」

俺たちは右の廊下の各部屋も調べもとのエントランスへと戻ってきた。

「なんか全部同じような部屋だったな」

「そうね。何に利用されているのかいまいちわからないわね」

俺たちは階段を下り、一階の廊下へ向かおうとした。

しかし、御影だけ立ち止まり後ろを向いていた。

意気揚々と先陣を切る光成とそれをとぼとぼついて行く目黒だけ気づかず廊下へ進んでいく。

「ねえ…… ドア開けてたわよね？」

彼女は俺に問う。

彼女の視線の先には俺たちが侵入した扉がある。それは入る前と同じように閉じていた。

彼女はドアへ近づきノブを掴む。

しかし、俺たちの悪い予感とは裏腹に扉は何事もなく開いた。

「はあ、また先日のようになるかと思っただぜ」

御影が用心深く扉を調べるがやはり変わった様子はない。

「風で閉まったただけだろ？ 気にすんな。もし敵ならこないだみたいに閉じ込められてる」

御影は俺の意見を受け入れた。

「ええ……、でもこんな重い扉、風で動くかしら……」

光成達を追う際も彼女は、しきりに後ろを振り返っては扉を見つめていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3939h/>

Hack Revolution

2011年12月18日03時10分発行